

【付録】

各国語訳『源氏物語』『十帖源氏』

「桐壺」翻訳データ

(スペイン語・イタリア語)

❁ 『十帖源氏』 現代語訳のルール

◆ 現代語訳について

- ・ 海外の人が理解できるように、平易な文で訳すことを旨とする。
- ・ 公立高校入試を控える中学3年生くらいのレベルで現代語訳を作っていく。
- ・ 「です」「ます」体に統一する。
- ・ 主語を明確にする。
- ・ できるだけ理解しやすいように言い換える。
- ・ 文はできるだけ切る。
- ・ 敬語にはこだわらず、忠実でなくともよい。
- ・ 敬語は帝につける程度でよい。
- ・ 「何とか」といった抽象的な語はさける。
- ・ 「方」は、「女性（女）」「男性（男）」「人」などの語に置き換える。
- ・ 「もの心細げ」の「もの」は、心細い「様子」といったように訳出する。
- ・ 訳文は1文が長くないようにする。1文は50字くらいまでの長さが好ましい。100字以内に収めるようにする。
- ・ 「そば」という言葉を用いるときは、平仮名表記。
- ・ 和歌は訳さず、句ごとにスペースをおき、表記通りにする。
- ・ 「女房」は混乱をさけるため、「侍女」などの語に変換する。
- ・ 巻名に括弧はつけない。
- ・ 卒業論文を書くような大学生が手書きで書けないような漢字表記は平仮名にする。
- ・ 誤字や表記上誤解を招きそうな箇所には、翻字に（原文通り）を入れ、現代語訳では直して表記する。和歌の場合、翻字はそのままにし、訳は直して表記する。
（例）翻字「じま（原文通り）」→訳「しま（末摘花巻）
- ・ 時制は、基本的に原文に従う。ただし、訳出する際に不都合・影響が出ない場合に限る。

- ・分量・数値は算用数字にする。
- ・「人は皆」といった場合は「人々」に変更する。
- ・その他、漢字表記や言葉の意味など、困った場合は、旺文社の辞書・日本国語大辞典を使用する。
- ・「対」は「館」にする。（「西の対」→「西の館」）
- ・逆接の「が」は極力使用しない。

◆注について

- ・注は原則つけない形とする。・まず現代語訳を作り、訳者から注の依頼を受ける、という形にする。・現在保留。公開時にどうするか検討。
- ・なるべく注がつかないように、名詞は平易なものにたとえる、説明的に訳出するなど、固有名詞を使わない工夫をする。

◆絵について

- ・絵は場面の説明をつける。説明は、5W1H (Who (誰が) What (何を) When (いつ) Where (どこで) Why (どうして) How (どのように)) を書く。
- ・絵のキーワードを現代語訳の中から5つ選び、訳に《 》をつける。
- ・絵のキーワードは、ネット公開時に色をつけるか。

◆登場人物呼称

※登場人物名の一部は、本文の漢字表記を通行の表記に改めてある。

(例)「御休所」→「御息所」、「義清」→「良清」

※「頭の中將」「紀伊の守」など、「の」を補う形を基本とする。

※本文の呼称を載せる際は、「統一呼称(本文呼称)」の形とする。

※人物呼称の表記は、新編日本古典文学全集(小学館)に倣う。

◆主な登場人物

- ・巻の冒頭に主な登場人物の紹介を入れる。
- ・5～10人程度の人数を挙げる。

各国語訳『源氏物語』『十帖源氏』「桐壺」翻訳データ（スペイン語・イタリア語）は、『源氏物語』『十帖源氏』の順番で次ページより掲載しています。

小見出し	原文（池田本校訂本文・伊藤先生作成）	スペイン語訳し戻し（1） Gutierrez 訳 底本：アーサーウェイリー訳 （濱口さん）	スペイン語訳し戻し（2） Roca-Ferrer 訳 底本：不明 （濱口さん）	スペイン語訳し戻し（3） Jordi Fibla 訳 底本：ロイヤル・タイラー訳 （濱口さん）	スペイン語訳し戻し（4） 下野先生&ピント先生訳 底本：ペルー版旧全集 （濱口さん）	スペイン語訳し戻し（5） 下野先生&ピント先生訳 底本：ペルー版旧全集 （テレサさん/母語話者）	スペイン語訳し戻し（6） アリエルさん訳 底本：陣野先生作成 （濱口さん）
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する「いつれの御時〜」（0001/五①/一七）	いつれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむことなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我とは思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下屬の更衣たちは、まして安からず。	ある皇帝の宮廷において一どんな時代かは重要ではないが―宮廷の多くの侍女と貴婦人たちの間で低い身分の女性が暮らしており、他の誰よりもひいきにされていた。宮廷の女性たちはそれぞれが密かにこの寵愛を望んでいたが、彼女たちの夢を無益なものにした成り上がり者に軽蔑と憎悪を感じていた。彼女の教養がない付き人、つまり宮殿の侍女たちもまた彼女の世に満足していないようであった。	ある皇帝の宮廷で、彼の名前と王位についた年は省略するが、貴族階級の上位に属していないのに異論のないお気に入りの女性になるほど主人をとりこにしていたある貴婦人が住んでいた。当然のように、君主の心の中の特権的な彼女の場所はすぐに上位の階級の他の貴婦人の敵意と軽蔑を買ひ、宮中のどの貴婦人も決して告白はしないが、ほとんど全員が持っているかもしれない願望や夢を粉々にしたと彼女を非難した。位の低い昔の仲間も彼女にもう同情を見せず、そうして、彼女があまりに自分たちより上にいるのを見ると、深く屈辱を与えられているように感じていた。	ある治世（どれであったらうか？）において、あまり身分の高くない誰かが陛下の配偶者たちや懇意にしている者たちすべての中でも例外的なひいきを享受していた。その他の者たちは常に自分たちが占めている高い地位への独占的な権利を持っていると常に考えられてきたので、彼女たちにはひどく醜いと思われたあの女性に対してはなほだしい軽蔑を感じていた。その一方、身分の低い懇意にしていた者たちはいっそう哀れであった。	どの王国であったか―私は知らないが、皇帝に仕えていた妃たちと取り巻きの女性の中に非常に立派な名門の出身ではないが誰よりも明らかに寵愛を受けていた女性がいた。原則として、最初に君主を独り占めできることを鼻にかけていたであろう者たちも彼女をねたんで中傷をし、許し難いと非難した。彼女より同じあるいは身分の劣る周りの女性たちに関してはなおさら理性を失った様子を見せていた。	どの御代か、判らないが、帝に奉仕するたくさんの妃たちと身の回りの方々の中に、身分がさほど高くないけれども、他に誰よりも、あらわに寵愛を受ける一人がいた。原則として、帝の寵愛を我がものに自慢できそうな方々は、癪に障る人だとのレッテルを貼り、その人を妬んで辱めていた。同じグループの方々、同・下級の来歴の者は、道理により不満に思った。	どの治世の間だったらうか？陛下に仕えていた多くの配偶者や内縁の妻の間に、位の割にはひいきめでげさな扱いを受けていた人がいた。最初から「私でしょう」と誇り高く思っていた貴婦人たちも、憤慨し、彼女を軽蔑して嫉妬していた。彼女の同じ位あるいは下位の愛人たちはよりいっそう多くのねたみを感じていた。
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる「朝夕の宮仕〜」（0031/五④/一七）	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのり動かす、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかはずあはれるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。	このように、宮殿での彼女の立場は優勢なものがあったけれども、継続的なねたみに彼女をさらした。後に、取るに足らない復讐に疲れて、衰弱し、陰気になり、より頻りに家に引きこもり始めるようになった。しかし、皇帝はこの事態をよしとするどころか、彼女がすでに快活でなくかつてのように健康ではなかった時に、日増しに甘い言葉彼女にはっきりと言った。あらゆる警告に耳を貸すことを拒否して、このような振る舞いは国じゅうの中傷的であった。身分の高い人物や宮廷人たちは理解できない愛に反感を抱いていた。	その不幸な貴婦人は、あらゆる類の嫉妬や敵意にさらされ、最もさしい侮辱の絶え間ない対象となり、病気で倒れ、宮殿よりも自宅より多くの時間を過ごす悲しく憂鬱な人に変わった。それにもかかわらず、皇帝は自分を魅了した健康で陽気な女性でなくなったと決して非難したりはせず、過ぎる日々をより大きな優しさで愛情を彼女に見せていた。彼の分別のない行動を非難する人は大勢いたが、君主は彼らを相手にしなかった。少しずつ皇帝の情熱があらゆる会話のお気に入りの話題になった。	来る日も来る日も皇帝に仕えていたので彼女に対して反感を呼び起こすだけであった。そしておそらく彼女の健康に影響を及ぼし、しばしば苦しみでいっぱいになり自分の部屋に閉じこもることを余儀なくさせたのはたぶんこの増大する恨みの負担のせいであった。しかし、陛下は彼女への依存が大きくなっており、彼女を非難する者たちを気に留めず、彼の振る舞いは皆の物笑いの種に向けられているように思われるほどまでであった。高い身分の貴族と私的な集まりの紳士たちだけは目をそのような悲しい見世物から目を背けることができた。	彼女は君主へのお仕えに呼ばれ朝も晩も出かけるのでライバルたちは苛立つばかりであった。そして、明らかにあまりにも恨みをかいすぎてしまったせいで体調を著しく崩してしまいより多くの時間を家族のもので過ごすことになったのだが、そのことで皇帝は極度に悲嘆し心を痛め、中傷にも気を留めず彼女に惜しみなく尽くした。それが次なる不運を生み出すこととなった。高官や宮廷の人たちは色めき立ち、横目ながらにあれは見るものを苛立たせる情念であり、	彼女こそ、朝夕帝の使に召されること、ライバルたちのイライラは極まる。まぎれもなく、こんなに嫉みを誘う故に、体調が狂わせられて、より長い時間を実家に過ごすことになっていったことによって、帝は大変悲しくて胸打たれた上に、諍りを気にせずして、不幸な例をたてかねないほどの愛顧を度量に示しつつ。高官と廷臣は、激怒して目を側めながら、目に障る熱情だと言ひ、	朝も晩も宮廷で仕えていて、人々の心をあおり、おそらく彼女に反対するものに蓄積した恨みによって、少しずつ重い病にかかった。とても悲しく見られ、自分の部屋に居がちで、彼女に対して憐れみを感じる一方で、陛下はよりいっそう彼女を欲して、人々の批判を前にしてさえ自生することができず、彼の行動は確かに世間の噂話に変わっていった。身分の高い貴族も低い貴族も同様に恥ずべきもので目をくらましているえこひいきを前に苦惱をして視線を遠ざけていた。
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る唐土にも〜」（0073/五⑧/一七）	唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなうものもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類ひなきを頼みにて、まじらひたまふ。	海も向こう側の国では同じような出来事が革命と災害の原因であったと小声で言われていた。後に国民はぶつぶつと言ひ始めた。そのお気に入りの女性は玄宗皇帝の愛人だった楊貴妃になぞらえられる。しかしながら、それほどの不満にもかかわらず、彼の愛は彼女を守り、誰もあえて彼女を侮辱しようとはしなかった。	中国ではとてもよく似た話が反乱や災害を呼び起こしたと話し、低い声で彼女を不幸な楊貴妃と比べた。	そのようなことは中国であっても混乱と破滅につながり、不満が王国に広がるにつれて、楊貴妃の例がその貴婦人にとっての多くの痛ましい結果と共になおさら皆の心に浮かんだ。しかしながら、彼女は寛大で比類ない皇帝の愛情を信頼して宮廷に居続けた。	すでにモロコシでは似たような状況で忌まわしい結果となった混乱が生まれたのだと口にしてきたものだった。そうこうするうちに帝国全土で楊貴妃の例を常に思い起こさせるような悲嘆が広がり、そして全てが敵のように見えたにもかかわらず、君主が授ける比類ない寵愛を信じ、宮廷での生活を続けていた。	夙にモロコシに、似たような状況によって、煩わしい結果を招いた混乱が起こっていたということ。とかく、楊貴妃の例が喚起するほどの狼狽え国全体に広がっていたが、事情が困窮であるように思われながらも、彼女のように見えたにもかかわらず、彼女が唯一無二の寵愛を頼りにして宮殿生活を続けた。	同様の出来事が混乱と暴力をもたらした中国のように、我々の地でも、少しずつ人々の苦い苛立ちの根に変わった。彼女は中国の皇帝の玄宗がすっかり惚れ込んだ愛人の楊1の例を想起させていた。彼女の苦しみは多かったが、陛下の比べものない寛大さを信頼して宮廷に居続けた。

<p>4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言～」(0103／五②／一八)</p>	<p>父の大納言は亡くなり、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の気色をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。</p>	<p>彼の父はその時亡くなっていたが参事になっていた。彼女の母は決して彼女の社会的立場を忘れなかったが、多くの犠牲を払って彼女にすばらしい教育をほどこした。それは富によって非常にひいきにされていた親族をもつ少女たちの特権をなしていた。聡明な後見人が彼女に気を配っていてくれれば望ましかったのだが。しかし、不運なことに彼女の母が完全に世界で一人だけであり、多くの体験した心配によって助言や元気づけるものがない苦しみを何度も彼女が悔いた。</p>	<p>彼女の父は、皇室の参事官で亡くなっていたが、彼女の母はいつも夫の社会的立場を忘れなかったが、多くの犠牲を払って彼女にすばらしい教育をほどこした。それは富によって非常にひいきにされていた親族をもつ少女たちの特権をなしていた。聡明な後見人が彼女に気を配っていてくれれば望ましかったのだが。しかし、不運なことに彼女の母が完全に世界で一人だけであり、多くの体験した心配によって助言や元気づけるものがない苦しみを何度も彼女が悔いた。</p>	<p>彼女の父は大参事で亡くなっており、他の父が存命で全般的な敬意を享受していた者たちよりも宮廷行事により少なく参加することがないように従事していたのはある昔からの家柄の出の貴婦人である彼女の母であった。しかし彼女を支えられる影響力のある人に誰もあてにすることができなかったので、しばしば折にふれて立場の弱さを嘆くための理由を持っていた。</p>	<p>彼女の父は大参謀であったがもう生きていなかった。母は正妻で保守的な考えに確信を持った良い血統の人で、父の援護で最も褒めそよされる名声を享受していた者たちの経歴と違わないために、確かに彼女の宮廷での経歴の準備をしていた。そうはいつでも、彼女の娘は影響力のある大物の誰の助けにも恵まれることがないだろうと思っていたので、必要となればささいな手段も当てにならないだろうという考えから気をもんでいた。</p>	<p>父の大納言はもう生きていなくて、正室の母は、保守的なおもむきの良い血筋の方で、朝廷でのキャリアにあたって、父方の後見を受けながら世間の有望な評判が高い方々と異なりなくするために準備を整えていたが、それにしても、娘は影響力のある方の支持を期待できなくて、必要のある時に何の支援を頼ることできないと悩む。それ故に不安感がつづいた。</p>	<p>大参事の彼女の父は亡くなっていた。彼女の母は正妻で、ある昔からの家で、両親をあてにしている大きな名声と華麗さをもった家の出の貴婦人たちに越されたいために全てのことをして、宮殿のあらゆる催し事に参加するために彼女を支えていたが、彼女を支える男性の親族がいなかったため、援助がないため意気消沈しているようであった。</p>
<p>5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも～」(0136／六①／一八)</p>	<p>前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひめ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちごの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君、と世にもてかしづききこゆれど、この御匂ひには並びたまふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。</p>	<p>でも、娘に話を戻しましょう。しかるべき時に彼女は王子を産んだ。疑いなく前世の恩恵によって、帝国全土で最も聡明で美しい子供であった。皇帝は、待っている日々の間、ほとんど好奇心を抑えることができなかった。しかし生まれたばかりの子を紹介されたとき、人々の噂は彼の美しさを何ら強調していないということを確信した。右大臣の娘であるコキデンの貴婦人が産んでいた息子の美しさを何ら強調していないということを確信した。右大臣の娘であった息子を介したとき、噂は少しも自分の子供の美しさを誇張していないと確認することができた。母親の事がかつてそうであったように愛していたので、独占的に彼らに子供を受け入れた。</p>	<p>時が来て、お気に入り若い女性は皇帝にとっても美しい王子を贈った(おそらく前世ですでに何らかの形で結ばれていたのだろう)。慣習により父親は新生児に会うまで数週間待たなければならなかった。君主はこの時間を気をもんで過ごし、赤ん坊が宮廷について姿を現したとき、噂は少しも自分の子供の美しさを誇張していないと確認することができた。母親の事がかつてそうであったように愛していたので、独占的に彼らに子供を受け入れた。</p>	<p>陛下はまた前世においても彼女に深いつながりを持っているに違いない。非常に美しい息子を産んだのだから。皇帝は息子をただちに連れてくるように頼んだ。会いたくてたまらなかったので。そしてその美しさに驚いた。彼の年上の息子は彼の配偶者である右大臣の娘が生んだのだが、強力な支えを享受しており、皆が疑う余地のない未来の皇太子として手厚くもてなしていた。しかし、外見は弟のそれと張り合うまでもなく、結果的に陛下はしかるべき全ての敬意を与えつつも、個人的な愛情は新しく来た者に傾けていた。</p>	<p>前世での彼女を皇帝とつなげていた絆は深かったのであろう、こうして彼女は世界で同じものがないただ一つの宝石である美しい息子を産んだ。皇帝は我慢を抑えることができ、すぐに宮殿に我が子を連れてこさせ、自らの目で子どもの顔立ちがまねにみるほど美しいことを確認することができた。実のところ、第一王子は右大臣の娘である皇帝の妻が生んでおり、強力に守られていて、推定される後継者でなければならないということも誰も疑わないように細心の配慮がなされていた。しかし、美しさに関してはあの年下の王子と張り合うことはできず、彼が君主の頭の中では優先的な位置を既に占めていて、私的には限りない愛情を与えていた。</p>	<p>陛下と前世のゆかりが深かったのだろうか、それ故に世にまたとない希な玉の美しい子を生むことができ、見つめた。並外れた美しさの子供であった。第一王子は右大臣の娘である夫人の息子であったが、しっかりとした援助を享受しており、全員が王座の疑いのない後継者として念入りに育てていた。しかしながら、まばゆいばかりの美しさのために彼と比べることができる人がおらず、だから、陛下が第一王子はまったくこの上ないものだと考えていたが、内々にひいきにしていたのはこの2番目の方であった。</p>	<p>おそらく彼らは前世で深いつながりがあったので、この世で比類のない宝石のようなすばらしい王子が生まれた。皇帝は、彼に会うのが我慢できず、「早ければ早いほどいい」と考えながら急いで彼を連れてこらせて、見つめた。並外れた美しさの子供であった。第一王子は右大臣の娘である夫人の息子であったが、しっかりとした援助を享受しており、全員が王座の疑いのない後継者として念入りに育てていた。しかしながら、まばゆいばかりの美しさのために彼と比べることができる人がおらず、だから、陛下が第一王子はまったくこの上ないものだと考えていたが、内々にひいきにしていたのはこの2番目の方であった。</p>

<p>6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立場に疑いを抱く</p> <p>「はじめより～」(0184 / 六一〇 / 六一九)</p>	<p>はじめより、おしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとくなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることの節々には、まつ参上らせたまふ、ある時には大殿籠り過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子のあたまふべきなめり、と一の御子の女御はおぼし疑へり。</p>	<p>不運なことに、キリツボの貴婦人は大宮殿の残りの宮廷の女性の持っていた社会的な条件を欠いていた。そして、激しい愛と異常な振る舞いにもかかわらず、何らかの宴会や重要な会議の時に常に一緒にいるために彼女を続けて呼ぶというその時から彼女を続けて呼ぶというその時から取った決断は皇帝に多くの心配を犠牲として払わせた。</p> <p>時には朝起きるときまで彼女をそばに引き留め、一瞬たりとも部屋に引き上げることを許さなかった。確かに、彼女はいやおうなく永続的な奉仕をする貴婦人となっていたけれども。そのようにしてコキデンの貴婦人は恐れを抱いていた。もし用心をしていなければ、新しい王子は皇帝があからさまな偏愛を感じていて、すぐに東の宮殿の部屋を占有し始めるだろう。彼女の競争相手はこうして彼女に対する優越を手にするだろう…</p>	<p>母親は中級の階位で他のより位の低い女性たちのように個人的に皇帝の世話をする義務がなかった。だから男性はいつも彼女を傍に置いておくことに固執して、夜に行われた彼に敬意を表して歌ったり演奏したりする即興で行われた祭りにさえも出席を要求した。時には昼間まで一緒に寝ていて、その時は憤り深さに欠けると女性が非難していた宮殿の醜聞と共に彼女を行かせさえしなかった。子供誕生が君主の議論の余地のない彼女のお気に入り立場を強固にした。だから右大臣の娘で皇帝の正妻で長子の母であるコキデンがもし彼女が劇的な対策を取らなければその子供が最後には王冠の継承者に任命されるようになることを恐れ始めたのは不思議なことではなかった。</p>	<p>その女性の身分では陛下の習慣的に仕えることは許されなかった。良い評判と貴婦人の高貴な振る舞いにもかかわらず、そばに彼女を置いておくことに固執したことは、音楽あるいは他の種類の催し物に行くたびに、最初に彼が考えたことは彼女を探しに行くよう頼むことであるというこを意味した。時には少し寝入りすぎてしまった後に、彼と一緒にいるように命じて、そして彼女が去ることを許すことへの否定的な返事によって貴婦人を軽蔑に値するように思われるようになった。しかし子供が生まれた後はとても注意を払っている様子だったので、彼の長子の母が自分の息子に代わって新しい彼の息子を皇太子に指名しうるのでと恐れていた。</p>	<p>彼の母は陛下のお世話を担当していたほど身分が低いわけではなかった。むしろ人々の敬意を得て、あたかも高貴な家柄の出であるかのような威厳を放っていた。しかしながら、君主が彼女に愛情を注いでいたので、動機も理由もなく彼女がいることを求めたため、慣習による夕べの集まりや他のどのような機会であっても彼にとっては彼女を自分の前に呼び寄せる口実であった。時には寝室に彼女を引き留め、翌日までそばにかくまい、継続的にこのように彼女を扱い、彼のもとを離れないように強いていた。君主の分別を欠いた要求のために彼女は節度のない習慣に陥ったことを告発され、そしてそのために身分の低いもののように扱われた。年下の王子が生まれてすぐに陛下が彼女をひいきにしている、はっきりと王子の母親にふさわしい細心の注意を払って彼女を扱っていることが明るみに出たとき、皇帝の妃つまり第一王子の母はねたみに駆られた。最悪の場合、あの新しい王子が王座の後継者に割り当てられる部屋のある日占拠することも起こり得るのではない。</p>	<p>この御子の母は、陛下の身の回りの世話をするほどの低い身分ではなかった。却って、人々の尊敬を獲得して、尊い生まれであるかのように気高さを感じさせた。しかし、寵愛を賜った上で、特に理由もないにも帝はその付き添いを要求して、常礼もお祝い事の夜会とか、何事にも託けてお前に召して、時折寝間に翌日まで身辺に引き留め、絶えずこの扱いを受けさせて、自分の側から離れないようにした。帝の不分別な要求のため、彼女は淫らな行為に落ちたという批難され、此の故に下級の人扱いされていた。若い御子の誕生の後に現れたように、帝の寵愛の上で、更に御子の母親である方に適した細心の心遣いを受け、第一御子の母大妃は嫉妬に取り付かれた。あり得るに、最悪の場合、あの若い御子は玉座を就くべき人の御殿に入居することに至るまで。</p>	<p>最初からその内縁の妻は陛下の日常的な召使に彼女を加えることが可能な低い位の出ではなかった。貴族階級の名声や雰囲気を受けていたが、彼は使用人であるかのように彼のそばにいつも彼女を置いておくようにと大きさに主張していた。いつも音楽がある機械や何らかの理由で出来事がある場合は最初に彼のそばに呼んでいたのは彼女であった。例えば、遅くまで眠っていた場合は、彼女が彼のいる前から離れようとするのを妨げ、そこで居させて彼にさえさせていた。それで彼女は位の低い人のように見られていた。しかし、第二王子の誕生後は彼女をあまりの配慮と愛情と共に彼女を扱ったので第一王子の母の夫人は第二王子に王座4を継承する王子の正式な位を第二王子に与えようとするまで疑った。</p>
<p>7 帝は弘徽殿女御を気遣うも桐壺更衣を寵愛し、更衣の気苦労は増す</p> <p>「人より先に～」(0248 / 六一〇 / 六一九)</p>	<p>人より先に参りたまひて、やむごとく御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めのみぞ、なほ煩はしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ、疵を求めたまふ人は多く、我が身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。</p>	<p>皇帝は献身的に彼女を愛していた。彼女は王子を彼に与えていた。他方、君主は新しい習慣にあまり満足をしていなかった。もし彼の愛人が彼の保護に安心を感じることができていたら、他の者はそのかわり彼女に屈辱を与える機会を失っていなかっただろう。まさに弱さの感情が彼女にとってうれしさの代わりに恐れに値する敬意への度を越した熱意を彼女の中に呼び覚ました。</p>	<p>依然として自分のライバルよりもずっと上にいると信じていた。自分の影響力のある家族の支えをあてにして、ずっと前に宮殿に入り、君主にたくさんの子孫を与えていて、彼はあえて彼女を無視することができなかった。新しいお気に入りの女性を中傷する者は大勢いて、彼女を非難するためのどんなささいな誤りでさえ継続的に見張っていた。遅かれ早かれその女性は山のよくな非難を呼び起こす取り返しのでない過ちを不可避的に犯すだろう、その時誰が彼女を守るだろう？</p>	<p>この配偶者は、皇帝はとても配慮をしていたのだが、彼のところに来た最初の女性であった。彼女の非難は他のどの女性のものよりも彼を動揺させ、彼女を傷つけることには耐えられなかった。というのは、他にも息子を産んでいたからであった。陛下の庇護を信頼していたにもかかわらず、彼女を軽蔑するものや欠点を見つけようとする者たちが非常に多かったので、花開くどころか、苦しみでいっぱいになり萎れ始めた。</p>	<p>そして、彼女が他のどの女性よりも先に宮殿に来て、皇帝は彼女に普通ではない一線を画した寵愛を与え、そして彼女との間に娘を何人もうけていたので、この女性に対する終わりのない非難は君主に大きな不快と嫌悪感呼び起こしていた。しかし皇帝は彼女が無視することができない女性であるということに思案していた。そのことが彼にとってどんなに不運で悲しいことであってもだ。</p> <p>新しい王子の母に関しては、やんごとなきお方の庇護を信頼していたにもかかわらず、彼女を軽蔑し、彼女の過ちを強調する中傷者が多かった。あまりにも体質がひ弱で健康が不安定であったために既に極度の不安で憔悴していた。</p>	<p>誰よりも先に入内していた方なので、帝に並ならず優れた愛顧を受け、彼女たち何人も儲けていたし、この方の絶え間ない苦情に帝は更にいらだたされ、愛想が尽かすようになった。けれども、帝はいかなるのしつこさによって不快な思いをしても、この方を見捨てることはできないと考慮した。</p> <p>新しい御子の母親は、上の庇護を頼りにしながらも、批判者が多くて、彼女たちに軽蔑され、粗捜しの対象になった。華奢な体つき、病気がちで、非常な心労やつれていった。</p>	<p>この夫人は貴婦人たちよりも前に宮廷に入っていて、彼は彼女をこの上ないものと思っていて、また彼女から王子が生まれていたの、それゆえ心配して、特にこの貴婦人の不平に心が苦しんでいた。内縁の妻は自分のやんごとなき方の庇護に身を委ねていたが、同時に彼女を軽蔑したり欠点を探したりする人がすでにたくさんいたので、自分を弱くて哀れな状態にあると感じ、この大ききな庇護が彼女を害すると思っていた。</p>

<p>8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」(0288／七③／二〇)</p>	<p>御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちきる折々は、打橋、渡殿のここかこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎へる人の衣の裾堪へがたく、まさなきこともあり。また、ある時には、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。</p>	<p>キリツボの貴婦人には建物の翼に位置するいくつかの部屋が割り当てられ、彼女の名前が与えられた。全ての女性の宮廷人にとって、皇帝の寝室に続いて行き来する際に自分の部屋の扉の前を通るので、彼女が通ることは苛立たせるものであった。そして、時々普段よりもこの行き来が頻繁な時は、貴婦人は怖がらせるための奇妙なたくらみの標的になり、それらの扉の前を通る時、通路や廊下の橋を横切る時、彼女の道全てに渡り、彼女に付き添っている貴婦人たちの衣服を汚すような奇妙で吐き気を催させる物体が忍び込んでいた。ある時には回廊の一つの入口が閉まっていて、そのせいでその不運な女性は一方またもう一方へとさまよわなければならなくなり、</p>	<p>お気に入りの女性は「桐の」と呼ばれる別棟で暮らしていた。そこから彼女はキリツボとして知られていた。彼女の部屋にたどり着くために、皇帝は他の貴婦人に割り当てられた一連の部屋を横切らなければならなかったが、この小さな支障が彼女を頻繁に訪れるたり、彼と一緒にいたいときはいつでも彼のそばに行くことへの妨げにはなっていなかった。一方あるいは別方向への切れ目ない散歩は彼らの親密さに動揺した貴婦人たちの間に憤りを生み出し、彼女たちはお気に入りの女性と彼女の使用人の服が汚れるようにごみを廊下と部屋にまいて復讐をした。</p>	<p>彼女はキリツボに住んでいた。陛下は多くの他の貴婦人の前を絶え間ない訪問の際に通らなければならず、だから貴婦人たちが気分を害してもおかしくはなかった。彼女が彼に会いに行くかなり頻繁な機会において、橋や高く上がった廊下で彼女を待ち受ける不快な驚きがあることも起こりえました。それは彼女に付き添っていた、あるいは彼女を迎え入れるために先に進んでいた貴婦人たちのスカートをひどく汚すような驚きであるか、またはそれぞれの側いたもの企みの犠牲になり、2つの戸の間の通路に捕まえられ、そこを力づくで通らなければならず、後退することも前に進み続ける術もなかった。</p>	<p>彼女の部屋はキリツボと呼ばれる宮殿の翼部にあり、そのため絶え間ない往復のため他の全ての貴婦人の部屋の前を通ることとなり、貴婦人たちの興奮は極限まで高まった。皇帝の前に姿を見せるときさえも、前述の機会一つまり彼女だけに捧げられた機会一があまりにも頻繁だと判断された場合は、他の貴婦人たちは前もって結託し、道のあちこちら、回廊や屋内の通路に排泄物をまき散らし、彼女に付き添う者あるいは会いにやって来た者たちの長い引き裾はそのため汚くなり、不快ですでに耐え難い不慮の事態となっていた。そして、時にはそれぞれが共謀して彼女が回避することができない通路の扉の両側にかんぬきをかけ、彼女を混乱と恥辱に陥れることでさえあった。</p>	<p>部屋はキリツボと呼ばれた宮殿の端にあって、他の妃たちの部屋の前を通る絶え間ない往復は、その激昂が極まることになった。帝の前に赴いた時にも、彼女に限ってのもてなし、その折は程をすぎると看做された場合、他の妃たちはあらかじめ同意して、あちこちの廊下と屋根付きの通路に廃物を散撒いていた、付き添いの者と出迎えに来た者たちの長い裾は汚されてしまい、耐えられないし、彼女に付き添う者あるいは会いにやって来た者たちの長い引き裾はそのため汚くなり、不快ですでに耐え難い不慮の事態となっていた。そして、時にはそれぞれが共謀して彼女が回避することができない通路の扉の両側にかんぬきをかけ、彼女を混乱と恥辱に陥れることでさえあった。</p>	<p>彼女の部屋は桐の中庭にあった。彼はそのまで他の多くの貴婦人を気に留めずに向かい、彼女たちの部屋の前を一度またもう一度と横切った。それゆえ彼女たちがいらだちを感じるのもまったく当然のことであった。皇帝を訪問しに行く機会には、過度に繰り返されていたが、道のあちこちに、廊下や回廊で他の貴婦人たちが彼女に悪さをしていた。彼女に付き添うあるいは彼女を迎えに出ている人たちのスカートの端をひどい方法でだめにした。時には彼女を苦しめ絶望させるために一方ともう一方から共謀して、逃げられないように通路の戸が彼女を扱っていた。</p>
<p>9 帝は桐壺更衣への虐待を不憚に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことふれ〜」(0344／七⑨／二〇)</p>	<p>ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局にたまはす。その恨みましてやらむ方なし。</p>	<p>ひどく苦しみ、貴重な時を失っていた。皇帝は自分の愛する人が日々犠牲者になるという辱めを許すことができず、このためにコキデンを貴婦人に整えた。しかし、この目的を実行するためには、侍女長に問い合わせをしなければならず、貴婦人の状況を和らげる代わりに、新たな折り合いのつかない敵をもたらしした。</p>	<p>受けなければならぬ嘲笑と屈辱は日々の経過とともに増えるばかりだったので、皇帝はもうこれ以上長い時間それを耐えることを拒否して、キリツボに割り当てるために自分の部屋に隣接している部屋を占めていたある貴婦人を追い出した。</p>	<p>いかにそのような辱めを彼女が受けさせられているかを目にして、状況が彼女の敵に有利に働いているのでますます頻繁になっていたのも、陛下はそのコキデンで長い時間を過ごしていた親密な女性が他の部屋に移り、彼の場所を彼女に譲るように命じた。彼の近くにいるほしかったからであった。住む場所がなくなった女性は内面でとりわけ抑えることができない恨みを抱えていた。</p>	<p>痛ましい出来事は増えるばかりで数え切れず故意であったので、彼女はひどく心を痛め、そのことに陛下は大きな憐れみを感じていた。また彼は以前からコウロウデンに寝泊りをしていた一人の名誉ある貴婦人のご奉公のお部屋を別の場所に移し、それを彼女に上等の寝室として与えることを喜んだため、何物も追いつくことができない遺恨が貴婦人の中に生じた。</p>	<p>数えきれない意図的な不快な事件が増やす一方、彼女の苦悩極まるばかりで、陛下は痛ましく思っ、常よりコウロウデンで滞在していた他の女房の奉仕用の部屋を別のところまで移させて、上の寝室のように彼女に賜って、その他の人に消えることなくの恨みを起こさせた。</p>	<p>数えきれない彼女の苦しみは増えるばかりで、それゆえ彼はひどく彼女が苦しんでいるのを見ると大きな痛みを感じて、コーローデンの部屋を最初から占めていたある内縁の妻を別の場所に移らせて、それを個人的な待合室として割り当てた。その移動させられた貴婦人の恨みは他の貴婦人のそれよりもさえより取り返しのつかないものであった。</p>
<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」(0378／七⑩／二一)</p>	<p>この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうさせたまふ。それにつけても、世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすけもおはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目を驚かしたまふ。</p>	<p>幼い王子はその時三歳になっていた。ハカマギの儀式は皇太子と同じ厳粛さをもって執り行なわれた。素晴らしい贈り物が皇帝の王位そして公共広場から押し寄せた。多くの人がこの気前の良い浪費を非難したが、それによって彼らが子供に抱く愛情が減ることは全くなかった。彼の美しさは、日ごとに増し、彼の性格の素敵さと共に彼に近づく者は誰にでも感嘆と喜びを引き起こした。比較的良識を持っていて安易な判断を決して下さない人たちはそのような子供がこのような退廃した時代に生まれたことに驚嘆した。</p>	<p>王子が3歳になった時、皇室の国庫は彼の最初の長靴の祭りが明らかな後継者に敬意を表して彼の日に行われた祭りと同じくらいきらびやかになるように何も惜しまなかった。今一度厳しくそれを非難したが、大きくなるにつれて彼の美しさや長所は増すばかりだったので、だれもあえて彼を憎んだり公に避難しようとはしなかった。最も聡明な人たちでさえこのような退廃した時代にこれほど並外れた子供が生まれたことに驚いていた。</p>	<p>子供が3歳になった時、ズボンの着衣の儀式が催され、長子の儀式のときのように彼の日も堂々たるもので、この折には宮廷の倉庫と皇室の倉庫にある全ての宝が集められた。これはより多くの不平を引き起こしたが、子供が成長するにつれてあまりにも並はずれた美しさと性格を見せるようになったので、彼には誰も反感を持たなかった。気難しい人たちもどうにか彼の目を信用し、そのような優美さを備えた子供は今まで生まれたことがないと驚嘆していた。</p>	<p>新しい王子が三歳になった年、長いスカートの授与の儀式のために、君主は第一王子がそれをした時に劣らず一盛大な祭式を命じ、とても豪華にとり行って資産は底をついた。これに関して、彼女に対する非難はさらに大きくなった。しかしながら、小さい王子は、体と精神は一年と共に一類まれなる気品を得ているように思われ、誰もあえて完全には反感を持たず中傷しようとはしなかった。そしてより理性的な人たちの中にはこのような理想的な人がこの世に生まれたことに驚嘆し、ぎよっとしながら彼を見守っていた。</p>	<p>新御子は三歳になる年、帝、袴着の際、第一御子の時に劣らず、壮大な豪華さで行われた大いなる儀礼のため国庫を尽くした。この件について、彼女へ対しての批判はますます広がる。けれども、成長にしたがって心身とも希なみやびやかな生い先が見える若い御子を、誰しもそねみにくもうとしなかった。最も理性が適った人たちの間に、このような模範の人はこの世に生まれてきて驚いて、畏縮して見守った。</p>	<p>第二王子が3歳になった年に、陛下は彼に第一王子が持っていたものよりも何ら劣ることのないズボンの一式を贈った。そのために皇室の倉庫と皇室の宝の金庫の最後の手段まで使った。このことが社会に多くの批判を生み出したが、第二王子は成長すると普通でない美しさと性格を見せ、彼に対して憤りを感じるのとは不可能であった。そのような人がこの世に来たことが分ると最も知覚する人でさえも驚きで大きく目を開けていた。</p>

<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439／八②／二一)</p>	<p>その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。一年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばし試みよ」とのみのたまはするに、日々と重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかるをりに、あるまじき恥もこそ、と心づかひして、御子をば留めたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。</p>	<p>その年の夏の間、貴婦人は病を感じた。繰り返し何度も家に帰る許可を懇願したが、許可は彼女には与えられないものであった。この状況は一年中長引いた。彼女のあらゆる懇願に陛下はこう答えた。「まだもう少し待て。」しかし貴婦人の健康は日に日に衰えていった。彼女の母は数日の間で彼女の健康が急速に下落していることに気づいて、そしてこれが理由で心を揺さぶるような嘆願を宮殿に向け、新たにこの許可が娘に与えられるように懇願した。貴婦人は敵からの新たな聞くに耐えない復讐を恐れ、息子を見捨てて、こっそりと宮殿から逃げる決心をした。</p>	<p>夏の初めにキリツボは家に行くための許可を求めた。なぜなら、言うには彼女の健康状態が悪かったからだ。しかし皇帝は彼女と離れることを拒んだ。その貴婦人が病気や体の不調について不平を言うのは初めてではなかった。だから、男性は彼女が少し心気症であるのとらえ、病気の症状がはつきりするまで自分のそばにるように頼んだ。しかし、女性は悪化するばかりで、彼女を行かせるように母親があまりに主張したので皇帝は最後には譲歩した。新たな屈辱の犠牲者になることを恐れ、貴婦人は何の儀式もせず去り、宮殿に子供を残していくことに決めた。</p>	<p>その年の夏の間陛下の避難場所となっていた人は病気になるが、彼は彼女が退出することを許さなかった。彼女の健康はいつも弱かったので、不安には感じず、とても孤独だったので彼女にもう少しだけ我慢するように執拗に頼んだ。しかしながら、貴婦人の容態は日ごとに悪化し、4〜5日後には涙ながらの彼女の母の懇願が彼女を行かせるべきであると皇帝を説得するほどであった。その時でさえも何らかの残酷な辱めを受けることを恐れ、貴婦人は子供を宮殿に残し、とても慎重に自分の部屋に戻った。</p>	<p>その年の夏、桐の部屋の貴婦人は、奇妙にも具合がおもわしくなく、家族のもとに引き上げたいという願望を示したが、皇帝はそれをまたもう一度認めたくはなかった。近年いつも彼女が病弱であると感じていたので、彼の眼はそれに慣れていたので、彼の眼はそれに慣れていたので、「だからもう少し続けて居ようとしてよ。」と彼は彼女に言っていたものだった。しかし、数日後、彼女の容態は悪化し、たった5〜6日の間にとても憔悴しきった状態になった。そして彼女の母上が止むことなくむせび泣き、陛下のもとに向かい、彼女が家に帰るご厚情をたまわった。そして、そんな状況でまで彼女はある想像もつかない侮辱を心配した。なので子供を残し、秘密に宮廷を後にしなければならなかった。</p>	<p>その年の夏、桐壺の方は、異常に病気がかかっていた故に、家族のところまで退きたいと願いを表したが、今度も帝は許しを下そうとしなかった。前の年々ども、常に弱かったので目が慣れていて。「そのため、もう少し居続けてください!」彼は云った。が、数日後、その状態が悪化しつつ、五日六日の間だけに、大変寝れていて、その母親の方は、泣き続けながら、陛下へ敬して願って、家へ向かう許しを賜った。こんな状況でも思ってもよらない屈辱を被るではないかと、彼女が恐れて、子供を残すままに、秘かに朝廷を去るところになった。</p>	<p>その年の夏、その内縁の妻は今や安らぎの貴婦人と呼ばれていたが、あまりの苦しみで病になって宮殿を離れたかったが、彼はどうあっても休みの期間を取ることを許可しなかった。いつものように、「もう少し待つ」ように命じた。なぜなら数年前から頻繁に病気になるようになっていたからだ。しかし、日に日に悪化して、5、6日後には母親が泣きながら懇願するほど弱っており、そして彼女を行かせた。耐えられない恥辱を避けるために秘密に立ち去り、王子を後に残した。</p>
<p>12 帝は絶え入らばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば〜」(0488／八⑦／二二)</p>	<p>限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさや、言ふ方なく思ほさる。いと匂ひやかにうつくしける人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしながら、言に出でも聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、御覧するに、来し方行く末おぼしめされず、よろづの事を、泣く泣く契りのたまはずれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたげげにて、いとどなよなよと、我がの気色にて臥したれば、いかさまにとおぼしめし惑はる。</p>	<p>皇帝は彼女を行かせる時が来たのを知っていた。しかし、さよならを言わずこの事実を受け入れることができず、彼女のところに向かった。彼女は以前のようにとても魅力的で、依然として美しく、少しやせて青白いと思った。貴婦人は彼を際限のない優しさともに見つめ、黙っていた。生きていたのだろうか? どうにか揺らめいている火花のように思われた。すぐに全ての過去と未来を忘れて、彼は彼女を千の美しい名前と呼び、泣きながら彼女を優しく撫でた。彼女は応えなかった。反射光と音がとても遠くからほとんど見えず聞こえず彼のもとにやって来た。まるで茫然自失で彼女が憔悴していることを忘れていたようであった。彼は彼女をそうやってこの状態で見つめ、何をすべきか分からなかった。</p>	<p>この人生におけるあらゆるものには終わりがあがるが、皇帝は地上で一番愛している人が別れを告げることもなく去ることを認めなかった。かつてはあんなに美しく愛らしく横になっていたが、今はとてもやせ細って見えるに忍びなかった。自分の悲しい思いを分かち合おうとしたとき、ささやき声にまで弱まった彼女の声は実質上聞き取れなかった。皇帝は絶望していて、愛する彼の心には過ぎ去った喜びの思い出と彼らを待っている未来についての最悪な兆前が混ざっていた。泉の噴水口のように泣き、千回永遠の愛を誓ったが返事はもらえなかった。まだ生きていたのか、あるいはもう死んでしまったのか、自分の周りで起きていること全てに無関心のように見える青白く憔悴した小さな人は?</p>	<p>陛下はすでに自分の側に彼女をとどめておくことができず、彼女に別れを告げることすらできなかったと思いつても苦しんでいた。そこにいつもと同じように美しく愛らしく横になっているが、今はとてもやせ細って、半分意識がない様子だったので深い苦しみや痛みのためではなく皇帝と話すことができず、それは過去あるいは未来についてのあらゆる考えと皇帝の心を遠ざける姿であり、皇帝は目に涙をためて知っている限りのあらゆる方法で彼女をととても愛していると言うことができただけだった。彼女が彼に返事をするのではなく、ただ力なく外見上は気を失って目の中の光が消えている状態で横たわっているだけだと分かると、彼はどのようにふるまうべきかのどんな小さな手がかりもなかった。</p>	<p>全ての事に終わりがあるように、皇帝はこれ以上彼女を引き留めることができず、彼女を連れて行くことも、彼女に別れを告げることもできず、言葉にできない無力感を感じていた。あの素晴らしい魅力と美しさを備えた貴婦人は嘆かわしいほど衰弱しきっていた。憂鬱な思考の逸脱に苦しみ、それを言葉にすることもできず、横たわりほとんど意識を失っていた。そのような彼女を見ると、心がかき乱され、彼は止むことなく泣き、千の誓いをしたが、しかし彼女はすでに彼に返事をするので、できない状態であった。彼女の眼差しそのものも、とても物憂げで、憔悴しきった状態を表していた。そして彼女がこのように横になり続けているので、彼女が不在となり、彼は途方に暮れたままだった。</p>	<p>すべてのことに終わりがあるので、帝はもう彼女を留められない、送ることも別れを告げることもできなく、彼女を連れて行くこともできず、言葉にできない無力感を感じていた。あの魅力的美しい方は、嘆かわしくやせ衰えていった。物悲しく思ひ煩うこと、言葉で表そうにも力が及ばないまま、意識を失いそうに横たえていた。この様に彼女を見て、胸がはり裂けそうに泣き続けている。千度の誓いを交わしても彼女はもういい答えられない状態になっていた。そのまなざし自体、物憂げに打ち拉がれていることを露にして、ぼんやりした表情で横たわっていたため、彼は困惑するばかり。</p>	<p>彼女の病気のために、宮殿の規則が彼女をすぐ自分の近くに置いておくことを妨げていた。また彼女に別れを告げに行くことができない挫折を伝える方法もなかった。光り輝く美しさを持った人だったが、彼女の顔はとてもやせ細っており、悲しいほど苦しんでいて、ほとんど話すこともできず、あまりにも衰弱していたので生きていのかどうかも分からなかった。彼女を見ると、彼は泣きながら何千ものことを過去あるいは未来も考えずに約束していたが、返事を出すことができず、とても消えそうな視線で、意識がないかのように非常に弱って横たわっていた。彼は何をすべきか分からず揺れ動いていた。</p>

<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537／八④／二二)</p>	<p>輦車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。「限りあらむ道にも、後れ先だたじ、と契らせたまひけるを、さりともうち捨てては、え行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、限りとて別る道の悲しきにいかまほしきは命なりけりとかく思ひたまへましかば」と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。</p>	<p>苦しんで、困惑して、彼女を運ぶための担架を頼んだ。しかし、それに寝かしつけられている、ほぼ横になっている彼女を見た時、反抗して言った。「私たちはお互いに地の上を踏む最後の道に一人で旅立たないと誓ったのだ。どうやってあきらめて君が行ってしまうのを見ようか？」「最後ですって！」と貴婦人は繰り返した。「この望まれた結末は既に来てしまい、私は一人で行ってしまうので、私が生きてこなければどのくらい嬉しかったでしょう…。」そのように嘔き、声は弱々しく、呼吸は絶え絶えであった。話すための力を見つけたが、各々の言葉は苦しくて痛々しく彼女の下に届いていた。皇帝は彼女の日々の最後を寝ずに看病しただろうが、取りなしを読まなければならぬ僧たちがすでに貴婦人の家に向かって進んでいた。彼女は日が暮れる前までにそこに着く必要があったのだ。ずたずたに引き裂かれた心で担架を運ぶ人に彼女を連れて行かせた。</p>	<p>皇帝は移動のために輿と4人の運搬人の榮譽を彼女に授けるよう命じたが、すべてがもう移動の準備ができている彼女を見た時、もう一度貴婦人の部屋に戻った。「私たちは一緒に私たち皆を待ち受ける道を一緒に踏破することを誓った。」と彼女に言った。決定的な別れに甘んじることができずに。「私を後に残して行ってはだめだ、私の愛する人よ。」キリツボは悲しさと共に彼を見て、詩を即興で作って答えた。「もし物事がこのように起こると想像していたら…。」あなたとはお別れです。なぜなら皆の道を追う番が私に回ってきたんです。もし選べるのであれば、選ばれた道はこれにはならないでしょう。多くの事を付け加えたかったが、あまりにも弱っていたのでほとんど言ったことを言うこともできなかった。皇帝は、母親が急ぐように要求する伝言が届くまでずっと出発に反抗的であった。「私たちは祈禱を引き受けるために名高い神官を招集したのです。」と書いてあった。「そしてまさに今晚始めるべきなのです。」伝言を見ると、男性は受け入れ、悲しんで出発のための許可を与えたが、</p>	<p>召使によって引かれる車を使う特権を貴婦人に与える命令に署名した後でさえも、再び彼女の部屋に入り、彼女が去るのを許すことができなかった。「私を決して見捨てない」と約束したのではないか、最後にでさえも。」と彼女に言った。私を見捨ててはいけない！許可できない！彼女はとても心を動かされ、ささやくことができた。今終わりが来て、私たちが別れなければならないのを悲しく思います。続けて進むのに好ましい道は命につながる道です。「もし知っていれば…。」もっと言うことがあったが、話し続けるにはあまりにも疲れ切っているかのように思われた。これで皇帝は彼女の置かれている状態にもかかわらず、彼女を待ち受ける苦境から抜け出るのを手助けすることを決めました。いやいやながら出発することを許可したのは、まさにその晩が何人かの素晴らしい治療者たちが彼女の住居で彼女のために祈りを始めることを彼に性急に思い出させてからであった。</p>	<p>そして彼女を助けたくて休まずに家まで籠で彼女を家まで運ぶように命じた時でさえも、彼女の寝室に戻ることはそれを中止することを決心できなかった。「誰もが進まなければいけない道を共に歩むという願いと一緒にしたので。私を置いて行ってはだめだ。」そして、代わって、貴婦人が深い悲しみに染まった眠差しとともにささやいた。私たちの道は今永遠に離れているのです。苦しみの中で人生の道を続けたいと望んだとしても。ああ、このように終わると私が知っていさえすれば。そして、息が弱くなっていく中で、もっと多くの事を伝えたかったようだったが、しかしそれを試みるのも無駄であったであろうほど衰弱している様子であった。皇帝はあるいは最後まで彼女を手元において置けるのではと考えていた。しかし、彼女の母の言伝が届き、急ぐように嘆願された。「私たちは著名な僧たちの許可を得て、彼らは必要な儀式をとり行わなければならないのです。恐れながら日暮れから始めなければなりません。」したがって、悲嘆に暮れながら彼は彼女が出發することに同意をした。</p>	<p>ついに、彼女を助けようとしたときも、手車で、休憩なく家まで送るのを命令したさえ、部屋に戻った途端、暇を許す決心も付けなくなった。お互いに約束を交わしていた、誰でもお返しに、その方は、深い悲しみになにより進みたく命の先へ</p> <p>このように終わりがつくようになると知っていたら！</p>	<p>彼女に輿に乗る特権を与えるように命じた。規則に反して彼女の部屋に入った。だから彼女を行かせることはできなくなった。「最後の道では前に出ずに私を後に残さないと約束したじゃないか。」彼女に言った。「どんなことがあっても、私を見捨てさせはしない…」貴婦人は、彼の苦しみを見ながら、答えた（詩で）。『終わりだと思ふとき、別離の道の悲しさは、私が望んでいるのは生きること、生の道に行くこと…』「…もしそれを前に知っていれば…」息を切らして、何かもつとすることがあるように思えたが、たくさん苦しみ兆候を見せていて、消え入りそうだったので、どうだろうと最後まで彼女を見る決心をして、そこに留まったが、去るように警告をされ、「祈りと悪魔祓いはまさに今日始まらなければなりません。適切な人々を雇って、今晚まさに始めます…」と言われた。嘆き悲しみながら引き上げた。</p>
--	--	---	--	--	--	--	---

<p>14 心蕪がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608／九⑦／二三)</p>	<p>"御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、</p>	<p>父はその時から王子と一緒にいることでのぎたかったが、貴婦人の死が理由で、彼らを話すことが適切だと考えられた。子供は起きたことを理解していなかったが、彼の召使いたちが絶望して両手をもみ合わせているのを見ていて、まさに皇帝までもが慰めがなく泣いていた。何かひどいことが起きていたことを予感した。大したことのない別れでさえ人々を不幸せにすることに気づいたが、あまりにもそれまでは無視していたようなすすり泣きや嘆きを聞いたので、この新たな別れの並外れた特徴を予感した。</p>	<p>子供を自分のそばに留めておきたかったができなかった。慣習が母親の埋葬に立ち会うように要求していたからだ。かわいそうな子供は起こったことを理解することもできず、困惑して、父親、宮廷人そして召使の涙をじっと見つめていた。彼の若い年齢にも関わらず、何かひどいことが起きたことを直観していた。</p>	<p>眠りを誘発するにはあまりにも心が混乱していて、皇帝は夜明けが来るのを待った。使者が貴婦人の家に戻る時間がある前でさえも、深く心配していることを表現した。その間、使者は嘆きを聞き、真夜中過ぎに最後の息を吐いたということを知り、そのため深く悲しんで戻った。その知らせはあまりに皇帝を動揺させたので、自分の部屋に閉じこもって、すっかり周囲を囲む者たちから孤立した。</p>	<p>彼にとって一晩の眠れない夜は続いた。心は痛みで突き刺されていた。彼は使者を送った。貴婦人の家に着し戻ってくるための時間もないうちに、使者は心配し我慢できずに待っていた君主の側に控えていた。使者が到着した時、貴婦人の祖国から来た人がひどく泣き叫び、貴婦人が真夜中を少し過ぎたときに亡くなったと言った。すると使者は皇帝の宮殿に戻り、皇帝は使者のいうことをつらい思いで聞いた。貴婦人の他界を知った後、皇帝は苦しみの状態に陥り、憚ることなく気を取り乱していた。やんごとなき方は上の階にある個人の部屋に閉じこもった。</p>	<p>息が絶えそうに、ほかにたくさん云いたがる様子なのに、寝れ果てていた。試しに云おうともむなしげばかり。帝は最後まで側に居させるとまどう。お母さんからの伝言がきて、その急ぎを願って； 「儀式を担当する偉い僧侶の許しを得て、おそらく夕方に始まるべき。」 このように、心細くのまま、出発を許した。帝は眠れない宵に見舞われた。悲しみに染み込んだ。彼は使者を送った。その方の家について帰る時間も立ってない間に、待ち遠しく懸念する帝の側に戻った。着いた時に、その方の生まれ故郷から来た人は、嘆いて泣き崩れ、その方は真夜中すぎたところ亡くなったと云って、そのすぐ後で、痛ましく悲報を聞く帝の宮殿に使いは戻った。その方の死を知った後、帝は深い悲しみに陥って、限りになく心が乱れた。上は高い層の私用の部屋に籠った。</p>	<p>心は常に疲れ切っていて、眠れずにかかるうじて夜を過ごすことができた。止まることなく自分の苦しみについて話し、使者が知らせをもって戻ってくることを期待していたら、「ちょうど夜中を過ぎた時に亡くなった。」 と言っている泣き叫ぶ声の騒々しさが鳴り響いた。使者が悲嘆に暮れて戻ってきた。彼の話を聞くと、心が混乱して方向を見失い、自分の部屋に引きこもった。</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644／九⑩／二四)</p>	<p>御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかてたまひなんとす。何事かあらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。</p>	<p>父はその時から王子と一緒にいることでのぎたかったが、貴婦人の死が理由で、彼らを話すことが適切だと考えられた。子供は起きたことを理解していなかったが、彼の召使いたちが絶望して両手をもみ合わせているのを見ていて、まさに皇帝までもが慰めがなく泣いていた。何かひどいことが起きていたことを予感した。大したことのない別れでさえ人々を不幸せにすることに気づいたが、あまりにもそれまでは無視していたようなすすり泣きや嘆きを聞いたので、この新たな別れの並外れた特徴を予感した。</p>	<p>子供を自分のそばに留めておきたかったができなかった。慣習が母親の埋葬に立ち会うように要求していたからだ。かわいそうな子供は起こったことを理解することもできず、困惑して、父親、宮廷人そして召使の涙をじっと見つめていた。彼の若い年齢にも関わらず、何かひどいことが起きたことを直観していた。</p>	<p>依然として息子に会うことを熱望していたが、すぐに子供は連れて行かれた。なぜなら以前の誰も喪中の未成年が皇帝に挨拶することを認めなかったからである。子供は起きていたことを理解しておらず、不思議に思いながら彼の母親に仕えていた泣きはらした貴婦人たちや陛下の目から流れる涙を見ていた。そのような別れはどのような場合でも悲しいもので、子供のあどけなさでさえもそのことを言葉に表せる中でより胸を打つものにした。</p>	<p>少なくとも子供と一緒にいたかったが、前例がなく、喪中は彼を母の家から引き離すこととなった。子供は出ていくことに決まった。子供は起こったことを何も理解していなかったが、彼に仕えていた人たちが泣き崩れているのを見ると、そして君主までもがあふれるほどの涙を間断なく流しているのを見ると絶え間なくその理由を自問していた。両親の死はどのような状況においても苦しいものである、そして今回の事は口では言えないほど悲しいものだった。</p>	<p>少なくとも、子供を側に居させたかったが、けれども、喪の間に母方から遠ざかる前例はなかった。その出発は決定された。子供は、何が起きていたことが判らないまま、仕えの人たちの嘆き崩れる姿を見て、帝自身の絶え間なくの流した涙の故を問いつけた。親の死は、どの状況でも悲しいが、この場合は云えそうもなく痛ましいほどであった。</p>	<p>そうはいっても第二王子にとでも会いたかったが、このような状況で誰かが宮廷で仕えるという前例がなかったので、宮廷の外に出すことに決めた。何が起きているか分からず、宮廷で仕えていた人たちの混乱した泣き叫びと陛下が休むことなく流していた涙は理解できなかった。この類の別れはありふれた状況でさえも悲しく、いかに感動的であったかを表現することができる言葉はない。</p>
<p>16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる「限りあれば〜」(0684／一〇②／二四)</p>	<p>限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなん、と泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りましたまひて、愛宕といふところに、いといかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけん。</p>	<p>葬儀を始めた時、年老いた貴婦人の母は娘の体がかもくもくと上がる煙の中に棺と一緒に登っていくように見えた。葬式に向かっていた宮廷の貴婦人たちと車で出会った。葬式は並外れて壮麗にアタゴで行われた。</p>	<p>葬儀のための措置が取られた。母親母は自分の体の煙が彼女の娘のそれと混ざって空に昇ることをどのくらい望んだかと飽きることなく繰り返した。葬式に向かっていた宮廷の貴婦人たちと同じ車で行ってた。火葬は最大限の厳肅さをもって首都の東にあるオタキ山の頂上で行われた。</p>	<p>習慣的に行われる葬儀に取り掛かる時であった。故人の母は目が涙で溢れ、娘の煙と共に空まで上がることを熱望し、葬儀の行列の間は車で名譽ある貴婦人方に付き添うと主張した。オタギに着いた時の彼女の苦しみはいかに深いものであったに違いない。そこでは最も威圧するような儀式が行われているのだから！</p>	<p>しかし、泣き叫ぶことも終わりがなければならず、そして葬儀の命令が発せられた。 「少なくとも火葬の火の煙で天国まで登ればいいのに。」 彼女の母は泣きじゃくりながら言った。 母は棺台に入れて運ばれ、大行列が後を続いた。皆がオタギ山に着いた時、母の気持ちはどのようなものであったのだろうか？そこは最大の厳肅さと尊厳を持って儀式が行われたところであった。</p>	<p>それにしても、涙が尽きるのは常のことで、お葬式を行う命令が下される。 煙にも彼女空に上ることができると泣きながら母親が云った。 彼女は大勢の行列に従われた棺台に上り、非常に壮大に火葬が行われていたオタギと呼ばれる場所に到着した時の彼女の気持ちはどのようなものであったのだろうか。</p>	<p>単なる内縁の妻に許される華麗さには限界があったので、葬儀は儀礼と習慣が規定していることに従って行われた。彼女の母は、正妻で、煙と一緒に上りたいという願望の中で激しく泣きじゃくっていて、行列に付き添う名誉ある貴婦人たちの後で車に上がり、非常に壮大に火葬が行われていたオタギと呼ばれる場所に到着した時の彼女の気持ちはどのようなものであったのだろうか。</p>

<p>17 気が動転している母は、火葬の現実を受け入れられず諦めきれない「むなしき〜」(0712 /一〇⑤/二四)</p>	<p>「むなしき御骸（から）を見る、なほおはするものと思ふが、いとかなければ、灰になりたまはんを見たてまつりて、今は亡き人、とひたぶるに思ひなりなん」と、さかしうのたまひつれど車よりも落ちぬべうまろびたまへば、さは思ひつかし、と人々もてわづらひきこゆ。</p>	<p>年老いた夫人の母親の愛はとても強く、娘の体を見るとすぐに、彼女には娘が死んでいないように思われた。それから、燃え上がる火の前であの青ざめていて横たわっていた形ものは実は死体であると理解した。そして後で、落ち着こうという努力にもかかわらず、揺れ動き、車から落ちないようにするため彼女を支えなければならなかった。彼女に付き添った貴婦人たちは互いに見合わし、こう言った。「それは理解できる。」</p>	<p>かわいそうな婦人は娘の遺体から目を離さず、死を受けいれることを拒んでいた。一方で貴婦人たちは彼女を慰める役目のためにすべての事をしていた。</p>	<p>「彼女の体を目の前にして、生き続けているように思えました。そうではないのだけれど。」 と云い、そのため、彼女が本当に消えてしまったことを確信するためにどのように灰に変わるかをじっと見つめた。 自分自身をかなり抑えて話したが、少ししてあまりにも苦痛の激発にとりつかれたためもう少しで車から落ちるところであった。 「ああ、分かっていたわ！」 と口々に名誉ある貴婦人たちは言い合い、どのように彼女を慰めればいかに分らなかつた。</p>	<p>母は死体を見た。 「私の前に彼女がいると、彼女が死んでいるなんて納得できない。灰を見るとおそらく起こったことを受け入れることができるでしょう。」 彼女の言葉は十分に理性的なものであったが、非常に理性を失っている様子だったので車から落ちそうであった。女性たちはそうなるであろうと予感していたが、どのように彼女を扱っていか分らなかつた。</p>	<p>その遺体を眺めた： 目の前にあって、亡くなっていることは信じがたい！その灰を見たら、起きたことを受け止めるであろう！ その言葉、まだ合理的だが、気持ちあまりにも乱れていたため、車から落ちかねないそうだった。女達の予想の通りだが、扱い方に迷うところであった。</p>	<p>「生命のない彼女の体を見てまだ生き続けていると考えることは意味がない。だからそれが灰になるのを見て、そしてついに彼女が死んだことを受け入れることを心に決めました。」 とようやく言ってぐったりと倒れ、車から落ちてしまいうるほどだ。理解できることだと思つたので、他の人たちは何をすべきか分らなかつた。</p>
<p>18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 /一〇⑧/二五)</p>	<p>内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば、いま一階（ひときざみ）の位をだに、と贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。</p>	<p>宮殿から来た伝令が着き、訓示を読み上げ、それにより貴婦人はサミエの位に属するようになった。棺の前で長い法令を読み上げることは本当に劇的な光景であった。皇帝は以前にニョーゴの位を彼女に授けなかつたことを苦しく後悔していた。そして要は許してもらうためであった。この名誉でさえも貴婦人を非難する者たちがいた。</p>	<p>宮殿の伝言が彼女たちに亡くなった人が三番目の位に昇格したことを告げた。特別なお触れをする役人が法令を公然と読む役割を担った。実は皇帝は貴婦人が存命していた時の自分の勇気のなさを見逃すことができず、彼女を公式に皇后とあえて宣言をせず、宮廷内の階級の中で彼女を昇格させることで彼女に償いをしたかった。今一度多くのものが彼を非難したが、</p>	<p>宮殿の使者に続いて皇族の使節が到着し、個人に第三階級を与えるという公示を読んだ。とてもかかない光景だった。陛下は彼女の事を決して配偶者に指名さえしなかつたが、そうしなかつたことに心を痛め、少なくとも階級一つ彼女の威厳を高めたかった。この行為でさえ彼女に対する多くの者の恨みを増幅させたが、</p>	<p>宮殿からの使者が今は亡き貴婦人が第三位に昇格されたという知らせを持って来て、そして少し後で公式の勅令を読み上げるために伝令官が現れた。皇帝は彼女を皇帝の配偶者に指名することができなかつたことにひどく心を痛めていて、少なくとも彼女を上位の位に昇格させることで埋め合わせをしたかったのだ。この心遣いにまで恨みを抱く者が多くいた。</p>	<p>宮殿からの使いが着て、お亡くなりになったお方は三位に昇進されたとの知らせがあって、すぐさまに使者は勅令を読み上げるために到着した。帝は女御を任命すること決意を至らなくて悩んだ上で、少なくとも一位まで昇進させるに補償したかった。このよう恩恵さえ憎む人が大いに居た。</p>	<p>使者が宮殿からやってきた。そして皇帝の使者は亡くなった女性に第三の位を与えるために来たのだった。皇帝の勅令を読んだとき悲しかった。陛下は彼女を配偶者にさえ任命しなかつたことがつらくて許しがたいものであると感じていた。だから少なくとも上級の位を今与えたのだった。</p>
<p>19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、思慕の情をもって偲ぶ「もの思ひ知〜」(0775 /一〇⑩/二五)</p>	<p>もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。</p>	<p>恨みをより抱いていなかった者たちは彼女の並外れた美しさを思い出した者もいた。彼女の優しさや魅力的な物腰を思い出す者もいた。そして、中にはそのような魅力的な貴婦人を知らなかつたことを恥ずべきであると考えていた者もいた。もしそのような人々の中でこれほど不当に彼女を区別していなければ、だれも彼女に反対するようなことは何も言っていなかつただろうに。</p>	<p>中にはより分別のある人たちの中にはその不遇の貴婦人は存命中は本当に並外れた人で、それはその美しさではなく、素朴さや思慮深さや優しさのせいであり、取られたばかりの措置に深く喜んだ。止むことなく葬儀のための奉納物を贈り続けていた皇帝の過剰な愛と人の心のさもしさがいかに彼女が嫌われていたかを説明した。</p>	<p>もっとも分別のある人たちは彼女の外見と立ち振る舞いの魅力が彼女の気質の穏やかな優しさと同様にあの女性が誰にも不満を抱かせないようになつたのだと最後には理解した。陛下の名誉ある貴婦人たちは今となって皇帝が彼女に対して抱いていた慎みのない愛情のためにある者たちが彼女を冷たい軽蔑とともに彼女を扱うようになったと分かり、そして愛情と共に彼女の性格のぬくもりや優しさで彼女を思い出した。「今や彼女は行ってしまった。」という完璧な例であった。</p>	<p>一方、理性と優しさを備えた人の中には類ない存在感とまた同時に素朴で優しく非の打ちどころのないあの貴婦人がいかに愛されていたかに気づくことができたものもいた。また初めてたとえ意図していたとしても彼女を憎むことができなかったと思ひ起こした。彼女は度を超して皇帝に気に入られていたため、中傷の犠牲であったのだ。名家の貴婦人方は今になり彼女がいかに魅力的でいかに彼女が備えていたいたいけな愛情がいかに深いものであつたかを思い出した。「居ないときに…」という表現をまさにこのような機会のためにと口々に強調していた。</p>	<p>逆に、あの優しい気取らない非の打ち所のないお方の並外れの存在であつてこと、いかに愛されていたことを気づく、理性的で情けのある人々も居た。または、憎みたくても憎めないことを初めて思ひました。帝の過剰な恩恵を賜ったこと故に批判的となつていた。高貴な方々は今となって、いかに魅惑的な方であつて、いかに深く愛情が注がれていたことを思い出した。お互いに、まさにこのような折に、「いなくなる時に・・・」と語り合つていた。</p>	<p>最も知覚している人たちは彼女の顔や姿の素晴らしさと性格の平静さと共に彼女に会うことは喜びで憎むことは難しいということとその時思い出した。ひいきした恥ずべき扱いのために彼女に無慈悲な嫉妬をしていたが、陛下の名誉ある貴婦人たちは彼女の分別のある人格と優しい心のおかげで彼女をあがめて恋しく思つていた。「今や亡くなってしまった。」という表現はこのような状況に関して述べなければならぬ。</p>

<p>20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さない「はかなく～」(0809 / 一① / 二六)</p>	<p>はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、細かにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しうおぼさるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。</p>	<p>哀悼の7週間は皇帝の命令により細心に遵守された。時が経ち、宮廷の貴婦人たちからは完全に離れて暮らしていた。彼の召使たちの生活はつらく痛ましいものであった。皇帝は昼も夜も止むことなく泣いていた。コキデンと宮廷の身分の高い貴婦人たちは彼女への恨みは減っていない。 「まるで皇帝は彼の人にそうであったように思い出にもまた恋しているようだ。」と絶えず言われていた。</p>	<p>結局それでも、その女性に対しての敵意を無傷で維持していた一人の貴婦人がいた。君主の最初の配偶者の無慈悲なコキデンであった。「なんと恥ずべきなのでしょう！」と長子の母は不平を言った。「誰が彼らの恋愛がこんなに長く続くといえたでしょう？」</p>	<p>陰鬱な日々が過ぎるにつれて、陛下は大きな注意を払ってそれぞれの新しい葬儀の務めを引き受けていた。時の経過は彼の苦しみをあまりにわずかしかと和らげなかったので、暗くなったときに彼を世話するために自分の貴婦人たちの誰も呼ばず、昼も夜も泣いて過ごし、そしてただの彼の状態の証言者であったものでさえも秋が露にとでも覆われていると述べた。「彼女は彼にとってあまりにも多くを意味していたので、死んでさえもある女性を陰にする。」この文は配偶者のコキデンの気持ちを要約しており、個人に関してはいつものようにとても無慈悲であった。</p>	<p>意味もなく日々が過ぎた。皇帝は故人の魂の健康のための週ごとの儀式の催すことに心を砕いていた。彼の心痛は止むことなく続き、苦しみ、貴婦人方と夜一緒にいることを要求することもやめた。そして、いつも泣きぬれて昼も夜もこのように過ごしていたので、そのような苦境に彼がいることを見ていた者にとってさえも、たくさんの滴のある秋であった。「あのような見せかけを今まで続けなければならぬ」とは何とおろかなことか。」非常に言ったのはコキデンの小屋の貴婦人つまり君主の年長の子供の母であった。</p>	<p>意味なく感じる日が多く経ちつつ。お亡くなりになったお方の冥福のための週的な儀式の行事を監督した。その悲しみは絶え間なく続き、心痛のあまり方々の夜の伴いを断念して、常に涙の溺れていて夜昼を過ごしていたため、このような試練に耐えていたことを見る人のためにも、露の多い秋になった。けれども、その憎しみを静まろうともしなかった方がいた。「ばかばかしい、あの寵愛ぶりまだ続くなんて」と帝の上の御子の母親、弘徽殿の方が無情に言い張った。</p>	<p>日々は早く過ぎた。最初の7週間の追悼の儀式を細心の注意を払って実行させた。時の経過にもかかわらず途方に暮れて悲しみを感じていた。夜彼に仕えていた貴婦人たちを無視して、朝も晩も涙にまみれて過ごして、それゆえ彼を取り囲む人たちにとってさえも露でいっぱいのおどろきだった。「彼のひいきは彼女の死後も元気を取り戻せないほどだ！」とコキデンの別棟では残酷に言われていた。</p>
<p>21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を～」(0850 / 一⑤ / 二六)</p>	<p>一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつつ、ありさまを聞こしめす。野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりもおぼし出づること多くて、靱負(ゆげい)の命婦といふを遣はす。</p>	<p>しかしながら、時には皇帝は長子であるコキデンの息子を受け入れていた。しかし貴婦人の死以来は彼の息子の存在と違うものは望んでいなかった。しばしば知らせを求めて信頼のおける召使いか彼の昔の乳母をどんな子供の進歩も知らないことがないために送った。秋分が近づいてきた。肌の上をなでる空気が氷のように冷たくなった。多くの思い出が君主の心を動かし、彼の矢筒持ちの娘を手紙を持たせて貴婦人の家に送った。</p>	<p>秋分になり、夕暮れは冷え始めた。痛みはまだ沈んだままで、君主は自分の息子の進歩を近くで追うために伝令を送ることを片時も止めず、中位の階級の女性で警備の役人の娘のミョブを介してお気に入りの女性の母に手紙を送った。</p>	<p>ただ彼女の長子を見るだけで陛下がどのくらいまで年少の息子を好んでいるかを思い出すには十分であった。そして子供が元気でやっているかを調べるためにある名誉ある貴婦人あるいは信頼のおける乳母を使いに行っていた。ある秋の荒れた突然寒くなった日の日暮れ、陛下は今までにないほどに強く思い出が心に浮かび、ユゲイノミョーブとあだ名のついた名誉のある貴婦人を彼の愛する人の部屋に送った。</p>	<p>君主自身が第一王子に目をかけて下さっていたとき、思いは止まることなく年少の王子に再び会いたいという願望の周りを回っていて、子供の祖母の家に誰か信頼のおける使用人、あるいは乳母を子供がどのような様子かを調べるために遣わせた。秋風が解き放たれ、野を荒らした。黄昏時には急に寒くなった。前にもまして思い出が彼の心に押し寄せ、そして彼はユゲイノミョーブという名の中位のある貴婦人に伝言を委ねた。彼女の父は警護の士官であった。</p>	<p>希に第一の御子に目を配る折りにも、帝の思いは絶えず若い御子と再会することに集中していて、そのお祖母さんの家まで、信頼の厚い仕えもの、あるいは乳母を見舞いに送っていた。台風が発生したある夕暮れに突然肌に寒さを感じられ、普段より多く思い出が浮かび、子供のことを問い合わせるのに皇帝の警護隊の名誉ある貴婦人と言われている女性を府の官人である中級の女房に手紙を託した。</p>	<p>第一王子を見るたびに、彼の代わりに幼い王子に対して感じている愛情のことを考え、信頼のおける名誉ある貴婦人と乳母を彼がどのような様子であるかを尋ねるために送っていた。台風が発生したある夕暮れに突然肌に寒さを感じられ、普段より多く思い出が浮かび、子供のことを問い合わせるのに皇帝の警護隊の名誉ある貴婦人と言われている女性を送った。</p>
<p>22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る「夕月夜の～」(0877 / 一⑨ / 二六)</p>	<p>夕月夜のをかしきほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるものの音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし気配容貌の、面影につと添ひておぼさるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。</p>	<p>月が素晴らしい時であった。使者の出発の際、皇帝は夜思いにふけて時を過ごした。その時間、すでに他の日もそうであったが、音楽を愛でた。貴婦人の言葉を思い出していた。あまりにも軽快で快い調べに交じってしまうようにも思えた。全てがまねなこと、彼女の顔、外見、体型を思い出した。一つの詩を思い出した。現実のことは暗闇の中にあり夢よりも本当のように思えない。所有するにはすべてを与えていただろう、それらの夜のまさに夢であった。</p>	<p>そのような夜には、2人の恋人は弦を交代しながらいつもコトを弾いていたものだった。亡くなった女性のコトは彼の人生の間に聞いてきたもののコトとは違って鳴り響いて、彼に話すために弾くのをやめたとき、彼女の声もまた比類のない響きでいっぱいだった。彼女における全てが結果として並外れたものであった。彼女の顔、声、態度…詩人が書いていたように、たとえ今そのような長所はもう輝く夢よりも実体がなくても。</p>	<p>その後、彼女が黄昏時の美しい月下出発した時、再び自分の夢にひたされた。そのような夜にいつもそうであったように彼女がそばにいるような感じがした。音楽を奏でてもらうために彼女を呼び、彼に彼女が向けた楽器の鳴る音あるいはもっともかすかな言葉でさえも間違いなく彼女のものであった。しかしその鮮やかな夢よりも暗闇の中にただ彼女がいてほしかった。</p>	<p>日暮れの月のうっとりするような時に彼女をあの場合に遣わせた。そして追憶にふけた。同じような夜に故人と彼はお互いにコトを弾きあった。彼女が弾いたコトは他の楽器にはないある音色を持っていて、彼女が自然な調子で話していた時、彼女の言葉はまれにみる響きを帯びていた。彼女の顔、しぐさは彼を離さず、しかし「光り輝く夢に勝るものはない」と言われていたように現実からはかけ離れていた。</p>	<p>宵の月の魅惑な頃おいにあの所まで間に彼女をあの場合に遣わせた。そして追憶にふけた。同じような夜に故人と彼はお互いにコトを弾きあった。彼女が弾いたコトは他の楽器にはないある音色があって、自然な調子で話をしたら、その言葉は同じく他にならぬ響きがあった。その面影、仕種は「輝きのある夢より実体が薄い」と言われていたように現実からはかけ離れて、云われているように。</p>	<p>夜に見事な月下に彼女を出発させて、思い出にふけて月を見つめていた。似たような場合は音楽を奏でさせ、彼女は並外れた旋律を鳴らせた…そして、彼女が言っていたささいな言葉、彼女の姿、他の人とは違う彼女の動き…幻に照らされたかのようにそばにそれらがあるように突然感じたが、暗闇の現実の中で彼女と一緒にいる方がましであろうに。</p>

<p>23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む「命婦かしこ〜」(0907/一一②/二七)</p>	<p>命婦(みょうぶ)かしこにまで着きて、門引き入るより、気配あはれなり。やもめ住みなれど、一人一人の御かしづきに、とかくつくるひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまへる、闇にくれて臥しづみたまへ〜」(0907/一一②/二七)</p>	<p>その間、すでに使者は貴婦人の母の邸宅の門に到着していた。ゆっくりと回させた。予想していなかった光景が目の前に現れた。老婦人はしばらく昔から未亡人で彼女の全ての土地を娘に世話させていた。しかし、死後は年齢にくじけて、彼女がほらうっておいたものは何にも触っていない。どこにでも背の高い草が育ち、この荒廃に秋風の残酷さが加わっていた。巨大なヨモギの藪が窮屈に合わさって立っているのを月の明るさだけがそれを貫くことができた。</p>	<p>ミョブが祖母の家に着いて、車が玄関を横切った時、なんと孤独な場所と回させた。母は未亡人にもかかわらず家を良い状態に保ち、一人娘に対して感じていた深い愛情で立派に生きていたが、ああ、今や苦しみで悩み、雑草は高く育ち、風は無慈悲のように努めた。しかし、彼女の死後は荒廃が場所を支配し、庭は根と雑草のジャングルで、そこでは秋風が壁と戸をおびやかしていた。満月の光だけがそのような荒廃の中に道を開いていた。</p>	<p>ミョーブが住まいに着いて戸を横切るとすぐに悲嘆でいっぱいになるのを感じた。母は未亡人にもかかわらず家を良い状態に保ち、一人娘に対して感じていた深い愛情で立派に生きていたが、ああ、今や苦しみで悩み、雑草は高く育ち、風は無慈悲のように努めた。しかし、彼女の死後は荒廃が場所を支配し、庭は根と雑草のジャングルで、そこでは秋風が壁と戸をおびやかしていた。満月の光だけがそのような荒廃の中に道を開いていた。</p>	<p>ミョーブは祖母の家に着いた。車は玄関を通過して引かれた。しかし、何と孤独な場所であることか！年若い貴婦人はその時まで夫のいない隠居暮らしを送っていた。一人娘を煩わせなくなかったので、いつも家の庭はみっともない眺めにならないように手入れしてあった。その時まで全ては闇に沈んでいた。野菜畑には雑草が刈り取られず育っていて、秋風が威嚇するように吹きつけていた。月の明かりだけがその光を覆せることなくやぶの中にどうにか道を開いていた。</p>	<p>ミョーブは祖母の家に着いた。その車は門をくぐって引っ張られた。が、寂しい所だ。老いたお方はその時点まで寡婦ながら隠遁的な生活を送っていた。一人娘は困ることなくことを望んで、見苦しい風景がなれないよう、家の庭を常に手入れしていた。その時は、周りは暗闇のなかに包まれていた。園庭の雑草は刈らずに茂っていて、秋の風はしつこく吹き続けていた。月の光線だけはその光を鈍くするなく草むらを掻き分けた。</p>	<p>着いた時、名誉ある貴婦人の車が玄関を横切ると、彼女は涙を誘う状況に出くわした。母は未亡人の生活を送ってきたが、自分の一人娘の幸せを確かなものにするためにあちこちで自分の家を美しくするために努力し、こうして心地よい人生を送ってきたが、今や暗闇に包まれて憔悴してきて、牧草は高く伸びて台風がさらにもっと荒廃させた印象を与えていた。月の明かりだけがつかのマント越しに止まらずに舞って差し込んでいた。</p>
<p>24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える「南面に〜」(0937/一二②/二七)</p>	<p>南面(みなみおもて)に下ろして、母君もとみにえものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」と、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになん』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」と、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。</p>	<p>使者は家の入り口までたどり着いた。老婦人はその時のための歓迎の言葉を見つけないことができなかった。こう言った。「ああ、この世であまりの時間とどまってきました。あなたのような人が私の家の道を通ることをさえぎる湿った木立の間のこの道を進んできたことを考えるのをどうすれば耐えることができるでしょう？」そしてすすり泣きだした。その時、矢筒持ちの娘は彼女に言った。「以前にあなたを訪ねた宮殿のある貴婦人はこの光景を前にして彼女の心を襲った感情を陛下に報告しました。そして、私も、奥様、同じ事態に居合わせています。」皇帝の伝言を繰り返す前にためらった。</p>	<p>ミョーブが車から降りたとき、老女は何を言えいいのかわからなかった。「私の人生はあまりに長く続いたのです！」と弁解した。「あなたのような皇室の使者が私の家に近づくことをほとんど不可能にしている雑草の間の道を開いているのを余儀なくされていることを思うとき、恥ずかしい思いをします。」ミョーブは答えた。「少し前にあなたを訪れた宮廷の一人の貴婦人が自身の目にそれを見ていなければ、あなたの悲しい状況を感じなかっただろうと私たちに語りました。私は意志のない人間ではありませんし、このような孤独を前にして涙をこらえるのは難しいです。間を取って君主の伝言を朗読し始めました。」</p>	<p>最初は話すことができなかった。「こんなに長く生きなければと望み続けています。」ついに言った。「そして陛下のお使いが私のところまで来るためにその雑草の中を道を切り開いて来なければならなかったのを見るととても恥ずかしく感じます！」それが本当に我慢できる以上のことであったかのように泣いていた。「人々を束ねていた貴婦人があなたを訪れた後、皇帝に彼女が深い心痛からどんなにあなたのことで悲しんでいたかを話しました。」ミョーブは答えた。「私でさえ、細やかな感情は持ち合わせているように見せかけようとはしませんが、彼女が言いたかったことはとてもよく分かります。」後に少し落ち着いてから、老婦人に陛下の伝言を伝えようとしていた。</p>	<p>車を持ち上げられ、ミョーブは南の門に降りることができた。祖母は初め言葉を発することができなかった。「私にとって生き続けて、そして今あなたのような露で濡れた野生のヨモギのやぶからこの家に辿りつく誰かを迎えることは責め苦です。どのくらい恥ずかしいことかあなたに言うことができません。」そのように述べると、涙をこらえることができなかった。「先日あなたの家を訪ねたある貴婦人が自分の目で見なければならなかったことをあなたの悲痛と嘆きを理解することができるまゝに私たちに知らせてくれました。キリツポの貴婦人の母についてのうわさを聞いた後、心の底からの痛みを感じ、死んでいくかのように思われたと皇帝には伝えていたのです。私はただ取るに足らない者ではありますが、私もまたそれにもう耐えきれることができないほどまで深く気の毒に思います。」少し間をおいて、皇帝の言づてを伝えた。</p>	<p>車はあげられて、ミョーブは南の門で降りることができた。その祖母は、最初は言葉を出すことができなかった。私にとって、生き続けるのは苦痛のことで、まして今、あなたのような方は、この野性ヨモギを覆いかぶす露の家に着くこと。恥ずかしくて言い表せないほど。このように叙述して、涙をこらえることなく。前日はこの邸宅を訪れた方から、自分お目で見たとを私たちに教えてくださったから、最初にあなたの悲しみと鬱ぎこんでいることを理解できました。帝に奏したところ、キリツポの方の母親についての件を聞いた後、息が切れるほどの深い悲しさを感じたということ。私みたいな取るに足らない者でも、耐えられないほど深く悲しんでいる。ひととき後に、帝の通信を述べた：</p>	<p>彼女を南門から降りさせて突然また母親は一言も発することができずにいた。「生き続けることそれ自体が辛い…そして陛下の使者がこれらのつるの露を横切っているのを見るのは何と恥ずかしいことなのでしょう…。」とまるで力の限界であるかのように泣きながら言った。「ここに訪問で来た後、宮殿の人事の副長官は陛下に言いました。『訪問は私にとっても大きな痛みを引き起こしました。あたかもそういう気持ちを起こさせるかのように。』私もまた、私の限られた分別にもかかわらず、私は耐えられなくなりました。」と彼女に名誉ある貴婦人は言い、落ち着きを取り戻すことが出来たときに陛下の伝言を伝えた。</p>

<p>25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す「『しばしは～』(0987／一二⑦／二八)</p>	<p>『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひつづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひんや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しうおぼさるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうも、のたまはせやら、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見えてまつるらむと、おぼしつづまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承りはてぬやうにてなむ、まかではべりぬる」とて御文たてまつる。</p>	<p>『暗闇の中で私の夢の目的を達成したいと望んで私の心に訊ねた。しかし長い瞑想の後に目覚めの道を見つけることができなかった。ここでは誰も私に助言することができない。こっそりと私に会いに来てくれないでしょうか？そのような悲しく荒涼とした場所で若い王子に日々を過ごさせるのは良くない。彼にもまた来てほしい。』 「これと別のこともまた言いました。混乱して、慰めもなくため息をついて。そして、私は、私に痛みを隠そうとどれほど努力をし遂げようとしているのかを見て、すべてを聞かずに彼のもとを去りました。けれどここにあなたに送った手紙があります。」</p>	<p>「皇帝は最近自分の人生はただの悪夢、決してもう終わることのないと恐れる悪い夢でしかないとはっきりと言いました。彼の唯一の熱望していることは痛みを分かちあうことができるような傍にいる誰をあてにすることです…もしあなたが宮殿に移り住む準備ができていたら、大変あなたに感謝することでしょう。子供と一緒に、もちろん。この荒涼とした家で彼の息子が成長するのを考えるのは耐えられないです。できるだけ早くあなた方には宮殿に行くよう嘆願します。以上が瀕死の人のようにため息をつきながら私たちの皇帝がおっしゃったことです。」</p>	<p>「いくばくの間私は夢を見ているに違いないと疑っていた。しかし私の頭の中のつむじ風も落ち着き、結果としてまだ私に鋭く痛みを伴っているのはする必要があるので、このような苦しみに来る日も来る日も取り囲まれて困惑している。お願いだから、早く来てくれないか？」 彼の言葉はこのようなものであった。彼の目には涙が一度またもう一度と浮かび、言葉を終わらせることができなかったが、それが悪い印象を生み出すことを彼もよく分かっていたし、私もそれに気づいた。私はとても悲しかったので彼が言わなければならなかったことを全て聞かずにあなたに会いに走ってきました。しかしそれはこの手紙で読むことができます。ミョープは女性に手紙を渡した。</p>	<p>「少しの間全てが幻覚の中で方向を見失い進んでいたように思われ、心の揺れが短くなった時に、苦しみの終わりがないと気づいたのだと皇帝は明らかにした。もし少なくとも痛みと付き合うならば、考えてそしてに再配置されることにも納得してくれるだろうと想像されたのです。子供がこの涙の住処で元気をなくしているのでやんごとなきお方は取り乱れることを熱望されていました。しかし、その時すすり泣きのため思考が中断し、彼が馬鹿げているほどか弱いと私たちが思っているということをおそれられていました。私は非常に苦しみを感じ、ここまで彼の言うことを最後まで聞くことなく出てきたのです。」 そして彼女にやんごとなきお方の書状を渡した。</p>	<p>彼は曰く、ある時期にはすべては妄想の中で目的なきに彷徨う感じがして、その動揺が収まりはじめたころ、憂えることは終わりがないと気づいた。もし、悲しみの中にも、お供する誰かいたらと、そしてあなた様、秘かに朝廷へ移すことに決心を唆させる方法があったらと。上は心乱れるのを見て、速やかに宮殿へ移すことを願っている。が、そのときむせび泣きはその叙述を途絶えて、もってのほかにも弱々しく見られるとおそれていたことが皆は明らかだった。私は心細く、最後まで聞かなくてここへ赴いた。 彼女へ上の通信を渡した。</p>	<p>『少しの間私は混乱していて、夢を見ていたのではないかと自問自答していたがすでにもう目覚めることができない。最悪なのは何をすべきかを一緒に議論する人すらいないことだ。秘密で私に会いにきてはどうだろう？幼い王子が露の中で暮らしていることが心を心配させ、心を締め付ける。すぐに宮廷に来てくれ。』 これが泣きじゃくりながら、自分の考えを素早く伝えることができずに言っていたことで、この苦しみを前にして、弱く思われないようにそれをごまかそうとしていたのですが、聞き終わる前に出発しました。」 と言って彼女に手紙を渡した。</p>
<p>26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった「『目も見え～』(1043／一二⑩／二八)</p>	<p>「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん」とて見たまふ。 「ほど経ば少しうち紛ることもや、と待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなきを、今はなほ昔の形見にならずへてものしたまへ」など、細やかに書かせたまへり。 宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、見えたまひはてず。</p>	<p>「私の視力は不足しています。」と老婦人はつぶやいた。「この手紙を光に近づけさせてください。」 この手紙にはこう書いてあった。 『ある程度の時間が経てば、私の悲しみにいくらかの平穏といくらかの軽い忘却が可能であろうと思うようになった。しかし日々が経てば経つほど、私の人生はより耐えられないものになる。絶えず子供のことを考え、彼が何からできているのかを自問する。彼の母と私が、同時に、彼の教育に気遣うことができればと望んでいた。だから、このことで交代して、過去の思い出の中のように私に子供を送ってくれないでしょうか？』 書状はそのようなものであった。様々な指示がそれに付随しており、一緒になっていた詩にはこう書いてあった。 タカギの野原で新鮮な露を一つずつ取り出す風がざわめくと、私の心はリラの幼い芽の方に急ぐ。このように象徴的に若い王子のことを話していた。しかし彼女は手紙を全て読まなかった。ついにはこう言った。</p>	<p>「よく見えませんが、私に手紙を貸してください。」 と母は言った。 手紙の中には文書で聞いたばかりの同じ嘆願を見つけた。最後には皇帝は詩を書いていたが、老婦人の涙であふれた目はほとんどそれを読ませなかった。 『ミヤギの平野の上に露をこぼす風の歌を聞くと、私は沼のいたいけなクローバーのことを考える。』 「皇帝に言ってください。」 少し熟考した後祖母は答えた。</p>	<p>「涙が私の目を曇らせても、この思慮深くて優しい言葉に照らして…。」と貴婦人は言った。そして読み始めた。 「時は私の悲痛を軽くし始める慰めをもたらすことができるだろうと考えていたが、月日の流れが私を失望させ続けるにつれて、どのように痛みを耐えたらいいのかもほとんど分からない。何度も私の思考は子供に向かったが、君と彼の世話をできないことが大いに私を困惑させている。過ぎてしまった日々の思い出に私に会いに来てくれ…。」 皇帝は心からの気持ちを込めて書いていた。最後には詩を付け加えていた。 ミヤギの荒地を露で覆う風のそよぎを聞くと、私の心は、慰めようもなく、ハギの小さな葉に向かっていく。 しかし老婦人は最後まで読むことができなかった。</p>	<p>「私の暗くなった眼にはそのようなお言葉は光をもたらしてくれます。」と故人の母は言い、そして読んだ。 「私は時が経つにつれて私の痛みがいくぶん和らぐのを目にするのを期待して生きてきたが、日々が月々に加わり、私の中の悲しみは、私をも耐えられないまでに私を苦しめてきたものは増えていくのだ。そしてあんなに幼いあの子は、私が心配して止まないのに、彼を気遣うのにあなたと意見をまとめることができないうんてなんという逆境であろうか！今後は彼は私にとって昔の日々の生きた記憶であると考えてください。私のもとに彼を連れてきてください。」 これがおおよ彼の懇願の中にお書きになったもので、またさらに加えた。 広大なミヤギノを露で覆う風の音を聞くと、ハリエニシダの私の小さな若芽を気の毒に思う。 しかし最後まで読むことはできなかった。</p>	<p>暗くなった私の目として、光を届く言葉だと、亡くなったお方の母親は云って読みはじめた。 「時間につれてすこし悲しみは減る」と望みながら生き存えてきたが、日がたつて、月が立っていくと、悲しみはますますばかり、耐えられない程塞ぎ込む。あの小さい子へ心配が収まらなかったまま、あなた様と同意して一緒に彼をまもるのができないことは遺憾である。以降、彼は昔の日々の生きた記憶になる存在であると理解して、私のもとに連れて来てください。」 だいたいの書いたことはここまで。その続きに： そよぐ風の 広みやぎのを 露で覆う 我が若芽の萩を あわれむ 最後まで読めなかった。</p>	<p>「私の目は見えないがこれらの優しい言葉から判断して…。」母は言って手紙を見た。 時間が少し私の痛みを和らげてくれるのをあてにしているが、月日が過ぎた後、耐えられない心痛がそれに加わった。子供がどうしているのかを自問している。君と私と一緒に子供を育てないことが心配だ。過去の思い出として私のことを考えてここにきてくれ。 このようなことが愛情をこめて書かれていた。またこのようなことも。 ミヤギノの露をつなぎながら吹いている風の音が小さなハギのことを考えさせる。 しかし母親はそれを分かるには至らなかった。</p>

<p>27 母君は桐壺更衣の入内のいきさつを語り、横死のようなさまを嘆く「命長さの〜」(1094／一三⑥／二九)</p>	<p>「命長さの、いとつらう思ひたまへ知るるに、私の思はんことだに、恥づかしう思うたまへはべれば、ももしきに行きかひはべらんことは、ましていと憚り多くな。かしこき仰せ言をたたび承りながら、自らはえなん思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはんことをのみなむおぼし急ぐめれば、ことわり悲しう見たてまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまいまい、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>「長い人生が苦しみ以上のものを意味しなくても、私はすでにあまりに長い時間を現世にいたので私のことをタカサゴの松に例えることができず、どこでどのようにここを出て百の塔の宮殿に向かうための価値を見つければいいのでしょうか？これほど繰り返された命令にもかかわらず、私は従うことができません。しかし、若い王子は（私は彼がやんごとなき望みを予感しているのかは分からない）すでに行きたくてうずうずしている。このような場所で落ちてまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまいまい、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>「私の長い人生はとても厳しい試練味しなくても、私はすでにあまりに長い時間を現世にいたので私のことをタカサゴの松に例えることができず、どこでどのようにここを出て百の塔の宮殿に向かうための価値を見つければいいのでしょうか？これほど繰り返された命令にもかかわらず、私は従うことができません。しかし、若い王子は（私は彼がやんごとなき望みを予感しているのかは分からない）すでに行きたくてうずうずしているように思われます。前世で得た呪いが私の上ののしかかり、あらゆる犠牲を払って私のそばに子供をとどめておきたいと思うのは恐ろしいことだと心配しているのです。私があなたに言ったことを皇帝に伝えてください。」</p>	<p>「今になって痛ましいのは長生きをすることだと知って、あの松が私について考えているに違いないことを想像すると恥づかしい」と告白した。「とりわけそのような動機であえて陛下の住まいに出入りできないのです。このような度重なる招待をもって私をひいき下さるのは大変なご好意なのですが、残念ながら決して私には行くことができません。一方、彼の息子はとてもそうしたいように思われます。起きていることをどの程度まで理解しているのか私は確信が持てませんが、そのように彼が感じていることに確かに私は悲しいのですが、そのことで彼を責めることはできません。どうか陛下にこの私の心からの思いを伝えてください。ここにとどまれば子供の尊厳が弱まることを恐れています。不幸が私に教えてくれて、とどまるのが間違いであるからです。」</p>	<p>「私は長い人生という残酷な経験をしてきました。タカサゴの松林が考えることができることの考えに直面して混乱してしまうほどに。宮殿に近づくことは私の動揺を大きくするばかりです。だからあなたがふさわしい言葉を発していたのは知っています。私に関してはあえて出発しようと思いません。小さい王子に関してはどのくらい理解しているか分かりませんが、見たところやんごとなきお方の元に戻りたくてうずうずしているようで、もったいみずいので、それゆえ苦しみと共に考慮します。これで私の方から陛下にお伝えしてほしいことは全てです。私の由々しい状態の中で、子供が私の近くにいることは不運で哀れなことでしょう。」</p> <p>彼女の言葉はこのような様子であった。</p>	<p>長生きのつらい経験をして、「高砂の松が思う」ことまで困惑した。宮殿に上るとその迷う気持ちはますます。そのため、尊い言葉の知らせを受けながら、私のこと限って、この家から離れるのを決意できない。若い御子に当たって、どこまで把握しているか分からないが、帝の前にはやく帰る気が強いような思いはもったいみずいので、私は悲しく思います。私から陛下に奏することは以上です。今のこの忌み深いありさまのなかで、子供は私のもとに残るのは惨めな不運なことです。</p> <p>このように述べた。</p>	<p>「今は長い間生きることがどんなに残酷なことか理解できます。そして『松が私について考えることにすらすらと恥づかしく思います。』詩人たちが百の石と木と呼んでいる宮廷に行くという考えは、まだ大きなためらいを私に生み出すのはそのためです。何度もそのような優しい言葉を頂いたにもかかわらず、私自身が行く決心をつけることができないのです。若い王子はどのくらい理解しているのでしょうか？準備ができていて、行くことを急いでいるように思われます。もちろん私が置いていかれることは悲しいです。お願いです、陛下に私が思い感じていることを伝えてください。私は不幸な人間だから、ここに住むことは不運で許しがたいことなのです。」と言った。</p>
<p>28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ「宮は大殿籠〜」(1149／一三⑩／三〇)</p>	<p>宮は大殿籠（おほとのごも）りにけり。「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらんに、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。</p>	<p>「もしかして子供は寝ているだろうと言われていました。」と矢筒持ちの娘は言った。「皇帝に説明するために会いたかったのですが、宮殿に居る必要があり待つことができません。遅くなるに違いありません。」急いで去ろうとしていたが、老婦人が彼女を引き留めてこう言った。</p>	<p>「彼に会いたかったのですが、寝ていると言われました。」とミョブは言った。去るために立ち上がっていた。「そして、とどまることはできません。なぜなら彼の父が私を待っていて、もうかなり遅いからです。」</p>	<p>子供は眠っていた。「彼に関して陛下にお知らせすることができるよう会いたかったのですが。」とミョーブは戻る準備を整えながら言った。「しかし私を待っているのです。すでにとても遅くなるに違いありません。」</p>	<p>そうしている間、小さな王子は自分の寝室で休んでいた。「私は王子に会って彼の状況の詳細な報告をしたかったのですが、陛下がお待ちになっています。日が暮れるまで私はぐずぐずできないのです。」と戻りがっている伝令はこのように言った。</p>	<p>その間、小さい御子は部屋に休憩していた。「その様子を見て、詳細な報告をしたかったが、陛下は私の帰りを待っていて、夜遅くまでここに居られない」と。このように帰るに焦った使いは云った。</p>	<p>王子は既に眠りについていました。「彼に会って詳細に彼の状態を陛下にお伝えしたかったのですが、私を待っているはずで、遅くなってしまいます。」と急いで名譽ある貴婦人は言った。</p>

<p>29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る「「くれ惑ふ〜」(1163 /一三⑩ /三〇)</p>	<p>「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどこにまかてたまへ。年ごろ、嬉しく面だたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと、思ひたまへながら、ただの遺言を違へじとばかりに、出だしたてはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつづ、まじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひはべりつるに、横さまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になん」と、言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。</p>	<p>「陰気な思考の暗闇の中をさまよっている人たちは話すときに彼らを導く一筋の光を得ることができません。私はあなたが望むときに可能な時にあなたに私を何度か訪ねてくれるように頼みます。以前は、あなたの存在を私にもたらした日々は私にとって本当に素晴らしい喜びの日々だったのです。今日は、あなたは私にとって何ぞ知らせの使者なんでしょう！自分の幸運を信用している人たちは何て正気でないのでしょうか！私では最も高い名誉ある地位の人たちが属していて、そして密かに非人間的な悪の犠牲者であることが分かった。ねたみが心配の重い包みを彼女の上に積み重ね、当然のように、死んだというより暗殺されたように思えます。確かに、思慮を持って皇帝が彼女に敬意を払ってくれているその愛は、時に私の心がはっきりと理解できないようで、無関心でいるよりずっと残酷に私には思えます。」涙が妨げるまで話した。その時にはもう夜になっていた。</p>	<p>「できるときにいつでも私を訪ねてきてください。少しの会話で闇の中で迷っているこの心の上に一筋の光を放ちます…運命は私たちにとても寛容ではないようです。全ての私たちの希望は娘が生まれた時から彼女にかかっていました。彼女の父は宮殿に彼女を送らなければならない、そして、彼が前に死んでも、これが彼の最後の意思であると繰り返すことを止めませんでした。私は娘には適切な保護がないので、他の方法の方がより幸せだったということは完璧に分かっていましたが、私の約束を主張し、一度ならずも、彼女が死んでも彼の期待をくじかないように忠告しました。後見人はいなかったけれども、そしてこれがいくつかの困難の原因でもあったけれど、私は彼の意思を果たすことを決心した…。宮殿では最も高い名誉ある地位の人たちが属していて、そして密かに非人間的な悪の犠牲者であることが分かった。ねたみが心配の重い包みを彼女の上に積み重ね、当然のように、死んだというより暗殺されたように思えます。確かに、思慮を持って皇帝が彼女に敬意を払ってくれているその愛は、時に私の心がはっきりと理解できないようで、無関心でいるよりずっと残酷に私には思えます。」涙が妨げるまで話した。その時にはもう夜になっていた。</p>	<p>「私の心の耐えがたい暗闇を少し追いついてください。少しの会話で闇の中で迷っているこの心の上に一筋の光を放ちます…運命は私たちにとても寛容ではないようです。全ての私たちの希望は娘が生まれた時から彼女にかかっていました。彼女の父は宮殿に彼女を送らなければならない、そして、彼が前に死んでも、これが彼の最後の意思であると繰り返すことを止めませんでした。私は娘には適切な保護がないので、他の方法の方がより幸せだったということは完璧に分かっていましたが、私の約束を主張し、一度ならずも、彼女が死んでも彼の期待をくじかないように忠告しました。後見人はいなかったけれども、そしてこれがいくつかの困難の原因でもあったけれど、私は彼の意思を果たすことを決心した…。宮殿では最も高い名誉ある地位の人たちが属していて、そして密かに非人間的な悪の犠牲者であることが分かった。ねたみが心配の重い包みを彼女の上に積み重ね、当然のように、死んだというより暗殺されたように思えます。確かに、思慮を持って皇帝が彼女に敬意を払ってくれているその愛は、時に私の心がはっきりと理解できないようで、無関心でいるよりずっと残酷に私には思えます。」涙が妨げるまで話した。その時にはもう夜になっていた。</p>	<p>「私の絶望した心を暗くしている闇はまだ晴れず、私を苦しめています。しかしながら、私はあなたに説明したいのです。個人的にあなたの好きなときにまた会いにいらっしやうに会いに来ておくれ。幸せな時や祝祭の際にいつも訪ねて来てくれていた。そしてここで今あなたに会うことは、とても悲しい伝言の使者なので、人生が痛ましいものになるということを手にして、陛下の奉公に入らせられるように私に強く頼みました。『私がいなくなったというだけで意気消沈したり諦めたりしてはだめだ。』と私に言っていたものでした。」このように、そこに彼女を送った。しかるべく彼女を支えてくれる人なくして宮殿の奉公に入らなければならぬのであれば、もしかしたらそうしないほうがいいのではないかと考えていたけれど。不運なことに、陛下は彼女にその度合いのひいきに値しない誰かにとっては遥かに適度以上に彼女に愛情を抱きました。しかし、彼女は自分が受けていた恥ずべき扱いに耐えて、休みなく陛下に仕えました。ある女性たちのねたみからの大きくなる負担と彼女がさらされていたますます不快になる状況によって彼女が病気になるまで。だから私は陛下がそんなにも彼女に関心を持たれないことをより好みしました。しかし、私がこうやってただ一人でこう言っているのは彼女の死が私をこんなにひどい闇に沈めたから貴婦人の声は弱くなり、突然泣き始めた。その頃にはとても遅くなっていた。</p>	<p>「絶望に負われて私の心を暗くする闇はまだ晴らすことなく悩ませているそれにして、それを説明したいので、貴方の私的な都合のいい時に、また着てください。貴方は、年々々々晴れ晴れしいめでたい時に折しも光栄に迎え入れることができたのに、贈り物をしてくれましたが、今陰鬱な伝言の使者のあなたに会うことは、ああ、ここにも残酷な運命の影響があります。ここにいない者が現世にたどり着いた最初の瞬間から私たちの希望は彼女にありました。そして亡き大参謀が最後の息まで絶えず「私の夢は彼女が宮廷につかえることだ。どんなに難しくても実現しなさい。私がこの世にもういないという理由でひどく打ちのめされるのはやめなさい。」と繰り返しました。そして、彼が私に数回この運命のことを知らせていたにもかかわらず、全ての影響力のある庇護者のいない宮廷に生きることとは危険に満ちた何かのように思っていました。そして彼の最後の望みを破らないために彼女を陛下のお世話に置いたのです。今は君主が飽きるほど彼女に与えて下さるご好意のために、疑いなく彼女は何も異常なことがないかのように宮廷に通ってべき扱いに耐えて、休みなく陛下に仕えました。ある女性たちのねたみからの大きくなる負担と彼女がさらされていたますます不快になる状況によって彼女が病気になるまで。だから私は陛下がそんなにも彼女に関心を持たれないことをより好みしました。しかし、私がこうやってただ一人でこう言っているのは彼女の死が私をこんなにひどい闇に沈めたから貴婦人の声は弱くなり、突然泣き始めた。その頃にはとても遅くなっていた。</p>	<p>「心の闇の中で迷うことは耐えるのが難しいことです。私を少しはっきりさせるためにあなたと話したいのです。どうか個人的に私に会いに来て。何年もの間、あなたは幸せな機会に来てくれたけど、この類いの手紙を持ってくるあなたを見ると…もう一度、なんて人生は残酷なのでしょう！亡くなった大参謀は生まれるときから彼女に自分の希望を託していました。最後まで何度も私に忠告していました。『彼女が宮廷で仕えるという私の願望を間違いなく果たしてくれ。私の死が君を落胆させて屈辱させるようにはしないでくれ。』彼女を支えてくれる人なしでそのような世界に紛れ込むことは散々な結果になるように思われなければ、彼の死後の願望に逆らわないように彼女を行かせました。陛下はとても細かな配りをして、過度なひいきをして、陛下の仕えるように送りまし。けれども、上からの面目と飽きるまでの寵愛を賜ったことについて、間違いなく他の方と並の扱いを受けていなかったことは恥ずかしく思っていて、その方達は何気なく宮殿に出ていると逆に、彼女は憎しみの的になっていて、その命は危うい程耐えられない事件相次いでにおこるうちに、ご存知のようにあの結局に至った。故に、陛下の厚いもてなしを無慈悲な扱いと感じてしまします。けれども、これは暗闇に迷う悼んだ心のぼけ言葉。」と、なくなった方の母親は、むせび泣きに溺れて尽くせない言葉を、夜はふけるうちに云った。</p>
---	--	--	--	--	---	--	--

<p>30 命婦は帝が悲涙の内に更衣との因縁を偲ぶさまを語って帰参を急ぐ「上もしか〜」(1256 /一四⑩/三一)</p>	<p>「上もしかなん。『我が御心ながら、あながちに人目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたざるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとど人わろうかたくなになりはべるも、前の世ゆかしうなん』と、うちかへしつと、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せん」と急ぎ参る。</p>	<p>「これは全て彼の言葉の一部です。」と若い女性は申し立て、そしてさらに人目驚くばかりおぼされしと、私の意思と道理に反して、激しい情熱に負かされました。それを前にしては人々は目を下げてしまうでしょう。おそらく、そのまさに簡潔さ故に、近い別れによって傷をつけられた人たちの情熱が雄弁で激しいのでしょう。誰も私の愛のために傷つけないように誓わせてください。しかし、結局のところ、愛しい彼女の背中は彼女に傷つけられたかと思っている人たちのねたみの重みで傷んでいたのです。何度もさらに付け加えた。「私は皇帝がこのように自分の考えを伝えるのを見ました。けれど、ほら、すでにかなり夜が更けていて、私は日が昇る前にあなたの伝言を渡さなければならぬのです。そして、また泣きながら、別れた。」</p>	<p>該当箇所なし</p>	<p>「陛下のお気持ちもあなたのものと同じです。」とミョープは彼女に断言した。「陛下はこう言いました。『彼女への私の愛が本当にどんなに害のあるものであったのかということは今では理解できる。なぜなら慎重さが私に命じたことに反して、私が醜聞を引き起こすほど極端なまで彼女をひいきにすることを主張する私のやり方は長い間私たちの関係が続かなかったであろうということの意味していた。私は誰の気分を害したくはなかったが、しかしながら、彼女に関して私は傷つけるべきではなかった者たちの怒り呼び起こし、ついには彼女を失い、慰めもなく彼女より長く生きるだけに終わった。今や私が以前に提供したどんな見せ物よりも嘆かわしい見世物である。私の前世においてこのこと全てを私にもたらしたどういったことを私がしたのかを知っていればよかつたのに。』」</p> <p>「もうすでに遅いですし、あなたの返事を陛下にお伝えせずに私は夜を過ぎさせるべきではありません。」そして宮殿に戻るために急いで準備をした。</p>	<p>陛下も同じように判断していた。「私は心の向くままに従って他人の理性を乱すほど私の情念にひたっていたのだが、今それは続かないし、人にとって宿命的な戦いの一つであるということに気がついた。どんなに小さな無礼な言動をも誰にも与えてこなかったと確信していた時、こうしてこの女性への愛のために避けることができていたであろう反感をもただ引きつけていた。そして拳句の果てに私はここで見捨てられ、反応することができず、私の愚かさから品のない見世物をしてい。ああ、もし私が前もって私の人生がどのようなものかを知っていればなあ…。」これがほとぼしるように苦い涙を流しながら陛下が終わり泣くくよくよく考えたことである。このように尽きることなく時間が過ぎていくので、使者はしゃくり上げ泣きながら切り上げた。「夜はもう更けていますし、過ぎ去ってしまう前に私はあなたのお返事をお話ししなければなりません。」と言い、大急ぎで出発しようとしていた。</p>	<p>陛下は同じような判断した。「自分のこころの好みに熱愛のおもむくままにして、他の方を不満させない有り様だと気づいて、結末の凄まじい戦いと分かる。人の気に障ることなしにと思いついて、この女性の愛のために不要な憎しみを浴びて、結局先立たれて、反応できずままみっともない自分の愚かさを披露するばかりです。生前はどのような果てに私はここで見捨てられ、反応することができず、私の愚かさから品のない見世物をしてい。ああ、もし私が前もって私の人生がどのようなものかを知っていればなあ…。」これがほとぼしるように苦い涙を流しながら陛下が終わり泣くくよくよく考えたことである。このように尽きることなく時間が過ぎていくので、使者はしゃくり上げ泣きながら切り上げた。「夜はもう更けて、終わる前にご返事を奏しなければなりません」と慌てて帰りの準備を始めた。</p>	<p>「陛下は同じように考えています。『人々の驚きを引き起こすまで私の分別のない感情に没頭して生きることは長い時間続かなかった。そして私たちの運命は残酷であるということが分かる。私は人々の感情をまったく、少しさえも害していないと思うが、彼女のために不合理な憤りに耐えなければならず、このように私は彼女を失い、慰めのないままにいる。最悪なのは、今私は思慮の足りないものだという評判だ。もう私の前世について知りたいものだ。』と泣きそうになりながら何度も言いました。全てを彼女に語るには至らなかつた。泣きながら付け足した。「遅くなりましたし、今晚あなたの返事を持っていきたいのです。」そして急いで出発した。</p>
<p>31 月は沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月は入り方〜」(1315 /一五④/三二)</p>	<p>月は入り方の、空清う澄み渡るに、風いと涼しくなり、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかす涙かなえも乗りやらず。「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人かことも聞こえつべくなん」と、言はせたまふ。</p>	<p>雲のない空に素晴らしく輝いている月が難破していた。草地の上を、風の下で寒さに震えながら、実際のコロギが甲高い音を発していた。繰り返す魅力的な音であった。その草原から遠ざかることは痛みを伴うもので、若い女性は、出発したくなく、詩を朗唱した。休みもなく、本当のコオロギの永遠の声のように、夜が明けるまで、私は泣いた。そして老婦人は答えた。千の虫の歌をまとった草の上に穏やかに空の住人の涙のしずくが落ちる。それなら宮廷の人は雲の上に住む人たちです。</p>	<p>月は山の後ろに隠れ始めていた。空気が水晶のように透明で、茂みの中の虫の鳴き声はどんな陽気な人も涙させていたであろう。ミョープは一つの詩と共に別れを告げた。別れの詩で、それに祖母が別の詩で答えた。「秋の夜は全ての私の涙をこらえるにはあまりに短い。どんなにコオロギの鳴き声が沈黙を破ることに固執しようとも。」「悲しいのはアシの間の虫の鳴き声だけれども、もっと悲しいのはまだ雲から落ちる露なのです。」</p>	<p>月は美しい明るさの空に傾き、風が冷たくなり、草の間で泣いていたコオロギが彼らと一緒に泣くために彼女を呼んだように思われた。苦しみが巢食う粗末な家を捨てることがもう少して彼女にはできなくなるほどに。ミョープは車に乗るのに乗り気ではなく詩を引用した。鈴のコオロギは疲れるまで泣くことができる。しかし私の場合はそうではない。終わらない夜の間に、私の涙は止まることなく落ちるだろうから。老婦人は答えた。「すぐにあなを責めるでしょう。」</p>	<p>月は隠れようとしていて、澄み切った清らかに明るく空で輝いていた。そして一陣の風は涼しくなっていた。草の間にはコオロギの甲高い声が涙を誘っているようで、草が押し寄せたこの住まいを離れることに心を痛めた。もし私が鈴虫の鳴き声と同様に私の一番強いうめき声をもって精一杯頑張らないといけなければ、秋の夜は私の涙を止めるには十分ではないだろうに。彼女は叫んだ、まだ車に乗ることもできずに。虫から不安げな甲高い声上がる家の葦の上に、雲の上の高貴な貴婦人が悲しみ滴をこぼしています。「私はあなたを責めたりしませんよ。」と母は侍女にミョープにそれを言うように頼んだ。</p>	<p>沈みかける月は空に済み輝き、風はさわやかに吹いた。草の中の虫の声は涙を誘うようで、彼女はこの草むらに覆われた家を去ると悲しんでいた。鈴虫のようにいそむならより高くむせび入って鳴き声収まるまで 秋のよる程の足りない と、車に乗る決意揺れながら彼女は声を上げた。すみかの葦の上に虫の悲痛の声が立ちつつ悲しく露をおく雲の上の尊い方「とがめることなく」と名譽ある貴婦人に言うように命じた。雲の向こう側の人だ。虫の音でいっぱいなのやぶにさらにもっと露を足しているのは。私をさらにもっと泣かしたことへの不平をあなたに表すことに応えるでしょう。』と名譽ある貴婦人に言うように命じた。別れの大きな贈り物をする必要がない状況でなかつた。</p>	<p>西に月が澄み切って透明な空を横切っていた時、風が涼しくなって牧草地の虫の声が悲しげに鳴っていた。後にするにはとても難しい草原だった。名譽ある貴婦人はこの詩を作った。コオロギが鈴のように声が無くなるまで鳴く長い夜、私の涙を全て流すためには十分ではない。車に上がることができずにいた。母親もまた詩を作った。『雲の向こう側の人だ。虫の音でいっぱいなのやぶにさらにもっと露を足しているのは。私をさらにもっと泣かしたことへの不平をあなたに表すことに応えるでしょう。』と名譽ある貴婦人に言うように命じた。別れの大きな贈り物をする必要がない状況でなかつた。</p>

<p>32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」(1358／一五⑩／三二)</p>	<p>をかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、かかるともやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。</p>	<p>それからその若い女性にベルト、くし、その他の物などの皇帝の贈り物を渡した。貴婦人が寝室に残したもので今やすでに不要なもので、老婦人は過去の思い出にと彼女に返した。</p>	<p>贈り物の機会ではないように思われたが、母は娘のものであった服、くし、装飾品を皇帝に届けさせるために貴婦人に渡した。</p>	<p>素敵な別れの贈り物を交換するためとの時間はなく、貴婦人は娘の思い出にとそのような機会のために取っておいたいくつかの物をミョープに渡した。何着かの衣類と彼女の娘が髪型を整えるのに使っていたいくつかのアクセサリーだった。</p>	<p>心遣いの贈り物は場違いであったので、彼女は娘の小さな思い出のこのような機会のためにあつらえられた衣装一式に加え、飾りピンと飾り櫛の詰め合わせを送った。</p>	<p>贈り物をする所ではなかったが、彼女は娘のちょっとした形見として、このような機会のために用意した衣服一揃い、そして櫛と留め針の詰め合わせを送りました。</p>	<p>それゆえ簡素な贈り物を彼女にゆだねることを考えて、このような機会のために取っておいた彼女の亡き娘の衣装の一式と髪飾りを加えた。</p>
<p>33 亡き更衣の女房たちは若君の参内を促すも祖母君は手放し難く思う「若き人々〜」(1378／一五⑩／三二)</p>	<p>若き人々悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことを唆しきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらんも、いと人聞き憂かるべし、また見たてまつらでしばしもあらんは、いと後ろめたう思ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせてまつりたまはぬなりけり。</p>	<p>子供に付き添っていた乳母たちは自分の主人の死のためだけでなく、宮殿の見せ物や日々の快樂を失くしたことに心を痛み、すぐに宮殿に戻ることを嘆願した。しかし、老婦人は彼女たちに付き添わないことを決心していた。一方で、子供から離れれば、日々もつと彼の事を心配するでしょう。このためすぐに彼とすぐに出発もせず、宮殿に彼を送りもしなかった。</p>	<p>王子に付き添っていた女性たちはまだ母親に泣きついていたが、宮廷での生活が恋しく思っていて、したがって皇帝の誘いかけに従うように主張した。全てがむなしかった。孫を視界から失うことを考えると心が痛んだが、老婦人は家に留まることに決めた。</p>	<p>当然のことだが、彼女の娘に仕えていた名誉ある若い貴婦人たちは自分たちの主人を失ったことに悲しんでいたが、今や宮殿に慣れていたので、それを懐かし思い、陛下の思い出ができるだけ早く息子がそこに移り住むように熱烈に頼むように彼女たちを刺激したが、老婦人は彼女のよくな不運な誰かが彼に付き添うことを宮廷の人間は認めないだろうと確信していた。そして、小さな子が視界からいなくなる度にどれほどまでに心配するかもまた分かっていたので、彼を行かせることに乗り気ではなかった。</p>	<p>宮廷から小さな王子と来ていた一番若い侍女たちは女主人のことでいまだ苦しんでいた。しかし宮廷での生活の喜びを身につけた者たちはこのような住まいに住むことを嘆き悲しんでいた。そして君主の思い出が自分たちの願いとやんごとなきお方をそれ一つにさせた。だから王子が皇居に戻るように助言した。祖母は心配していた。というのも彼女の悲痛な状態に関する人々の噂が乳児に付き添えば広がるだろうと。しかし一方で一少しの間であっても一子供に会うことをやめなければならぬとすれば、心配で死んでしまうであろうと。したがって心から喜んで彼を宮殿に再び送ることを決めることができなかった。</p>	<p>朝廷から若い御子を伴にして来た若い女房はまだ主のため悲しんでいたが、朝廷での暮らしに慣れていた他の女房は、このようなすみかで見守ると嘆いていた。陛下の記憶は上からの要望に自分の願いを加わるように促されていた。その故に御子の宮殿に帰るのを勧めました。祖母さまは、小さい子をお供すれば自分の忌み深いうわさは世間に広まるだろうと悩みましたが、一方で、短い間でも子供を見ることできなくなったから、心配で死にそうなので、また快く宮殿へ送ることを決意しかねました。</p>	<p>娘と一緒に宮廷で仕えていて今は母親の家に戻ってきている若い貴婦人たちは感じていた悲しみを何といえばいいのかさえ分からなかったが、昼も夜も宮殿で暮らすことに慣れていて、それが恋しくて、陛下の姿が思い出されると、できるだけ早く王子を送るように助言した。もし彼女のような不運な人が彼女に加われれば、それは噂を再び浮き上がらせるだろうと恐れていたが、彼に会うことができないのはつらいだろうし、彼を送ることはまったく決心することができなかった。</p>
<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ「命婦は〜」(1420／一六③／三三)</p>	<p>命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貴之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。</p>	<p>矢筒持ちの娘は皇帝がまだ起きていないのに気付いた。昼も夜も永遠の罪の絵を調べる習慣を身につけていて、絵の文はテイジ・ノ・イン自身の手で書かれており、イセとツラユキの詩がヤマトと海外の言葉で添えられてあった。この詩の主題は彼のおしゃべりの習慣的な動機となっていた。</p>	<p>ミョープが宮殿に着いたとき、皇帝は彼女を小さな庭で待っていた。そこには彼の部屋の前に植えさせていて、すでに秋の光栄ある色を誇っていた。4あるいは5人の貴婦人で取り巻きの最も憤り深く分別のある者たちと話しながら楽しんでた。彼女たちと一緒にウダ皇帝が限らない痛みの歌のために指示した挿絵を鑑賞して、楊貴妃の物語についてイセとツラユキと何人かの中国の作家の詩を読むのが好きだった。</p>	<p>ミョープは陛下がまだ休むために退出していないと分かり、うずくように哀れみを感じた。中庭の植物はそその秋の輝きを誇示していて、それらを鑑賞するという口実で、皇帝は彼ら巻き込みながらも魅力的な名誉ある貴婦人たち4〜5人の付き添いを頼んでいた、今彼女たちと会話をしてた。ここ数日は宇多皇帝によって担当された「終わらない悲しみの歌」の挿絵を、土着の言葉あるいは中国語で書かれた他の詩のようにその話題を扱う限りはイセとツラユキの詩と共に研究するのに没頭していたので、いつも彼の会話はその話題の周りをめぐっていた。</p>	<p>ミョープの貴婦人は皇帝が彼女を待ちながらまだ自身の部屋に引き上げていないことが分かり興奮した。内庭の植物のすばらしい豊かさを鑑賞するという口実で、憤り深く彼はあまり気遣いをせずにお世話ができた4〜5人のお世話を要望され、彼女たちとお話をされていた。最近夜明けから日暮れまでじっと見つめていた隠居された皇帝テイジが実行させた「永遠の悲しみ」に想起された一枚の絵と、イセとツラユキに大和言葉でテイジが作らせた詩や同じ題材についてのモロコシの詩。それが会話の唯一の話題であった。</p>	<p>ミョープの方は、その帰りを待っていた帝はまだ寝間に下がっていないことを見て感動した。中庭の草花の盛んに生い茂ることを愛でると託けて、ひそかに、心遣いのよい四五人の女房にお供されていて、話をしてた。最近、暁から日が暮れるまで眺めていたのは、亭子の院の命によって作られた『長恨歌』を読まされた大和の言葉の歌も、モロコシの詩のこと。これは唯一の話の対象だった。</p>	<p>名誉ある貴婦人は陛下が休むためにまだ引き上げていないことを見つけると動揺した。こっそりと内庭の植物の華麗さをじっと見つめていて、4あるいは5人の優雅な貴婦人にだけ囲まれて、物語を語っているような印象を与えていた。昼も夜も目の前に元皇帝のテイジが描かせてイセとツラユキの詩を彫らせた終わらない苦しみの詩の挿絵があり、そのテーマについての日本語あるいは中国語で書かれた詩についてじっくりと話していた。</p>

<p>35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返事に心を遣う「いと細やかに〜」(1469／一六〇／三三)</p>	<p>いと細やかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、「いともしききは、置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になん。あらき風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほど、と御覧じゆるすべし。</p>	<p>しかし、使者に近づくと、我慢できずに彼女の訪問の報告を要求した。彼女は彼女が来た悲しい場所の内密かつ忠実な描写の後に老婦人の手紙を皇帝に渡した。 『陛下のご厚意によるご命令を私に伝えることができるよりも深い敬意とともに受け取りました。しかし内容が私の心を混乱と闇で満たしています。』 この言葉とそれに添えられた強い風から守る木を失った花に孫を例えた詩はあまりにも無頓着に書かれていたのでまだ痛みで震える手だけがそれらを許すことができるであろう。</p>	<p>「ミョブの語りを聞いた後、男性は王子の祖母の手紙を取った。それは子供を保護していた木の保護を暴風のせいで失った花にたとえた詩で終わっていた。このかわいそうな女性はとても奇妙な形で説明されるのだと君主は思った。あの花を守るができない木は確かに彼自身だったと理解しなくなかった。</p>	<p>皇帝はミョーブに綿密に彼女の訪問について尋ね、彼女は内々にどんなに悲しかったかを語った。そして、このように書いていた貴婦人の返事を讀んだ。 「陛下のお言葉に私はあまりに恐縮しており、私はそのお言葉を受け取るのにふさわしくありません。そのような寛大なお気持ちを前にした混乱が私を悩ませています。」 無慈悲な風が枝を枯らした木がなくなつてから、私の心はハギの小さな葉のことでとても苦しんでいます。 手紙はこのような表現で続き、かなりの動揺を映し出していたが、陛下は女性がどんなにまだ影響を受けている様子であるかを理解し、疑いなく彼女を許していた。</p>	<p>彼はとても事細かにあちらの、田舎の現状について質問をしてくださった。そして、彼女は心を動かされた出来事を内密に彼に語った。彼は書面での返事に目をつけた。 「私は陛下が私に下さった名誉にとても心を動かされています。しかしながら、何を考えていいのかわからないのです。なぜなら、あなたの親切な思いやりにもかかわらず、私の意識は暗くかき乱されたままなのです。」 風から守っていた枝葉が無くなってから、ハリエニシダの若芽の運命は私の心を穏やかにさせません。 事態を奇妙な風にとらえていると皇帝は思ったが、貴婦人はまだ心が傷んだ様子であり、間違いなくそれゆえに寛大な目で彼女のぶしつけな疑いについて考慮した。</p>	<p>親切に野原での有り様について詳細に尋ねた。彼女は、感動的な風景の機密報告をした。彼は手紙に目を通した。 陛下の恩恵を受けて大変光栄と感じる。しかし、どう考えればよいか分からない。ご親切に案じてくださるにも拘らず、私の心は暗闇に揺れ続ける。 風から守る枝葉は欠けてから萩の若芽の生先に心慌たしい奇妙な捉え方と帝は思ったが、その方の心はまだ傷ついていると考えて、その無分別な疑いを寛大に受け止めた。</p>	<p>事細かく王子の状態について質問をした。個人的に名誉ある貴婦人は彼に訪問がいかに感動的なものだったかを語った。母親の返事を見た。母親はこう言っていた… このような優しさをどのように受け入れることができるかわかりません。あなたのような優しい言葉が混乱した暗い感情をもたらしたのです… 台風の間から彼女を守る影は乾き、その時から小さなハギのことを考えて私の心は落ち着きがない このようなやり方は不作法が含まれていることがわかってはいたが、許すことができればならない混乱の瞬間の産物だった。</p>
<p>36 悲嘆を隠せない帝は更衣入内の頃を思い出し祖母君をも不憫に思う「いとかうしも〜」(1504／一六〇／三四)</p>	<p>いとかうしも見えじ、とおぼしつむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧はじめし年月のことさへ、かき集めよろづにおぼし続けられて、時の間もおぼつかかりしを、かくても月日は経にけり。あさましようおぼしめさる。「故大納言の遺言あやまらず、宮仕への本意深くものしたりし喜びは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。</p>	<p>皇帝は使者の前でこらえようとしたが、初めて貴婦人が彼のところに行つた時のことを思い出し、千の思い出が彼を苦しめた。いくつかのものが別のものと一緒になり、跡も残さず逃げ去ってしまった時間と日々を呼び覚ますような生まれた絶望にとらわれた。 そして、話した。 「私は彼女の父である参事の嘆願を好意的に聞くことを喜んでたくさん夢見ていた。これは無に帰した。</p>	<p>「よろしい…したいことをすればいい…」と深いため息とともに結論付けた。</p>	<p>激しい感情を全く見せないで決心していたが、気持ちを抑えるためにむなしくもがいていた。思い出の激流が彼を愛する人に会った日々に戻り、以前は彼女がどんなに短い間いなくても不快に感じていたのに、すでに彼女なしでどのくらい時間が経過しているかを確認して驚かされた。 「私は彼女が私に仕えた価値があったと彼女の母に考えてくれていてほしかったのに。今は亡き大参事が死ぬ前にそうするように強く頼んだように。」と言った。「なんて残念だ！」 と悲しく叫んだ。</p>	<p>例にない動揺した妙なまねを見せなかったことを決心し、平然として見るように努めたが、もうあまり気持ちを抑えることができなかった。彼女が彼女に初めて会った時の思い出までが戻ってきた。何千回何千回と彼の心をよぎった。したがって、彼女のいないことが彼を不安のどん底に突き落とした。このように月日が過ぎ去っていったのにもかかわらず、彼は現実を受け入れることができずにいた。 「ずっと夫である大参謀への祖母の確固たる献身を必ず賞賛したいという願望を心に留めていたのだが、そのような希望は消えてしまっただ。」 とやんごとなきお方はおっしゃった。そしてその貴婦人の状態にひどく心を痛めた。</p>	<p>尋常でない狼狽を見せないよう決意して、沈着な態度を守ろうと努めたがやりきれず。最初に見たときの記憶までよみがえられて、千度も重ねて心の中に回想して、今はないということによって苦悩に陥って、このように月日がたっても、まだその事実を受け止めることはできない。 その祖母はご主人の大納言に対しての固い献身態度を称揚する意向常にあったが、その希望さえ消えるかも。その方の状態に哀れみをかけた。</p>	<p>気持ちを抑えようとしたが全く隠すことができなかった。彼の思い出は、初めて彼女にあった時の思い出さえも積み重なって、止むことなくそれらを考えていた。生きていた時も彼女がいなくて一瞬でさえも彼を苦しめていて、あまりに多くの時間をすでに経過していたことがどんなに信じられないことだったか。 「大参事の死後の願いに逆らわず、彼女を宮廷に仕えさせるという彼の固い意志を達成したことで私に感謝をしているだろうと思っていて、だからいつもそれをする価値があると思っていたが、惨憺たる結果になってしまったことを何と言えはいいのかさえ分からない！」 と動揺して言った。</p>

<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈り物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う「かくても〜」(1543／一七③／三四)</p>	<p>「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなん。命長くこそぞ思ひ念ぜぬ」などのたまはず。かの贈り物御覽ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけむしるしの叙ならましかばと思ほすも、いとがひなし。尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく</p>	<p>もし若い王子が生き長らえれば、まだ私はいくらか幸運を持っているであろう…この命が彼にとって長いものであるために、たくさん祈ることが必要だ。使者を介して老婦人が返した贈り物を見つめた。「ああ。」と叫んだ。「物語の魔法使いのように、あなたは彼女の魂が住む場所を訪問した証拠であるカワセミの羽の使者だ！」そして、朗唱した。ああ、彼女を見つけてどんな対価を払っても私に彼女の魂が住んでいる場所を言うことができる魔法使いが来てくれたらなあ。</p>	<p>「おそろくいつの日か、もし子供に会いたければ…」それからミョープが彼に持ってきた贈り物を調べ始めた。そして、中国の皇帝に起きたように魔法使いが恋人の住んでいる国から櫛を持ってくるという不可能な願いを心から望んだ。絵巻に目が釘付けになり、つぶやいた。「私の事を幸せにしたいくて今私の恋人の魂がどこにあるのかを知らせてくれる魔法使いはいないのだろうか？」</p>	<p>「どうであっても、私の息子のために、彼がしかるべく育つために、何かをすることができるとは思えない。彼女は気にかけなければならぬし、彼に会うために生きなければならぬ。」ミョープは受け取った贈り物を見せ、皇帝はどうかそれが愛する人があの世から送ったヘアピンであればいいのと思った。しかし、ああ、そうではなかった。こうつぶやいた。おお、もし彼女を探しに行く魔法使いを見つめることができたならなあ。少なくとも遠くから知らせがあり、愛する人の魂がどこに行ったか知ることができればなあ…。</p>	<p>「ならば、もし小さい王子が大きくなれば、好機があるだろう。だから望ましいのは彼女がその日まで待ちながら元気に生きながらえることだ。」と言った。ミョープの貴婦人はしたがって君主の面前に祖母の貴婦人の贈り物を差し出した。ある魔法使いがかの中国の皇帝へそうしたように失った愛しい人が今住んでいる世界から櫛をもってきたと想像してつぶやいた。再び彼女を探しに行くためには、黒魔術師が知ることができる最小限のものであるのなら、住処は影がさまよう場所にあるのだろう。</p>	<p>ところで、小さい御子が成長していけば、絶好の機会があるだろう、その日が訪れるまで期待して生き存えてくれればと。あのような日はどう待ってられるだろうと述べた。贈り物を陛下に見せてあげた。あの中国の皇帝のように、降霊師は愛する失った人の今のすみから櫛を持ってこられる気がした。そして次のようにささやいた、降霊師であれば彼女を求めるとその影はさまようところを知るだけかな</p>	<p>「そうであっても、私自身は幼い王子が成長した時に必要なことをする機会がすでにあるだろう。孫が成功するのを見るために何年も生きるように私は祈る。」名誉ある貴婦人は彼に贈り物を見せた。『もし彼女がいる場所で亡くなった女性に会ったしるしとして持ってきた髪のプローチであったらなあ…。』と陛下は思ったが、無駄だった。そしてこの詩を作った。魔法使いが彼女を探しに行ってくればと私はすでに望んでいる。聞き伝えであっても彼女の魂がある場所がそこであるということを知るために。</p>
<p>38 帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う「絵に描ける〜」(1572／一七⑦／三五)</p>	<p>絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひは麗しうこそありけぬ、懐かしうらうたげなりしをおぼし出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかさはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほど、尽きせず恨めしき。</p>	<p>楊貴妃の肖像画は、画家の才能にもかかわらず、絵で描かれた作品以上の物ではなく、生命のある香りを全く放っていないからである。そして、どんなに詩人が私たちに楊貴妃の優美さは王家の湖の上にあるウスベニタチアオイのそれかあるいは未央宮の柳のそれであるとしても、絵の貴婦人は完全に中国人の顔をもったいくらかの化粧とおしろい以上の物ではないのだ。貴婦人の声と姿のことを考えると、皇帝は花の色や鳥の鳴き声にも可能な比較を見つげなかった。運命が昼も夜も会話の動機となっていた約束を彼らに果たさせなかったことを絶えず嘆いていた。彼らの人生は同じルートを出発する双子の鳥の飛行のようであり、一つと同じ幹から生えた2本の木のような約束であった。</p>	<p>彼女の伝説的な美しさを荘厳な池のハスと永遠の宮殿の柳と比べていたが、彼が失くした貴婦人呼び覚ますそうとすると、彼女の魅力に比較しうる花や鳥の歌声は見つからなかった。どのように毎晩お互いに彼らのために書かれているように思われた限りの痛みを歌の詩の2行を互いに読み合ったかを覚えているだけだった。『空では一つと同じ翼を分かち合う2羽の鳥のように。地上では一つと同じ枝を分かち合う2つの木のように。』単なる幻想に変わって終わってしまったむなし約束だ！</p>	<p>素晴らしい芸術家が楊貴妃の絵を作ったのだが、それは筆が伝えることができた全てであって、彼の愛する人の肖像画は生の息吹に欠けていた。顔はタイエキ湖の睡蓮あるいはミオー宮殿の柳にとても似ていて、疑いなく中国様式の驚くべき美しさであったが、彼が愛する人がどんなに優しく美しかったかを思い出したとき、花や鳥の歌声と彼女を比較することはできなかった。昼も夜も鳥のように飛ぶときは翼を、あるいは木のように枝を分かち合うことを彼女に請け負ったのだが、その後彼女は亡くなり、約束から自由になった空虚さが彼を終わらない悲しみでいっぱいしている。</p>	<p>布の上に姿を見せているのは楊貴妃の容貌で、大変才能を持ったある画家の作品であっても、きらめきがなく、したがって筆にも限界があるということだ。タイエキの睡蓮やビヨウの柳に実際に似ていた。中国好みに形作られた衣装はとても美しかった。しかし、もう一人の女性の優美や魅惑を覚えている彼にとっては、そこには花や鳥が彼女の色彩や歌を呼び起こさせるようなものは何もなかった。朝も晩も、ほとんど口癖のように、かの痛ましい詩歌で愛する人を懐かしんでいた。<空には翼を分かち合う鳥のように、地上では交錯する枝のある木のように>。再会することは願っていたが、彼の人生の短さはそれを空虚な夢に変えていた。</p>	<p>画布に映された楊貴妃ヨウキヒの容貌は、とても腕のいい画家の作品であっても拘らず、筆に限りがあったため、輝きを欠けていた。確かに、太液タイエキの蓮、未央ビヨウの柳と似通っていた。中国の好みに合わせた服とても美しかった。けれども、あの方の優美と魅力を思い出す彼にとっては、花鳥そこにあるすべてのものは、あの方の色と声を呼び起こすことができるものは何もなかった。朝昼、繰り返し文句のように、愛する人を寂しく思う時にあの痛ましい曲で云う：「空には、羽を分ける鳥のように、地上に枝をつなぐ木のように」と。再会の約束はしたが、人生の短さ故にむなし夢になってしまった。</p>	<p>"挿絵の中では内縁の妻の楊の肉体的な外見はある絵画の大家によって描かれていたが、筆には限界があるのでそれほど美しくは見えなかった。顔はタイエキの睡蓮の花とビヨウの柳に似ていて、彼女の正式な服装は美しく華麗に見えたが、熱望とともに彼の深く愛された人を思い出すと、花や鳥の色や音にさえ彼女をたどるような方法もなかった。彼らの会話の中で、昼も夜も、『翼一つにする、枝を交差させる』と約束していたが、『果てしない苦しみ』のこの世の中ではそれを実現することはできなかった。</p>

<p>39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」(1615／一七②／三五)</p>	<p>風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじう、ものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおしたち、かどかどしき所ものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちて、もてなしたまふなるべし。</p>	<p>一陣の風、虫の羽ばたき、あるいはささやきは彼を悲しみの最も深いところは沈めるには十分であった。コキデンはすでにずっと前から彼の部屋に入ることが許されていなかったが今は月明りで夜がとても更けてもコトを弾きながら夜を明かしていた。そしてこれはこの上なく皇帝の機嫌を損ねた。彼の取り巻きの貴婦人たちや宮廷人たちは驚きまた悲嘆に暮れた。しかし、このように彼の気分を害していた貴婦人は尊厳の問題をあたかも宮殿で何も重大なことが起きていなかったかのように生じさせた。</p>	<p>一方で、虫のやかましい音と風のうめき声は彼の痛みを刺激するだけであつた。コキデンの部屋では同じことは起きていなかった。月の夜はとて美しくあつたので、音楽を奏できるように命じた。しかし、皇帝は侮辱されたと感じ、そのような状況においては趣味の悪い考えのように思われると知らせるように命じた。コキデンは横柄な性格だったので、気まぐれと共に、ただ皇帝の痛みが少しも彼女に影響を与えないことをただはつきりとさせようとした。</p>	<p>風の音とコオロギの歌は彼の憂鬱をより深くするだけで、その間にコキデンの声が聞こえていた。長い間夕暮れの後には彼の世話をしに行かず、もう夜が更けるまで楽器を奏でて美しい月の最大限に利用していた。皇帝はその音楽が気に入らず、止めてほしかった。名譽ある貴婦人たちと個人的な集まりの紳士たちは彼の精神状態を知っており、その音楽が彼の聴覚に不快感を与えるとうことに気づいた。その背いた女性は頑固で気難しく、あたかも何も起こっていないかのように振る舞うことを決めているように思えた。</p>	<p>風のうなり声、虫の秋の甲高い声、全てが彼の苦しみを大きくしていた。しかし、コキデンの貴婦人の部屋では事態はとても異なっていた。皇帝の面前に姿を見せることをやめて長い時間が過ぎていた。月明かりがとて美しく、夜遅くまで音楽を楽しまない理由は見つからなかった。皇帝はそんな時間にそれをするこの無礼さについて何かをつぶやいた。そして彼の苦しみの証人だった者たちはそれは不必要な侮辱であると一致した。コキデンの貴婦人は横柄で手におえない性格であつたので、彼女の行動は君主の苦しみを大したことはないと暗示していた。</p>	<p>風の叫び声、秋の虫の音はすべて悲しみを増していた。しかしながら、弘徽殿コキデンの方の部屋では状況は違う。長い間、彼女は帝の前に出ることはなかった。月の輝き美しい時は、夜遅くまで音楽を楽しみ遠慮するには理由はないと思った。帝はこう遅くまで続くのは無礼云々だとつぶやいた。その苦痛を目にする人たちは、確かに無用な不正だと合意した。コキデンの方は傲慢な扱いにくい性格を持った人で、その振る舞いは上の悲しみは大して重大事ではないこと言わんばかりのことだった。</p>	<p>" 風の物音と虫の音が悲しいことを考えさせたが、しかしながら、月が美しいときは、コキデンの別棟の夫人は、長い間皇帝の次の間を訪れていなかったが、夜の入りまで音楽と娯楽を提供していた。陛下はとて不快に聞いていた。そして彼がしてゐる表情を見ていた宮廷人や名譽ある貴婦人たちは最後には相容れない気後れと共に聞いていた。彼女はとて執拗で残酷な人で、何事も起きなかったかのようにふるまうことができた。</p>
<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660／一八③／三六)</p>	<p>月も入りぬ。 雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿 おぼしめしやりつつ、燈火(ともしび)をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。</p>	<p>その時月が沈んだ。皇帝は若い女性の母のことを事を考え始めた。どのような心を持ってして彼女は秋の月の沈むのを見るのだろうか。茂みに閉じ込められた家に住んでいる者は、私たち人間は同じ雲の上で泣いている、月が消えた時は。燭台のたいまつを活気づけさせて夕べを延長した。警護の別棟から来るいくつかの声を聞いて、そして牛の時間であるということを知った。こまどろませたまふことかたし。徹夜の間に彼を見つげられるのを恐れて、部屋に引き上げたが、眠ることができず、夜明け前に起きた。</p>	<p>月が空から消え、ランプの油が最後の一滴まで消費された。しかし皇帝は寝ることができないように感じていて、愛する女性と息子が頭に浮かべ、この詩を書いた。『涙は月をも青ざめさせる。雲の上でさえも。したがって池のイグサの間に映った姿は青白いのだ。』警備の交代の物音を聞いた。牛の時間であった。最後には寝室に引きこもったが、一晩中眠らず、夜明け前に起きた。</p>	<p>月が沈んだ。陛下はつぶやいた。 雲のうへも涙にくるる秋の月を隠す時、どうしたら下のみすばらしい草の間に光がありうるだろうか？ 彼はミョープが少し前に別れた貴婦人のことを考え、ランプの芯がなくなるまで立ったままだった。牛の時間に違いなかった。なぜなら皇帝は右の門の衛兵が直直に入るのが聞こえたからだ。その時カーテンに囲まれたベッドに引きこもり、そして眠ることができなかったけれど、注意を引きたくはなかった。</p>	<p>月はずいぶん隠れた。 秋の月が見えない、ここ雲の上でさえも。イグサに囲まれた場所に住んでいる者たちがどうやって月をはっきり見ることができようか。 皇帝は遅くに横になった。油の最後の一滴までいき消えてしまったランプの灯心はすでにはきかれていた。その間あの谷に残って住んでいる子供と年老いた貴婦人について考えていた。 兵の交代を進めている右の帝国警護隊からトノイモウシの儀式への呼び出しが聞こえてきた。牛の回のそれであった。分別のない視線を恐れて、彼は部屋に引きこもったが、そこでは眠りにつくことができなかった。</p>	<p>終に月は隠れた。 雲の上にも秋の月を見ず葦に囲まれて住む人たちは澄んだ月をどう見られるだろう帝は遅く床に就いた。最後の油の一滴まで次々消える灯の芯は尽きるようになっていた。その間、あの谷に残された子供と老いた方に悩んでいた。交代に急ぐ右の近衛のトノイモウシ宿直奏の儀式に呼びかけ声が聞こえていた。牛のときの巡回頃だった。慎みのない目をさけて自分の部屋にこもったが眠れず。</p>	<p>雲のうへも涙にくるる秋の月が見えない。どのように輝いているのだろうか？どのように生きているのだろうか？やぶの家の中で… …陛下は愛情をもって考えていた。目が覚めたままできて、燃料が枯渇するまでランプをつけたままにしていた。右の小隊の皇帝の警護部隊の長の声が警備の交代の間の数を知らせているのを聞き、それは牛の時間になったことを示していた。体裁を取り繕うことを考えて部屋に引き上げたが、そうはいつでも寝付くのは難しかった。</p>
<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660／一八③／三六)</p>	<p>朝に起きさせたまふとて、「明るも知らず」とおぼし出づるにも、なほ朝政はおこたせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかな、と言ひ合はせつつ嘆く。</p>	<p>あのイセの詩のように。その星が窓にあるのを知らなかった。 朝の聴聞会の仕事にもほとんど注意を払わず、からからに乾いた米をほとんど口につけて、大きな食卓の料理には目もくれなかった。皇室の食卓の召使たちは主人の不幸に心を痛め、皆が、男性も女性も、低い声で言い合った。「何のために彼に仕えているのだろうか？」</p>	<p>朝食を口にせず、使用人が何を食べていかを質問した時、大声で彼らに言った。しかし家臣が全員彼に同情しているわけではなかった。</p>	<p>日中になり起きる時間が来た時も、昔は夜が明けたことさえも気づかなかったのを思い出し、再び審議会の朝の会議が無駄になるところであった。朝食を取るふりをするとどめ、昼食にはあまり関心を示さなかった。彼がそのような状態であるのを見て、彼の召使が悲しむまでは。彼のより身近にいた者たち、貴婦人たちも紳士たちも一緒に、状況がどれだけ憂慮すべきものであるかを心配してぶつぶつと言っていた</p>	<p>そして、朝になつてもまだ起きていてあの詩「よるい戸が開くかどうかを知らない」が記憶に戻ってきた。国家の仕事や食べることにさえも関心を持つことができなかった。どうにか朝の軽食にはさわったが、しぐさに過ぎず、昼食は彼の好みからとてかけ離れたように思われたので、彼の召使は不安な視線とささやきを交わしていた。</p>	<p>朝起きた時にあの句を思い出した：「すだれは上げられるか知らないまま」と。国政に関心を持たせることもなく、食べるさえできず。朝食を殆ど手付かず、素振りにもならない程度に留まって、昼食をとる気もほど遠く感じられていた様子を見た側近は最も近くにいた人たちは、男性も女性も同様に、互いに嘆き合って「なんてひどいことなんだ！」と言いつつ合っていた。「これが彼の運命のように思われる。憤りや批判にも関わらず彼は自制することができず彼女に分別を失った。今でさえますます国の仕事を重要視していないことは許されることではない。」嘆きながらぶつぶつと言いつつ、他の皇帝の玄宗の例を引用すらしめていた。</p>	<p>朝起きたが、彼女と一緒に夜明けを無視したことを思い出して、朝の皇帝の謁見を重視しないように思われた。何も食わず、朝食は触っていない。ただけをして、昼食の間は彼の思考はそこからとて遠くにあって、だから彼に仕えていた全ての人たちは彼の苦しんだ気持ちに嘆いた。最も近くにいた人たちは、男性も女性も同様に、互いに嘆き合って「なんてひどいことなんだ！」と言いつつ合っていた。「これが彼の運命のように思われる。憤りや批判にも関わらず彼は自制することができず彼女に分別を失った。今でさえますます国の仕事を重要視していないことは許されることではない。」嘆きながらぶつぶつと言いつつ、他の皇帝の玄宗の例を引用すらしめていた。</p>

42 帝に奉仕する者たちも政道放棄を嘆き楊貴妃の例まで引合いに出る「さるべき契〜」(1731／一八②／三七)	「さるべき契こそおはしましけめ、そこらの人の譏り、恨みをも憚らせた人はず、この御ことにふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と、人の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。	何か馬鹿げた約束をしたように思われた。大衆の不満に全く注意を払わず、民衆の必要なことよりもむしろ自分の個人的なことに従事し続けていた。国家の業務についての怠慢はかつて同じ非難の対象であり、ある国の君主を再びほめかされるようになった。	彼の業の問題だと断じる人もいれば、遠く中国で彼のようなある馬鹿げた行動が国にとっての災難になったことをまた再び思い出す人もいた。	おそらく彼の運命は彼女を愛するものだったのだが、あまりに多くの人たちの非難や怒りを気にとめず、あの女性のせいで通例の行動規範にも従わず、そして今まさにしているように公務をそっこのけにしてささいやき、この点に関して海の向こう側の地で起きたある出来事に言及していた。	おそらく全ては前もって決められていたであろうが、彼らの多くはキリツボの貴婦人に向けての恨みと憤りに関する言葉を控えてはいなかった。そしてまた事態が理になかった範囲を越えていて、そして当然彼の義務をないがしろにすることは完全に度が過ぎているのを許していることに対して不平を言っていた。	すべて前世から定められていたことだとしても、多くの人々は、キリツボの方に対しての憎しみと恨みのため言葉を惜しまず。影でぶつぶつ言うのもあって、そのため事情は程を超えることとなって、事実、国政をないがしろするのはとても許しがたい。ひそひそしてぼやいて人もいて、自分の御代と民の崩壊を引き起こした中国の皇帝の例まで挙げていた。	「これが彼の運命のように思われる。憤りや批判にも関わらず彼は自制することができず彼女に分別を失った。今でさえますます国の仕事を重要視していないことは許されることではない。」嘆きながらぶつぶつと言い、他の皇帝の玄宗の例を引用すらしていた。
43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」(1762／一九②／三七)	月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすけたまへれば、いとゆゆしうおぼしたり。明るる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふくおぼし憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心おちあたまひぬ。	月日が過ぎ、幼い王子が宮殿に到着した。比類なき美しさの子供で、皇帝を魅惑する美しさであった。次の春には王位の継承者を宣言しなげればならず、君主は任命がこの子供のものになるように長子を拒否したい誘惑を感じた。しかし、彼を取り囲む人は誰もそういった選択に傾いておらず、民衆も疑いなくそれを許していなかっただろう。彼を栄光で覆うというよりは、彼の周りを多くの危険で取り囲むような決断を結果として取るようになっていだろう。こうして、皇帝はこの願望を隠して、それで臣下の目から見るとよくなった。こう言っていた。「子供に熱心であるが、少なくともその狂気にも限界がある。」宮殿の身分の高い貴婦人たちはより満足していた。	数か月が経ち王子は宮殿に戻った。あまりに美しい少年だったのでこの世のものには見えなかった。これほどの美しさは必然的にはかないに違いない。翌年の春に王座のための継承者を任命する時が来たとき、皇帝は長子を無視してゲンジを選ぶことに固執していた。ゲンジの家族があゆる影響力に欠いていても。しかし参事たちは取ろうと決心した決断はとても危険であるということをはっきりと分からせた。過度なひいきは彼の母親を失ったのと同じように男の子も失うことになりえた。皇帝は目下沈黙を保つことを選び、宮廷は彼の愛情は限界があると思つた。疑い深いコキデンでさえも静まった。	時が経ち、子供は宮殿で父親と再び一緒になった。この世のものとは思えないような気品のある物腰を身につけつつあり、これが陛下にある種の恐れを抱かせていた。 その次の春、陛下が皇太子を指名する際に、彼の年長の息子を飛ばして幼い方をひいきにしたかったが、後者は支持が足りず、どういった場合であれ一般的に世間は決してそのような選出を受け入れないだろうからと善意からその男の子をあきらめ、自分の願望を公にはしなかった。「そこまで行き過ぎることはありえど」と互いに口にしてた。コキデンの夫人はほっとしていた。	月日が経ち幼い王子は宮殿に戻った。高貴な若者になっており、物腰はほとんどこの世から来た者とは思えないほどであった。そういった理由から皇帝は息子の将来を心配していた。 次の春、皇太子を任命する時が来たとき、皇帝は熱烈に彼の長男を超えて幼い方に味方をしたかったが、彼には有力な母方の親族がいなかった。反論なしに任命が受け入れられることが実現できない様子だった。その男の子は、母と同じように、君主の節度のないひいきに挫折感を味わっているようであった。皇帝は誰にも自分の願望を明かさなかった。人々は皇帝は幼い王子をあんなにもかわいがるけれど、彼の愛情にも限度があるだろうと不平を言っていた。そして、コキデンの貴婦人は落ち着きを取り戻した。	月日がたつて若い御子は宮殿に戻った。気品のある少年になっていて、この世の者ではないような眉目秀麗だった。故に帝は息子の将来を案じられた。 次の春、太子を任命することになった時、帝は長子を超えて若い子を立てるのを強く望んでいたが、影響力のある母方の親戚がいなくて、抵抗なしで認定が承諾されると難しかった。母親と同じように上の過剰な寵愛によって少年も挫折に合うだろう。帝はその希望を抱えながら誰にも打ち明けなかった。世の人々、上は大変若い御子を甘えていたがその感情に限りはあるだろうとつぶやきあいた。コキデンの方は冷静を取り戻した。	月日が過ぎた。幼い王子が宮廷に戻ってきた。成長してこの世では比類ないすばらしい美しさを持つようになっていた。それは悪い心がねたみを感じるという恐怖を生み出していた。 次の春の間、皇太子を任命する時に、陛下は第一王子を無視したかったが、彼に援助を与えることができる人は誰もおらず、加えて社会もそのようなことを容認しそうになく、それで気後れてしることをやめた。彼は真意を全く示さなかった。 『どのくらい彼がそれをしたいかは重要ではなく、すべてに限度がある』と言った。夫人は安心して一息ついた。
44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母〜」(1805／一九⑥／三七)	かの御祖母北の方、慰む方なくおぼしづみて、おはすらん所にだに尋ね行かんと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦まきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、返す返すのたまひける。	祖母は悲嘆に暮れて暮らしていた。貴婦人の足跡に続きたくてたまらず、すぐに息を引き取った。皇帝はまた嘆き悲しんだ。子供はその時6歳でその死が何を意味するかを理解して長い間泣いた。しばしば、彼に対して前の年にとても良くしていたかわいそうな夫人の付き添いで見たものすべてについて話していた。	祖母は天が彼女の願いを聞き、彼女を死なせるまで悲嘆にくれたままだった。その頃には既にゲンジは6歳になっていて、彼女の死を悲しみ惜しんだ。彼をとても愛してくれたその哀れな女性を訪ねたときに見たものを思い出すのをやめなかった。	祖母に関しては、悲嘆にくれ続けていて、ただ娘と一緒にいたかったことが、陛下が非常に苦しんだことに、間違いないそれが最後には彼女が亡くなった動機であった。子供はその時6歳だった。今回は起きたことを理解していて涙を流した。とても長い間彼のそばにいた祖母は最後まで何回も彼を見捨てることかどんなに悲しいかと言っていた。	若者の祖母は打ちひしがれた様子で、自分を慰める方法を見つけないで苦しんでいた。ついに、彼女の娘と一緒にいるための願いが聞き入れられたため、最後の息を吐いた。まだもう一度君主は悲嘆に苦しんだ。若者はすでに6歳になって十分に大きくなっていてその苦しみを自分で分かった。祖母は何年も彼に親切にしていたので、彼を一人にしなければならぬことは何と大きな痛みを彼女に引き起こすであろうと何度も強調していた。	少年の祖母は慰める方法もなく塞ぎ込んでいた。最後に、多分娘と一緒に行きたいという願いは叶えられたから息を引き取った。帝は今度また悲しみを受けた。既に六歳に成っていた少年は、自分で哀しさを知る程の成長していた。長年に優しくしてくれた祖母さんは、一人をさせるのを大変心が痛めると何度も言っていた。	祖母は亡くなった大参事の正妻だったが、悲嘆に沈み、おそらく自分の娘が行ってしまった場所を訪ねたかったからだろうが、突然亡くなった。そしてこのことが陛下に引き起こした痛みは限度がなかった。王子が6歳になった年でそれゆえ今回は起こったことを理解して悲しみで泣いた。彼の祖母は何度も彼を見捨てることはどれだけ彼女を悲しませるかと言っていたが、何年もの間彼の付き添いに慣れていたのであった。

<p>45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏に～」(1844／一九〇①／三八)</p>	<p>今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧す。「今は誰も誰もえ憎みたまはうしたまへ」</p> <p>母君なくでにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。</p>	<p>その時から宮殿で住んだ。6歳の時に読むことを学んだ。学習に対する彼の能力はあまりに非凡で父を驚かせた。誰も彼に対して彼をいじめたかという願望を持っていないと思つたので、皇帝は彼をコキデンと他の貴婦人の部屋に送り、皆にこう言った。</p> <p>「彼の母が死んだので、君たちが彼に優しくなるだろうと私は思わなければならぬ。」</p> <p>このようにして子供は宮廷に入った。</p> <p>どんな粗野な兵士も、彼のどんな残忍な敵も微笑みなしには彼の事を見つめずにはいられなかった。コキデンは彼を返さなかった。</p>	<p>宮廷に住んでいて、7歳になると中国の古典の読書の儀式の主役を演じた。出席していった者たちは誰もそれほど能力をもってしてそれをしたことがないとはっきりと言った。皇帝は再び驚いた。どのくらい長くあの天才は地上に居続けるのだろうか？</p> <p>ある日、一番目の配偶者の部屋に彼を連れて行くことを決めた。母親のいない孤児なのでその女性ももう彼を憎む動機がないだろうと考えていた。</p> <p>「彼に優しい態度を取ってくれることを望んでいる。」</p> <p>とコキデンに言って、退出した。</p> <p>戦士の中のどんな残忍な者あるいは敵の中のどんなに無慈悲なものであっても王子を見ると笑顔になるのをこらえることができなかっただろう。そしてコキデンもまた彼の魅力に屈した。すぐに彼と一緒にいることがあまりに好きになったので彼を行かせなかった。</p>	<p>その時から、子供は永続的に宮殿に住んだ。7歳を迎えた時、陛下は彼が最初の読書を行わせた。あまりにも並はずれて素晴らしく行ったので彼の父は率直に恐れを抱いた。「今は君たちの誰もを不快に感じさせないのは疑いのないことだ。」</p> <p>と宮廷人たちに言った。</p> <p>「ついにほもう母親もいない。彼に親切にしてくれるよう頼むよ。」</p> <p>コキデンに彼を紹介した時、夫人は自分の部屋のすだれの向こうに入れて、去ってほしくなかった。なぜならその男の子を見るとどんな猛ましい戦士や、敵からさえ笑みが引き出されたかのようにだったからだ。</p>	<p>彼は今や宮殿に住んでいた。7歳になった時に中国の古典の文章の儀礼的な読書で証明した。このように聡明で洞察力をもってしてなされたことは以前までは決してなかった。それで皇帝はぞっとして彼について思索した。</p> <p>「誰も彼には腹を立てないだろう。すでに母親からは解放されている。」</p> <p>皇帝は男の子を連れ、一緒にコキデンのあずまやに向かった。このようにその私的な部屋に入ることを許された。彼の顔はとても美しいのでどんなにかめしい戦士もどんなに頑固な敵も笑みを抑えることができなかった。コキデンの貴婦人は彼を行かせたい様子はなかった。</p>	<p>彼は今宮廷で暮らしていた。七歳になったときに、漢籍古典の正式読書を果たした。曾てない明敏な賢い講演だった。故に、帝は彼のことを考えて恐れていた、</p> <p>母を亡くしているの、だれも彼に怒ることはしないよう。</p> <p>帝は少年を連れてコキデンの殿舎へ向かって、このように、私室に迎えられた。顔立ちは美しいこと、激しい兵も頑固な敵も微笑みを禁じ得ない程だった。コキデンの方は彼を帰す気もなかった。</p>	<p>今は一人で宮廷に仕えていた。7歳になった時、陛下は人前での最初の読書52を準備して、かつて見たことがないほどの明敏さと巧みさをもって行い、不安を生み出した。</p> <p>「今は誰も、しかし誰も、もしかすると彼を嫌にならないうら。母親すらいない。お願いだから彼を愛情をもって扱ってくれ。」</p> <p>と陛下は貴婦人たちに言った。彼をコキデンの別棟に連れて行きさえて、すぐに夫人はすだれを通して内側に彼を通させた。54彼を拒むことができなかった。彼の外見は恐るべき戦士や最悪の敵でさえも微笑ませるほどであった。</p>
<p>46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音楽にも秀でる超人さを発揮「女御子たち～」(1904／二〇〇②／三九)</p>	<p>女御子たち二所、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしく恥づかしげにおはすれば、いとをかしようちとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひきこえたまへり。</p> <p>わざとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続ければ、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。</p>	<p>彼女は小さな王子ほどは確かに美しくない二人の娘がいた。彼は宮殿の貴婦人たちとも遊び、彼女たちは彼の内気で優美な振る舞いの中に終わりのない喜びを見出していた。一方で、彼の遊びを分かち合っていた人たちは皆彼の中に本当の喜びを見つけていた。彼の勉学を介して、彼がすぐに雲に向けてコトと笛の音を発しているのを聞いた。しかし、もしこの小さい重要人物の全ての長所を描写し続けたら、すぐに疲れてしまうだろう。</p>	<p>二人の娘がいたが、美しさにおいて彼とは比べることができなかった。加えて、その若者は古典や全ての科目を自分の手の届くところに修得しているだけでなくコトや笛を奏でる技術においても真正正銘の名人であった。もし全ての各々の長所について注釈をつけたければ、読者は私にだまそうとしている、あるいはへつらいに度が過ぎているという結論に達するであろう。コキデンに付き添っている貴婦人たちは彼を称賛して楽しませるために彼の周りにいつも座っていたものだった。たとえ若い王子のものにはかなわないと知っていても顔を見せることを恥づかしいとは思っていなかった。</p>	<p>彼女は皇帝に二人の娘を与えたが、誰も遠くでさえも彼と比べることができなかった。また他の皇室の貴婦人たちは誰も彼を避けなかった。なぜならすでにあまりにも心地よく気品ある行儀作法を見せていたので、魅力的かつ刺激的な遊び相手となっていた。自然と正式な学業にも精を出したが、天を弦楽器と横笛の音楽で鳴り響かせた。実際、もし傑出したこと全てを表にしなければならぬとすれば、馬鹿馬鹿しく思わせるようになるだけであろう。</p>	<p>彼女は二人の娘がいたが、誰もりりしきにおいては比べることができなかった。貴婦人方や幼い女の子たちが群がり、全く顔を見られることに赤面もせず、彼の注意を弾くことに皆熱心で、彼のはつらつとした優雅さにうっとりしていた。</p> <p>義務的な学問の科目において幼い王子の成果を話す必要はない。もし音楽となれば、彼の笛とコトの音色は空に響き、宮廷中の驚嘆を呼び起こすのだが、全てこれらを数え上げれば、大げさに思えるだろう。</p>	<p>彼女には娘二人がいたが、美麗さで誰一人も彼と匹敵できなかった。女房と若い人たちは群がって、顔見られるのを恥らで、その初々しい優美さに夢中になって、皆彼を奉公に競い合っていた。</p> <p>御子の必修科目に功績を別に置いて、音楽のことだったら、笛とコトの音色は空にも響かせ、宮殿中に驚きを招きながら、すべてを語ると誇張が過ぎると思われる。</p>	<p>二人の王女を産んでいたが彼女たちさえも彼と比べることはできなかった。貴婦人たちはも彼から逃げなかった。彼の洗練されたさわやかさは貴婦人たちを笑いのものにさせるほどで、そのためこの愛らしくおろそかにできない遊びのお供は全ての女性の気を失わせた。</p> <p>期待されていたように、中国語の古典の勉学においても輝き、また彼のハーブと笛の音は雲を鳴り響かせ、もし全ての彼の長所を語り続ければ、不快な方法で誇張した人のように思われて終わるだろうに。</p>

<p>47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を観て不思議がる「そのころ〜」(1955／二〇⑥／三九)</p>	<p>そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さんことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率ててまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしぶ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の固めとなりて、天下を輔く方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。</p>	<p>その時代、宮廷にはある韓国人の一団が姿を現し、その中には有名な占い師がいた。皇帝は皇帝ウダ18によって公布されたある法律の結果として、彼らを宮殿で手厚くもてなさなかった。法律によってすべての外国人に宮殿へ近づくことが禁じられていた。しかし、大きな機密で取り囲まれて、王子を旅行者たちの部屋に送り、右の秘書が付き添った。秘書は子供を自分の息子のように紹介をしなければならなかった。子供の外見全てが表す特徴が古い師を驚かせた。彼の頭の動きが並外れた驚きを明示していた。「彼は国家の父になることができる人の全ての特徴を持っている。」と言った。「これがもし彼の運命であれば、国の全能の王や皇帝とは違った他の高位の人にはたどり着かないだろう。しかし、さらに彼を詳細に調べると、彼の王国はただ臣下たちに災難と悲しみをもたらすだけだと分かります。もし国家の偉大な人物になることができれば、前兆は幸運にもそれには応じないことが分かります。私が前に話した王家の特徴に挑むことになるでしょう。」</p>	<p>ある日首都に朝鮮の外交使節団がやってきた。皇帝が団員の中に著名な人相学者がいることを知った時、彼に相談をしたかったが、ウダ皇帝のある法令が王宮に外国人を受け入れることを禁じていたので、朝鮮の特使が宿泊していた街の南の別棟に息子を送った。彼にはある主要な宮廷人、つまり身分の高い調整役の息子として紹介させた。学識豊かな韓国人は感嘆でいっぱい注意深く彼を調べ、低い声で自分自身と話しているかのように低い声で言った。「一番高いところにたどり着き、国の父になるために選ばれた人の顔を持っている。しかし、これが起きるようだと、終わりのない不幸のもととなるだろう。一方、彼には大臣の顔だちが見当たらないが…。」</p>	<p>その頃陛下はコマからのある使節団の一員の中に人相学の専門家がいますと知り、宮殿に顔を出すように要求することはウダ皇帝の厳粛な訓戒に反するので、秘密裏に息子をコーロカンに送った。右の大執事がそこに彼を連れて行くことを担当し、息子として紹介した。「民衆の父となり、君主の至高の卓越に達するように運命づけられている者のしるしを示しています。」と明らかにした。「しかしそのような運命は混乱や苦しみを引き起こすのでないかと心配しています。しかしながら、彼を宮廷の未来の支柱、そして王国全てを守護する者として見ると、今一度ある種の不均衡があるように思われます。」</p>	<p>ある使節がコマの王国からやってきた。使者の中に熟練した人相学者がいますと分かったと、皇帝は彼を相談するために面前に呼び出したかった。しかしながら、よそ者を受け入れないという故テイジンンの決定を尊重することを決め、代わりに内密に彼のひいきの幼い子供を使節が宿泊しているコーロの邸宅に遣わした。その男の子は宮廷での家庭教師の右の大副記者の息子に変装してそこに行った。その博識な韓国人はびっくりして数回頭を傾け、当惑したままだった。「彼の人相によると国の父になるように運命づけられているようです。そしてこの運命を持っているのならば帝国の最高位に登るまで止まらないでしょう。しかし、この点を改めてじっくり見ると、おそらく混乱や災難が起きると予想します。しかし、国家のすばらしい役人で帝国の相談役になるとすれば、別の様相を持っているでしょうし、帝国の相談役のようなものでは終わらないでしょう。」と言った。</p>	<p>コマ高麗の王国から大使団がやってきた。その中に優れた人相家がある」と知った時、帝は彼を召して相談しようとした。けれども、亡くなったテイジンンの外国の人を招致しないことの決定を従うべきに決めた。その代わりに、秘かに寵愛した若い子を使節が泊まっていたコーロの屋敷に送った。その子を装って、宮廷での守役の右大弁に付き添われて、少年はあそこに赴いた。韓国の賢人は途方に暮れて、何度も首を傾げて、当惑した。「その容貌から見れば国の父に成るという運命にあるが、その宿命が果たすならば国政の最高位に上り就くまで働き止まないだろう。が、再度考慮すると混乱と天変地異が起ると予想できる。しかし、国家の上級官僚と国政の補佐と成ったら、また別の局面が生じて、最終的に並の国政の補佐として終わらないだろう。」と断定した。</p>	<p>その時代に陛下は朝鮮から外交官として来ていた人たちの中に著名な人相学者がいると聞き、王子を外交官の宿舎に秘密で送った。なぜなら皇帝ウダは宮殿に外国人を招くことに反対であるという考えを述べていたからだ。彼を右の政府の大書記官61が連れて行き、自分自身の息子として紹介したが、人相学者は不思議がり不信に思い何度も首を傾けた。「王国の父になりこの上ない位、つまり君臨する皇帝のそれに達するであらう人の顔立ちをしています。しかしながら、彼を見ると同時に悲劇を引き起こさないだろうかと自問します。彼の中に宮廷の柱と地の守護者として仕える誰かが見えます。しかし彼の顔立ちは何か不思議なものを持っているように見えます…」と言った。</p>
<p>48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興味深い詩句を作る「弁も、いと才かしこき博士にて、言ひ交したることどもなん、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなんとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれるな句を作りたまへるを、限りなうめだてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物たまはず。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。</p>	<p>弁も、いと才かしこき博士にて、言ひ交したることどもなん、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなんとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれるな句を作りたまへるを、限りなうめだてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物たまはず。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。</p>	<p>秘書は並外れた学識を持ち合わせた男性で、その古い師と興味深い会話をもった。随筆や詩を交わし、その魔術師は小さなスピーチをした。「私にとって、出発の前夜にあなたがたのところまでこれだけの学識を持った人を見つけたのは本当に喜びでした。あなたたちと別れる悲しみと合わせて、私はこの日から一番優しい思い出の使者となるでしょう。」幼い王子は彼にすてきな詩を贈り、それは彼にとって際限ない感嘆に値し、そしてたくさんの貴重な贈り物を受け取った。皇帝はその外国人に報いたくて皇室の宝から取った高価な褒美を贈った。このことは全て最も厳格な秘密の中にとどまったが、推定上の王座の継承者の祖母である右大臣とその支持者たちがその事実を知り、何かを疑った。</p>	<p>君主はその話が秘密に保たれるように努めたが、何かがそれについて漏れた。右大臣のコキデンの父で長子の祖父は朝鮮人の人相学者の判断を知っており、彼の当然の心配は増した。</p>	<p>執事は深い教養のある人で、その訪問者との会話はとても興味深いものであった。詩を交換し、人相学者がすぐに行かなければならぬ中でとても良い詩を書いた。詩の中で彼はこのような並外れた男の子に会えた喜びを、別れる悲しみと一緒に表した。子供は、一方で、いくつかの感動的な詩を作り、訪問者は彼に素晴らしい贈り物をする前に遠回しに言うことなく賞賛した。また人相学者は陛下からもたくさんの贈り物を受け取った。このような場合に起きるように、この面会の知らせは伝わり、陛下がそれについて決して言及しなかったにもかかわらず、皇太子の祖父である右大臣は疑い深くそれが何を意味するのだろうかかと自問した。</p>	<p>大副記者は鋭敏で才能に恵まれたものであったが、預言者とともに興味深い会話を始めた。中国語で詩を交換し、のちにその外国人は短い話を始めた。「国に帰る前の晩にこのような珍しい特性を持つ誰かと知り合えたことはものすごい喜びでした。出発は残念ですが、私の訪問で一番すてきな印象を持ち帰らなければならぬでしょう。」使節は幼い王子に美しい詩と贈り物を贈った。その帝国の役員はまた熟練した人相学者にたくさんの贈り物で報いた。この出来事は詳細こそ明かさなかったが宮殿中に広がった。とりわけ、右大臣である皇太子の祖父は疑い深くその全てが何を意味するのかわからず、自然にその話題は流布し、右大臣である皇太子の祖父はどのような結果をもたらすかについて疑念をもって思い悩んだ。</p>	<p>右大弁は賢明な才能のある人であった、古い師と興味深い話をし始めた。漢詩を交わしてから、外国の方は短い談話をした。国へ帰る前日に、かくのような希な性質が備われた方と面会することができて、大変光栄です。分かれるのは惜しむが訪問して得た素晴らしい感動をもって帰るのは嬉しいです。順にその代わり若い御子に綺麗な詩と進物を差し上げた。帝の官人も優れた相人に多くの贈り物をした。この出来事は宮殿中に知れ渡ったが、詳細な事情は遠慮された。そのうち、皇太子の祖父であった右大臣は疑った。とりわけ、右大臣である皇太子の祖父は疑い深くその全てが何を意味するのかわからず、自然にその話題は流布し、右大臣である皇太子の祖父はどのような結果をもたらすかについて疑念をもって思い悩んだ。</p>	<p>政府の秘書官は際立った才能をもった学士院会員であり、交わした言葉はとても興味深いものだった。彼らは中国語で詩を作り、人相学者が出発しようとしたとき一日あるいは次の日―王子のようなとても特別な人と会談できた喜びと別れるときに当然感じる悲しさについての魅力的な詩を作った。王子もまたとても感動的な韻文を作った。人相学者はそれをとてもほめたたえて、彼に素晴らしい別れの贈り物をした。また宮廷からも人相学者にたくさんの贈り物を送った。陛下が予言についての知らせを漏らさせなかったにもかかわらず、自然にその話題は流布し、右大臣である皇太子の祖父はどのような結果をもたらすかについて疑念をもって思い悩んだ。</p>

<p>49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこき〜」(2075／二一⑤／四〇)</p>	<p>帝、かしこき御心に、倭相を仰せておぼしよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおぼして、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、我が御世もいと定めなきを、ただ人に朝廷の御後見をするなん、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。</p>	<p>すぐに皇帝は何人かの自分の国の占い師を何人か呼ばせて、彼らを試した。彼自身が観察することができたある特徴のために子供を王族の位のために教育することを控えていたことを彼らに説明した。全員が声をそろえて彼が慎重に振舞っていたと言って、皇帝はそして子供を王家の地位や母方の援助のない王子として世間に紹介することを決心した。こう熟考していた。「私の力は不確かだ。私の代わりに国の高官を監視した方が良い。」このように子供の将来を最善に決めることを考えて、真剣に彼の教育に従事して、子供に知識と芸術のあらゆる分野で完全にさせた。</p>	<p>しかし皇帝はすでに日本人の占い師にも息子の人相の顔立ちを調べさせていて、韓国のそれはただ彼らに同意をするだけであった。確認し終えるために、インドの人相学者を呼ばせて、全てにおいて他の者と一致した。最後には父は決心した。母方の後見人が子供にはいないので、明らか後継者に彼を指名することは彼を不必要な危険にさらすことを意味していただろう。なぜなら君主はどのくらい長く自分の治世が続くか分からなかったからだ。一方、少年は位の高い宮廷人そして役人として国に尊い奉仕をすることができた。目下、学問を根気よく続けるように彼を励ますことに留めた。</p>	<p>人相学者によって行われた解釈は日本で実践されていたように人相学の技術を習熟していたおかげで彼自身が行い、それによって息子を王子に指名するのを控えていた彼の解釈と一致していたのでとても感銘を受けた。それゆえ、男の子を位階と母方の親戚の誰の支えもない王子として成り行きにゆだねるよりは、平民として王国に仕えさせることを許した方が彼にとってより有望な未来（あらゆることが起きた後で自分自身の治世も短いであろう）を保証できるだろうと決心した。そういった目的で何よりも勤勉に学問に精を出させた。</p>	<p>皇帝は用心深く、ヤマトの占い師の担当で新たな証明をするよう命じたが、診断は同じ結論に至った。その時までシンノーの位を幼い殿に与えるのを控えていた。この布告によって合意した。外戚の支えがなく、決まった位もないまま子供の王子を世に放っておくのはふさわしくない。それなら、「私自身の力は不安定なものだ。最善なのは私の名において貴族政治の外で国家の重要な役人たちを見張るように彼を配属することだろう。」と考えていた。このように穏やかに若者の未来に備えたと考えながら、彼の教育を監視することにひどく固執をして、なぜ芸術や学問の科目の一つ一つで完璧なのかを気にしていた。</p>	<p>帝は慎重な態度故に、ヤマト大和の相人に新調査をさせて、明確にこの調べも同じ結果を出した。その時点で幼い君にシンノウ親王と言う称号を与えなかった。この決定に同意して、外戚の後見なくて特定の位を与えられずまま小さい御子をこの世に残すのは避けるべきだと思う人々がたくさんいた。その思惑は、「自分の権威は確実でない。最善なのは、自分の代わりに、貴族でない国の大官人を管理する担当者をさせること」と考えた。このように、少年の将来は穏やかに片付けると思いながら、その教育の管理に積極的に取り組んで、それぞれの芸と知の道での腕を磨けるように配慮した。</p>	<p>皇帝は聡明で、すでにある日本人の人相学者に相談してよく知っていて、そのため今は王座継承の皇室の王子として王子を言明していません。朝鮮の人相学者が聡明であったと考え、位のない王子にする不確かさに彼をさらすことも望んでいなかった。母方の親族の援助が足りていなかったのだ。彼自身の治世の運命はとても不確かだった。そのため一番確かなのは将来的に平民の臣下として宮廷を支えてもらうことだろうと決め、様々な技能を育てさせた。</p>
<p>50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏に決断「際ことに〜」(2120／二一⑩／四一)</p>	<p>際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勤へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。</p>	<p>その中で子供はあまりに天分を示したので本当に彼に貴族の位を何も授けないことは痛ましかったが、皇帝は彼を王子にしたいという願望を持って、天体の影響と月相の研究と知識において最も精通した賢人に相談し、全員がもっぱら彼にミナモトつまりゲンの一族の一員に任命するように勧めた。そして、そのようになされた。</p>	<p>学問においてはいつも彼の仲間たちよりもずっと上で際立っていた。王子はこうしてただの高い位の宮廷人になり、そしてミナモトあるいはゲンジと呼ばれるであろう。</p>	<p>彼の才能を考慮すると臣下にするのは残念であったが、王子としては不信の標的になるだろう。だからある著名な占星学者に相談してこの予言が確たるものになった時、陛下は彼をゲンジにすることに決めた。</p>	<p>その男の子は勤勉な様子を見せたので並みの者の最低限の位に甘んじさせることは無駄のように思えるほどだった。しかしながら、王子は彼が皇帝になることを恐れる動機を持っている者たちの敵意を生み出しうるのであった。したがって、天体の運行と月の位相に精通したト占官を呼び出し、ト占官はあの他国の熟練の人相学者と同じことを強調した。その時やんごとなきお方は自分の男の子にミナモトの一族、ゲンジを与えた。</p>	<p>少年は精励して、並の臣下に下すはもったいなく思う程だった。しかし、親王として、帝に即位するようになるのを恐れていた人々の敵意を招きかねないことである。天体の運行と月の満ち欠けを知り尽くした占い師を召して、結果はあの優れた外国の相人が示した点と同じことだった。それに、上は我が子にミナモト源或はゲンジの氏族を与えた。</p>	<p>彼はとても頭がよく平民にするのは残念だったが、もし皇太子になれば疑いなく世の不信を被ることになるだろう。なので人相学者たちと同じように意見を述べた占星学の大家に相談した後に、ふさわしいのは彼をゲンジと名付けることだと決心した。</p>
<p>51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」(2147／二一⑬／四一)</p>	<p>年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々（大島本「人々を」）参らせたまへど、なずらひにおぼさるだにいとかたき世かな、と疎ましようのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高きおはします。</p>	<p>年月が経ち、皇帝は貴婦人の事を忘れていなかった。誰かが彼にとって心地良いであろうという希望を持って宮殿にたくさんの女性が送られたが、皇帝は彼女たちを避けた。なぜなら全世界がすでに存在していない人と同じ女性を彼に与えることができることを知っていたからだ。この時、ある評判の高い美しさの女性がまた存在していた。先代の皇帝の4番目の娘であった</p>	<p>年月が経ち、皇帝は彼の深い愛の喪失を受け入れることができないままにいた。彼を慰めるために貴婦人に取り囲まれていたが、ゲンジの不運な母に匹敵する他の女性が世界に存在すると主張することは狂気じみたことのように思われ、男性は何にも関心を持たず思い出に沈んで人生を過ごしていた。ある日彼に第四王女について話された。</p>	<p>陛下が失った避難場所を忘れないまま月日が過ぎていた。様々な可能性のある候補を招集した後、彼女のような他の女性にはこの世では決して再び会えないだろうというつらい結論に達した。しかし、その時職員のある貴婦人が彼に他の可能性について話した。先代皇帝の4番目の子供で、その美しさで知られており、</p>	<p>年月が過ぎたが、皇帝はキリツボの貴婦人の事を忘れることができずにいた。慰めを与えることができるような様々な貴婦人を宮殿に呼ばせたが、明らかに僧侶になりたいところまで彼を疲れさせ、そしてこの世には彼女に似た者が他にいないことに絶望した。その頃、第四王女の資質が賞賛され始めた。</p>	<p>年月が経っても帝はキリツボの方を忘れることができなかった。気が慰めようなお方を何人も宮殿に召したが、明らかにあらゆることで心は曇っていて、この世にあの方と似ている人がいないということで出家もしそうな気になっていた。そのころ、寡婦の皇太后の母に立派に育てられた美貌の誉れ高い先帝の四ノ宮の美点が称讃的になり始めた。</p>	<p>月日が過ぎ、一瞬たりとも彼の安らぎの貴婦人のことを考えるをやめなかった。慰めを探して適切だと思われる様々な人を呼ばせたが、彼女に似ている誰かを見つけることは難しかったので、この世は彼にとって全く不快なものに思えるに至った。しかしながら、先代皇帝の第4王女はその美しさで有名で</p>

<p>52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく～」(2173／二二②／四一)</p>	<p>母后世になくかしづきこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむごろに聞こえさせたまひけり。</p>	<p>彼女の母である皇太后は丹念に彼女の家のある貴婦人が内輪で未だにその幼い女の子と付き合いを続けており、彼女に会う機会がいくらかあったのだ。「私は三つの宮廷で仕えてきました。」とこの婦人は言った。「そしてこの全ての時の間中キリツポに似た人を誰も見つけれませんでした。もしそれが皇太后の娘でなければ、確かに、彼女は類まれに美しいです。」皇帝にこのように話し、皇帝は注意深く彼女の話聞き、真実はどこにあるのだろうかと自問した。</p>	<p>亡くなった皇帝の娘で、類まれなる美しさと母親である隠居した皇后によって際限ない配慮をして教育されたことで有名な貴婦人であった。君主に仕えているある宮廷の侍女が王女がまだ女の子だった先代の時代に彼女にとっても縁があって、時々彼女に会いに行っていた。「私は3人の皇帝の治世の間宮廷で生きてきました。」と彼に言った。「まだ亡くなった貴婦人に張り合うことができる人を見たことがあります。しかし、皇后の娘が女性になった今、確かなことは彼女に大変似ていることです。長所において彼女に勝る女性を私は誰も知りません。」あまりに主張したので君主は結局王女を宮廷に送るように頼んだ。</p>	<p>皇后である母によって細心の注意を払って育てられた。貴婦人はその皇帝に任務を負っていてその若い女性の母のとも近く仕え、そのため幼少期よりその女の子を知っていた。実際、今でさえ彼女に時々会っていた。「私は宮廷で3つの治世の間お仕えしてきました。」と彼にその貴婦人は言った。「その全てにおいて陛下の亡くなった避難場所のような方は誰も知りませんが、私が申し上げている王女は彼女にとっても似てきました。」陛下は母にとっても用心深く近づき、彼に言われたことの中に実際には何かがあるのかを発見したくうずうずしていた。</p>	<p>前君主の娘であり、その美しさで有名で未亡人の皇后である母によって非常に細心の注意を払って育てられた。その頃、やんごとなきお方のお世話をしているある女性で、内部の奉仕の二番目の長であったが、先代の時代にまだ女の子だったときからその王女と親しくなり、今でも時々会うこともあって、こう明らかにした。「私は今まで三つの治世の間宮廷で仕えてきましたが、キリツポの亡き貴婦人に本当に似ている方は誰も見たことがありませんでした。しかし今や未亡人の皇后のお嬢様が大きくなられて、その似通いは非常に驚くべきものです。他に同じような方を見つけることはとても苦勞することでしょう。」彼女が正しいということを望みながら、君主は丁重にその王女が宮廷の彼の面前に遣わされてくるよう頼んだ。</p>	<p>同時に、上の宮仕えにした内侍のすけに当たるある女性は、先帝の時にあの女宮に幼い頃から親しまれていて、今でも時々合うことができるのは、こう言った。「今日まで三代の御代をわたって朝廷で奉仕している間に、キリツポの亡くなった方と本当に酷似する人は今まであったことのない。が、皇太后の娘の成長している姿を見て似ていることは驚く程である。他の匹敵できる方を見出すのはとても難しい」と。彼女の言ったことは確かであると願って、帝はお前に召して思いやり深くてあの宮は宮廷に送らせることを依頼した。</p>	<p>前の皇后によって細心の注意を払って世界で比類のない誰かのように育てられた。陛下の宮殿の職員の前長は先代皇帝の治世でその王女と親密に付き合いがあったので女の子だったときから彼女を見ていて今でも時々会っていた。「私は皇帝の3世代続けて仕えまして外見が亡くなった安らぎの貴婦人に似ている人を見たことがありませんでした。しかし年と共にこの皇后の王女はともも似てきました。普通ではない美しさの人です。」と副長は言った。確かであるか自問して心がひきつけられるのを感じながら、陛下は強い愛情表現をもって手紙を書いた。</p>
<p>53 帝を巡る女たちの怖さを言う四の宮の母が死ぬと、入内の道が開く「母后、「あな～」(2233／二二⑧／四二)</p>	<p>母后、「あな恐ろしや、春宮女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と、お話しつづみて、さすががしうもおぼしたたざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただ我が女御子たちの同じつらに思ひきこえん」と、いとねんごろに聞こえさせたまふ。</p>	<p>それに気づき、皇太后はおびえた。コキデンが自分の宿敵に対して持っていた隠すことの決してない残酷な行為を覚えていた。あえて思うままに恐れを述べることはしなかったが、娘が宮中に紹介するのが遅くなるようにした。この間、予期せず亡くなった。皇帝は喪に服した王女が痛ましい状態にあることを知って、すべての彼の善意とともに彼が彼女を王女たち、つまり自分の娘たちの一人のように思っているということを彼女に伝えさせた。</p>	<p>彼女の母は結果を恐れて反対した。「皇太子の母は桐の別棟の貴婦人にとっても苦しめたとても性格の悪い女性であることを思い出してください。彼女を殺すまで苦しめたとも言われているのです。」と語っていた。しかし母親が亡くなって、第四王女は世界で独りぼっちになり、皇帝は嘆願を繰り返して、一度宮殿に入れば王女は彼の娘の一人のように扱われるだろうと家族に約束した。</p>	<p>彼女は申し出をある程度警戒して受け取った。なぜなら皇太子の母であることがどのくらい不快なものであるかを知っており、夫人が競争相手であったキリツポを扱ったように明らかな軽蔑に自分の娘をさらすことを嫌悪したからであった。同意を与える決断をしつづあったところだったが、ここにきて突然亡くなった。娘が一人になるとすぐに、皇帝は真剣に結婚の申し込みをして、彼女には彼にとっては娘のようなものであるということを保証した。</p>	<p>しかし、王女の母は同意した様子はなく、恐れているようであった。皇太子の母は極端に執拗な方でキリツポの貴婦人を公然とした侮辱を受けさせ、後に致命的な衰退を引き起こしたことを思い出さなければならぬと言った。しかし、決断を下す前に彼女は故人の先帝の跡をたどり、彼女の娘は一人となった。皇帝は嘆願を新たにし、悲嘆にくれた女の子をわが娘の一人のように扱うと表明した。</p>	<p>けれども、その母は同意しようもなく恐怖を感じていた。「忘れては行けないことは、皇太子の母は極めて頑固な方で、キリツポの方を大っぴらに辱めて、ついに致命的な衰えに落ちいれさせた」と言った。が、決心がつく前にも彼女は亡くなった人の後を追って、娘は一人に残された。帝は依頼を再度にして、悲しむ子を自分の娘のように扱うことを表した。</p>	<p>彼女の母の皇后は用心深く考えていた。なんと恐ろしいことでしょう！皇太子の母の夫人はとても凶悪な人で桐の中庭の内縁の妻が受けていたあまりにみじめな扱いは心配な先例です。しかし決断に達する前にこの皇后は亡くなった。王女はとても悲しい心を持っていて、そのため陛下は強い愛情表現とともに彼女に言った。「君を私の娘の王女と同じ基準で扱おうと思っている。」</p>
<p>54 不思議なほど更衣に似る四の宮は周りに押され入内し藤壺と称する「さぶらふ人々～」(2264／二二⑩／四二)</p>	<p>さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしませんよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせたまつりたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。</p>	<p>召使と警備員と彼女の兄のヒョブキョの王子は宮殿の生活は彼女の気を紛らわして、彼女のうちの悲しい影よりも彼女にとっては良いだろうと考え、宮廷に送りました。そこでは彼女はフジツポと名付けられた部屋を割り当てられ、この名前を取りました。皇帝はよく愛した女性に彼女が奇跡的に似ていることを否定することができなかった。</p>	<p>それほどの主張を考慮して、貴婦人の母方の親戚と兄弟のヒョブ王子は決断を下すために集まった。彼らが至った結論は彼女の華麗さが枯渇するまで家にいるよう強いるよりも女の子を宮廷に送った方が望ましいということだった。だから彼女を皇居に送った。藤の別棟に落ち着いたことからフジツポと呼ばれていた。皇太子に話していたように、亡くなった女性にとっても似ていたが、</p>	<p>彼女の名誉ある貴婦人たち、つまりその若い女性の利害を心配すべき人々と彼女の兄である戦いの殿下は皆彼女が家に一人であるよりは宮殿の中にいる方が遥かに良いということできちんと主張した。ここにいくべきだと主張した。その女の子はフジツポと呼ばれていた。本当に驚くほど端まであの一人の貴婦人に似ていたが、</p>	<p>その少女の召使、母方の親族、兄、ヒョーブ王子、軍事長官はお互いに相談し合い、家で弱っていく代わりに宮廷で慰めとなるものを探そうという結論を出した。こうして彼女はそこに送られた。この後はフジツポの貴婦人として知られた。彼女の繊細な顔立ちと今はいないキリツポの貴婦人のそれの似通い方は本当に驚異的であった。</p>	<p>少女の侍女たち、母方の親戚とその兄、軍事長官のヒョーブ兵部の宮は相談し合つての結果として、家には悲しみ沈むより宮廷で慰めを求める方がよいと決意して、送らせた。以降はフジツポ藤壺の方と知られるようになった。いなくなった方との可憐な美貌の相似は実に驚くべきだった。</p>	<p>彼女に仕えていた人たち、彼女を支えていた人たち、そして兄弟の戦いの省庁の長官である王子は宮廷で暮らすことはそんなに悲しい心を持ち続けるよりも良いし、疑いなく彼女の気持ちも良くなるだろうと考えて彼女を宮廷に送った。彼女は「藤の中庭の内縁の妻」と呼ばれた。実際に驚くべきほど外見と美しさにおいて似ていた。</p>

<p>55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしいに「これは人の〜」(2295／二三②／四三)</p>	<p>これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやにくなりしぞかし。おぼし紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。</p>	<p>彼女はしかしながら別の身分に属しており、皆が彼女を喜ばせようと努力した。ほしいものがなんであろうと、いつも彼女に与えられた。貴婦人は皇帝のひきたてて手にしていたが、彼女を決して許容しなかった宮廷のそれは得られなかった。しかし、君主の昔の愛は衰えず、時には亡くなった女性に似た貴婦人のことを考え、また時には彼から去ってしまった者のことを考えて何度か慰めを見つけていたが、彼にとって人生は重い荷物であった。</p>	<p>よりずっと位の高い家計に属していたので、宮廷にやたらにたくさんいたおべっか使いたち（全ての宮廷でいつも起きていたようにたくさんいた）は隙限なくより優美で繊細だと宣言した。彼女の高い階級のため皇帝は何の恥じらいもなく彼女の傍に姿を現すことができた。ゲンジの母は愛を刺激するために何もしなかった。実際に彼女は過度に強い情熱の哀れな犠牲者であった。フジツボが君主の心から彼の昔の情熱を消したというのは間違いであろうが、あまりに素晴らしい女性だったので男性は彼女に興味を持ち始め、彼女の傍で多くの痛みが慰められた。人生はこのようなものだ。</p>	<p>彼女の位はとても高かったので、自発的に敬意を示され、誰も彼女を軽々しく扱うことができず、相容れない決定に屈する必要がなかった。広がった反対にもかかわらず、陛下は絶対的に前の愛に忠実なままであったが、感動的にも彼の愛情は来たばかりの女性へとひっくり返った。彼にとっては大きな慰めであった。</p>	<p>しかし、とても名門の出であったので（おそらく人々が想像していたのだが）故人よりも繊細で優美に思われた。誰も低い身分であるからといって彼女を見下したりすることはできず、君主も彼女への愛を示すのに臆病さを感じる理由はなかった。故人については誰も彼女を認めも同意もせず、過度で強烈な愛の犠牲者であった。しかし、今やんごとなきお方は痛みを画してはいなかったが、完全にそれを忘れることなく、彼の愛情がその新しい女性に移っていくのに気付いた。彼女は彼にとって大きな満足の源であった。人間の気持ちはこのように自然で底知れないものなのである。</p>	<p>人の想像することでしょうか、亡くなった方より、生まれの尊い故の優雅に華奢であると評判された。下臈の身分として軽視されることなく、帝も彼女への愛情を表現するのは控えることもない。なくなった方は誰にも認められず許されないまま、寵愛を過剰なまで受けていたが、今の上は完全に忘れていなくても、その悲しみを惜しまないながら、その愛情は大変な喜びの元となった新しい方に移っていくことを気づいた。人間の天然な測ることのできない感情はこのようなものである。</p>	<p>上級で高く輝かしい位の出だったのでも誰も彼女を軽蔑することができず、それゆえしっかりと行動をして、決して反抗に出くわさなかった。亡くなった女性は人々に受け入れられずえこひいきが彼女に障害を生み出した。陛下は全く回復していなかったけれど、彼の心は自身で変化しそのようなまれにみる形で慰めを見つけたことは感動的な出来事であった。</p>
<p>56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する「源氏の君は〜」(2327／二三⑤／四三)</p>	<p>源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、我人に劣らむとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若ううつくしげにて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。</p>	<p>ゲンジは皇帝から離れなかった。名誉ある貴婦人たちと女官たちの間でくつろいでいて、皇帝が毎日そばに呼んでいた女性の事も怖がらなくなっていた。魅力においてすべての貴婦人がゲンジの心の中の一番の場所を得るために張り合っていた。たくさんそして様々な方法で彼に感嘆する女性たちがいた。しかし大多数はいつも彼の前では目上の者のように振舞っていた。一人の女性だけ、新しい王女だけが若くまたかわいらしかった。彼の前を気づかないで通ろうとしたが、二人のどちらも出会うことを避けることはできなかった。</p>	<p>ゲンジは決して父から離れたことがなかったので、来たばかりの王女はしばしば皇帝が彼女の部屋を訪れていて、彼から隠れることができなかつた。彼女を取り囲む貴婦人たちはもうすでに若くはなく、フジツボの美しさはその完璧さとみずみずしさのために彼女たちの中で光り輝いていた。ほとんど子供の臆病さに支配されていて見られないようにしていたが、ゲンジは彼女の顔を見つめる複数の機会があって、</p>	<p>陛下の貴婦人たちは誰も若いゲンジに対して憤み深い態度を続けてはいなかった。ほぼいつも父にいる以上、今とても頻繁に会っている人はとりわけそうであった。彼女たち全員が間違いなくもっともらしい理由で美しさを誇っていたが、すでに若さの盛りではなかった。一方で新しい王女は若くて魅力的で、当然のようにゲンジはたとえ女の子が彼の視界の外にしようとしても彼女の事をこっそりと見張っていた。</p>	<p>ゲンジは決して父親の側から離れなかったの、あまりに多くの訪問を受けるこの新しい貴婦人が彼から隠れることは簡単ではなかった。他の貴婦人たちは彼女より自分が劣っていると思うことに覚悟ができていない様子で、本当にそれぞれが自身の長所を持っていた。彼女たちはほぼ全員がすでに春を過ごしており、フジツボの美女は一番若く生き生きした類であった。しかしほぼ子供っぽい内気さにおいて特に見られないように努めていた。ゲンジは、偶然にも彼女の顔を偵察した。</p>	<p>ゲンジは父の側から離れないから、度重なる訪問を受けるこの新しい方にとって彼から身を隠すのは楽なことではなかった。他の方々自分はある方より劣っていると思うようになり誰一人もいなかった。事実、各々の魅力皆に備わっていた。人生の春を超えた方はほとんどで、フジツボの麗しさは初々しい新鮮なものだった。子供のようなうぶな恥づかしがりやなさのため、特に見られるのを避けていた。偶然にもゲンジはその顔をちらりと見かけた。</p>	<p>王子ゲンジは陛下から離れてはおらず、言うまでもなく頻繁に陛下を訪れていた人たちも彼の居ることに慣れていた。貴婦人たちはそれぞれ自らの魅力を持っていた。一他の人たちよりも自分が劣ると思っている人がいるだろうか？—しかし年を取っていた。王女は若く美しかった。隠れようと努力をしていたがゲンジは彼女をこっそりと観察することができた。</p>
<p>57 三歳で母と死別した源氏の君は、母に生き写しだという藤壺を慕う「母御息所も〜」(2370／二三③／四三)</p>	<p>母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとおはれと思ひきこえたまひて、つねに参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。</p>	<p>ゲンジはもう母親の事を覚えていなかった。親密な出来事の貴婦人は彼にその若い女性がとても母親に似ていると言った。彼の子供の想像力にその時火が付いた。彼女の大親友になりたくて、ずっと彼女の近くで暮らしたがった。</p>	<p>彼の母の顔を思い出すことができずに、王女が生きた肖像画であると言われた時に心の底から興奮した。彼女の傍で人生を過ごすことを望んでいたのに！</p>	<p>母親の事は覚えていなかったが、職員の責任者である貴婦人がその若い女性がどんなに似ているかを話したとき、若者特有の関心が目覚め、そして満足がいくまで彼女をじっと見つめるためにいつも彼女と一緒にいたかった。</p>	<p>彼は自身の母を思い出すことができなかった。しかしながら、フジツボについて皇帝が最初の報告をしたとき、貴婦人を通じて両者の類似は驚くべきものだと知った。それゆえ彼の小さな心に懐かしさが生まれて彼女の近くにいつも居ることを熱望していた。</p>	<p>自分の母のことは覚えていなかった。けれども、最初にフジツボについて帝に話した方から分かったのは、二人の相似は実に驚く程であった。このため、若き心の中に懐かしさが芽生えて、常にその側にいると望んでいた。</p>	<p>彼の母の安らぎの貴婦人のコトは外見すらも覚えていなかったが、宮殿の職員の副長が「よく似ている」と言ったので、彼の幼い心は感動に捕らえられて彼女のことをもっとよく知りたいので来ることをいつも望んでいた。</p>

<p>58 帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤壺に源氏は好意を示す「上も、限りなき～」(2396／二三⑩／四四)</p>	<p>上も、限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなん」など聞こえつけたまへれば幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたまつる。</p>	<p>ある日皇帝は王女に言った。「彼にそんなに厳しくするな。君が彼女の母親に似ていると彼は言われたから興味を持っているのだ。彼の事をあまりにも無礼だと判断しないで、彼を君の好意の対象にしてやってくれ。本当に君の顔はあまりにも彼の母親のそれに似ているのだ。」そしてこのように、このくらいあまりに若い年齢で、花や秋の多くの葉のようにはかない美しさは彼の思考に取りついた。初めて子供は誰かにあからさまな好みを感じた。</p>	<p>「男の子によそよそしい態度を取ってはならない。」 皇帝は王女に言った。「時々私自身も彼の哀れな母親を見ているように思う…君の目、表情…君は彼女の生きた姿だ！彼を無礼だと判断せず愛情を持って接してやってくれ。」</p>	<p>陛下は二人に深い愛情を感じていて、女の子にそんなに控えめになるのをやめるように求めた。「彼がどうしてそんなことをするのかは分からない。」と彼は言った。「しかし、君の事を母親と思っているように私には思える。無礼だと思わないでくれ。彼に優しくしてやってくれ。彼の顔と目は非常によく母親に似ているので君自身が彼女と似ていることので彼の行動は自然なものだ。」したがって、ゲンジはその女の子にどのくらい自分が好きかを知らせるために花あるいは秋の葉によって差し出されたどの機会をも逃さなかった。</p>	<p>君主はとって二人は最も好きな存在で、フジツボに言った。「よそよそしくするな。私ですら時には君が彼の母に思える。彼が奔放な者だと考えるな、彼に優しくしなさい。君の目、君の表情、本当に並外れてあの人に似ているので彼の母としても十分通じるだろう。」ゲンジのその新しい貴婦人に対する愛情は増して、どんなありふれた花や色あせた葉もそれを示すための機会に変わった。</p>	<p>帝は最も愛していた二人の一人であるフジツボに、「彼を遠ざかることしないでください。私まで彼の母に見える時もある。生意気な者と 思わないでほしい、優しくしてください。貴方の眼差し、表情、本当にあの方と意外なまで似ているので、彼の母と認められるも無理はない」といった。新しい方へのゲンジの気持ちは増すばかり、極ありふれた花でも色あせて一葉でもその気持ちを表すきっかけとなった。</p>	<p>「彼の事を拒否するな。ある日彼が彼の母親と君を同じように見るようになる」と私は驚き共に思っている。敬意を欠いていると彼の事を思わずに愛情をもって接してくれ。顔と目がとても似ているので母親と息子であるかのように彼らを似ているとみられることが不適切ではないのだ。」と王女に陛下は懇願した。なぜなら彼らを両方とも最高のお気に入りと考えていたからだ。子供の心をもって、ゲンジはそれぞれの取るに取らない花や秋の葉を彼の愛情を彼女に見せるために使っていた。</p>
<p>59 弘徽殿と藤壺が険悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよなう～」(2433／二四①／四四)</p>	<p>こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うちそへて、もとの憎さもたち出でて、ものしとおぼしたり。世に類ひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしきはたとへん方なく、うつけしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。</p>	<p>コキデンはその王女を決して愛さなかった。彼女の昔の恨みが再びよみがえった。彼女自身の息子はありきたりではない美しさではあったがヒカル・ゲンジと呼ばれるほど美しいゲンジには匹敵せず、たくさんのフジツボを賛美する者たちは彼女の事もまた輝く太陽の王女と呼んだ。</p>	<p>ゲンジのフジツボへの感服は日に日に増し、コキデンの不快となった。長子の母は第四王女には同情せず、ゲンジに対して感じていた反感は再び高まった。彼は自分の息子である明らかな後継者よりも美しく、宮廷中がそれを陰で言っていた。彼は『光り輝くゲンジ』と呼ばれ、新たなお気に入りの女性のフジツボは『光り輝く太陽の貴婦人』と呼ばれており、皇帝は他の女性や息子に捧げているよりもずっと上の配慮を彼らに与えていた。『光り輝く』の別称、「ヒカル」は朝鮮の人相学者によってつけられたと言われていた。(※「ヒカル」以下について、この部分は原文で一番最後にくる)</p>	<p>陛下が彼女に対して持っていた愛情によってコキデンの夫人はゲンジの母とそうであったように彼女と敵対するようになり、以前の憎しみが勢いを取り戻し、またゲンジに対しても反感を抱いた。ゲンジの気品のある物腰は言い表せないほどの爽やかさとみずみずしさで、殿下の有名な美しさの上をさえいくものであった。陛下にとっては比類なき美しさであって、宮中の人たちは光り輝く殿と呼んでいたほどであった。フジツボは彼と同じくらい美しく、陛下は両方を愛していたので、彼女は太陽の光の姫と呼んでいた。</p>	<p>コキデンの貴婦人は不満だった。フジツボとは良い関係ではなく、ゲンジに昔の恨みが全て再び湧き出て来て、彼女にとって不快な彼の存在がそれを長続きさせていた。彼は皇太子よりもはるかに優雅で、世界で一番大事な宝であり、そのように宮中全体が考えていた。人々はヒカルすなわち「輝けるもの」とゲンジを呼び始めた。フジツボは君主の愛において彼の隣に位置付けられ、「光を放つ太陽の貴婦人」と以後呼ばれた。</p>	<p>コキデンの方は不機嫌だった。フジツボの中はよくなかった故に、ゲンジに対して昔の恨みはよみがえってきて、嫌に思う彼の存在はその気持ちを耐えないことさせた。彼は、彼女にとってこよなくの宝物であった皇太子より、朝廷中にも評判の、風采のよい人だった。ゲンジは人々に「ヒカル」光と呼べるようになった。帝の寵愛下に彼と並べて位置を取っていたフジツボは、以降「輝く日の方」と呼ばれた。</p>	<p>この例外的なひいきを前にしてはコキデンの別棟の夫人はこの王女に対してもまた敵意を感じ、亡くなった女性への昔の憎悪や不快感がそれに加わった。夫人は自分の息子が世の中で比べるものがないと考えていて、王子はその姿でもまた有名だったが、比類ない輝きと美しさでもう一人の王子のゲンジは人々に「輝く男性」と呼ばれていた。藤の中庭の内縁の妻は同じ愛情を享受しており「輝く太陽の王女」と呼ばれていた。</p>
<p>60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の～」(2483／二四⑤／四四)</p>	<p>この君の御童姿、いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服したまふ。居起ちおぼしいとなみて、限りあることに、事をそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きにおとさせたまはず。所々の響など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなこともぞ、とりわりき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。</p>	<p>実のところ、子供に早くも男性の衣装を着せるのは悲しかったが、通過儀礼の年齢の12歳になっていた。皇帝はこの儀式的詳細を飽くなき情熱を持って監督した。なぜなら儀式のそれよりも上の壮麗さを望んでいたからだ。南の間で前年行われた王位の継承者の通過儀礼はこれほど豪華には行われなかった。皇帝は個人的に別々の棟で行われなければならない祝宴を指示し、財務官と穀物長官の準備を見張っていた。何かを忘られるのを恐れていたの。そして、すべてが完璧にやり遂げられ、皇室の住居の右の翼部で儀式が行われた。</p>	<p>あんなに魅力的な男の子を大人に着飾らせることはばかげているように思われたが、12歳になって、通過儀礼の時がやってきた。彼の父が個人的に儀式的準備の指揮を担当し、皇室の穀倉の長官や担当者が儀式が必要とされる熱心さを込めないことを恐れていた。すでに大広間で明らかな皇太子が通過儀礼を受けて数年が経っていたが、ゲンジの儀式はより輝かしくないものにはならなかった。君主は先祖伝来の儀式に新しい細かな部分を加え、宴会は本当に並外れたものだった。</p>	<p>陛下はゲンジの若者らしい魅力を駄目にしてしまうことに乗り気ではなかったが、12歳になった時、彼の成人を認め、個人的に準備に従事して、儀式に新しい装飾品を加えた。その行事が数年前にシンデンで行われた皇太子のそれよりも堂々たるものに見えないようにするために、そして全てがうまくいくために、様々な政府の部門によって提供されるごちそうに関して、そしてふだん宮廷の倉庫と皇室の穀倉が供給するもの全てに対して事細かな指示を出して、提供したものを完璧にすることができた。</p>	<p>しかしながら、皇帝はその男の子の子供服を代えなければならないことにとても気落ちして気づいた。子供用ではなく、すでに十二歳で男らしい衣装を身につけなければならない。座って、立って、全てをきちんとしようと努め、彼は慣例がそのようなことに割り当てる限界を越えていた。彼は絶対に儀式が皇太子に敬意を表して南のあずまやで去年行われたあの去年の儀式よりも小さい反響があることを望まなかった。そして様々な宴会のために、すでに酒蔵、穀物倉庫や他の場所で義務を果たすことにおいて勤勉でなくなることを恐れていたの、彼はこの件に関して最大限の光輝を準備するために命令を発した。</p>	<p>が、帝は少年の幼児服装は替えることになりつつ、がっかりする程覚えていた。十二歳になっていて大人の男性の服を着るべきだと尤もなことである。座っていても立っていても、彼は全部を取り仕切るように、習わしの限りを超えるようにしていた。決して、前年南の殿に行われた皇太子のための儀式を反響劣らないように、それぞれの響のための酒の取蔵庫、穀物倉庫等々の役所では勤勉に業務を果たさずことを恐れたため、最大限に栄光を尽くすように特に命令を下した。</p>	<p>陛下は王子の子供の外観を台無しにしたくなかったが、12歳の時に成人式を行った。準備に念を入れ、期待を超える精緻を加えさせた。華麗さで有名だった儀式と共に南の別棟で数年前に行われた皇太子の成年を下回らせなかった。宮殿の儀式的役所、あちらこちらで提供された晩餐、皇室の倉庫として貢物の倉庫であらゆる細部をおろそかにしないように特別な命令を下した。儀式は極度の贅沢さと共に行われた。</p>

61 清涼殿 で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる「おはします〜」(2537／二四〇／四五)	おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。みづら結ひたまへるつらつき、顔まる「おはします〜」(2537／二四〇／四五)	そこでは王座が東を眺めて儀礼を行った者と立会人の左大臣によって占められる席に向かって立っていた。猿の時間にゲンジは現れた。立会人が流行に従って紫色のヘアネットの匂ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕うまつる。いと清らなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼし出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせたまふ。	祭りには皇帝の部屋の東の翼で行われ、王座は東に向けて置かれていた。その儀式用の椅子の前にはゲンジと左大臣のための腰掛けがあった。左大臣は王子に正式な緑なし帽を与えなければならなかった。ゲンジは猿の時間に到着し、彼のみずみずしい顔と彼に似合っていた子供の髪型をばならない変化に並外れて心を痛めていた。財務の一等官は儀式のナイフの切れる刃を通す前に躊躇した。皇帝は全ての儀式に参加し、一瞬母親が感じたであろう誇りを想像した。後にこのほろりとさせる考えも逃げ出した。	玉座を彼の住まいの外の東の部屋に東に向けて置き、若者とその付添い人、そして大臣の席を彼の前に置くように頼んだ。ゲンジは猿の時間に現れた。2つの対をなす三つ編みにまとめられた髪と若さのみずみずしさと輝いている顔をしたその時の外観をゲンジがもう見せることはないという事実を陛下は残念に思っているように思われた。財務官と侍従が自分の仕事を終えた。財務官はとても美しい髪を切るのを残念に思っていたのは明らかで、陛下は彼の避難場所が子供に会うためにそこにいてほしいという願いのために当惑して、泣かないために自分自身を強く抑える必要があった。	陛下がいる建物の東の控室では東に向けて玉座が立てられ、その前には新たに仲間に加わる者の場所と男のかぶり物を授けなければならない左大臣の席があった。猿の回の頃にゲンジは入った。輪で結ばれたかつらに緑どられた彼の表情、顔の輝き、その全てが性質を変えなければならぬのは残念であるように切り始めたとき、帝は突然キリツボの方に見せて上げられなくて嘆いて、強烈な感情を果敢に抑えようと努めた。	陛下が住んでいた建物の東側の控え室に、東向きに玉座が設置されていて、その前に受取人の場と彼に男性冠を与える左大臣の座席があった。申の頃、ゲンジが入って来た。髪の毛が角髪に結って囲む美貌、顔の輝き、面影全体は変えるのは残念だ。大蔵の秘書は髪の毛を整えた。その真っ黒の髪の毛の房をしかねるようになり始めたとき、帝は突然キリツボの方に見せて上げられなくて嘆いて、強烈な感情を果敢に抑えようと努めた。	皇帝の住居の別棟では東側の軒の下に東に向けて王座が、向かいに角帽を受け取る人の席とそれを頭に置く大臣の席が備え付けられた。ゲンジは猿の時間に入った。陛下は子供の髪の毛と顔が受ける変化に悲しんでいるように思われた。皇室の倉庫の長官が理髪師として仕えた。あまりにも素晴らしい美しさの髪を切るときに悲しみを感じているように思えた。陛下は「安らぎの貴婦人が見ることさえできればなあ…」と考えていて、毅然と抑えるのが難しい涙をこらえた。
62 加冠の儀の後、光源氏の拝舞にみは感涙し帝も更衣を想い感無量「かうぶり〜」(2580／二五〇／四五)	かうぶりしたまひて、御休み所にまかてたまひて、御衣奉りかへて、おりて拝してまつたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、おぼし紛るるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしくおぼされつるを、あさましうつくしげさ添ひたまへり。	しかるべく冠を授けられ、ゲンジは自分の部屋に着いた。そこで最初の男性の服を着て、敬意のパパーヌをたてまつったので多くの人たちの目から涙を誘った。そして皇帝は、ある時からその部分まであまり苦しんでいなかったが、再び過去の思い出に沈んだ。子供の繊細な顔立ちが新しい服で消えることが不安だった。しかしながら、以前よりもより魅力的であった。	儀式の最初の部分が終わった時、男の子は大人の長靴下とすでに『男性』の衣服を身につけに行き、全ての見物人のいる前で感謝の行為の儀式のために中庭に降りた。皇帝は近頃は決定的に過去の思い出から解放されていると思っていたが、すべてが再び姿を現したことに気付いた。しかしながら、大人の衣装がゲンジの美しさを減じるという恐れは確認されなかった。大人の衣装で少年は何よりも『光り輝いた』。	かぶり物を身につけて待合室に下がった後にゲンジが大人の服装で再び現れて彼の君主に挨拶するために庭に降りた時、その場にいた全ての者が涙をこぼした。陛下はもちろんなおさら深く感動して、悲しみと共に男の子の母がとても慰めを与えてくれていた過去を思い出した。髪を切ることが否定的な形で少なくとも髪がとても若い間は彼の美しさに影響を及ぼすことを恐れていたが、そのようなことは全く起きなかった。逆に何よりもたまらないほどあでやかであった。	そのかぶり物を身につける儀式が終わった後、ゲンジは休息の居間に引き上げた。そこで衣装を着替え、中庭に降りた時、その場にいた全ての者が涙をこぼした。陛下は残念ながら、胸騒ぎを隠すことができなかった。過去の思い出はそれにより間断なくどうか気を紛らわすことができたが、溢れるように戻ってきて、彼を悲しませてしまった。それほど幼い年齢の時に髪を短く切ると口ごもっていたが、驚くほどりしさが増しているように見えた。	冠を授かる儀式が終わって、ゲンジは休憩室に控えて、服を変えてから庭に下がって、お礼の舞をする途端、降り、敬意の歩みを実行していた時、周りの者は皆涙を解き放させた。皇帝はこの時は残りの者たちよりは少なかったけれども、胸騒ぎを隠すことができなかった。過去の思い出はそれにより間断なくどうか気を紛らわすことができたが、溢れるように戻ってきて、彼を悲しませてしまった。それほど幼い年齢の時に髪を短く切ると口ごもっていたが、驚くほどりしさが増しているように見えた。	角帽を受け取った後に入り口に引き上げ、大人の新しい衣装を身につけて戻ってきて、庭に降り、正式なお辞儀をした。全ての人が涙をこぼしていた。皇帝はなおさらで、それを隠すことができずに再び悲しさとともに亡くなった内縁の妻からの慰めを受けていた過去の機会を思い出した。とても若いので東ねた髪型が合わないのではないかと心配していたが、今やなおさら美しく見えることを驚きと共に発見した。
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積りする「引き入れの〜」(2623／二五〇／四六)	引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御娘、春宮よりも御気色あるを、おぼしわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色たまはらせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添い臥しにも」と、もよほさせたまひければ、さおぼしたり。	彼の立会人には一人娘がいて、その美しさは王座の継承者の喜びであった。しかし、今後彼はその結びつきを支持せず、喜んでゲンジの側の同じ関心を喜んで見ようと自分に言った。それを考慮すると皇帝は子供がそれほど高い身分の血縁関係が得られることをとても嬉しく感じた。	左大臣はアオイと呼ばれる娘が一人だけいて、女の子の母で大臣の第一夫人のオミヤは王女の位で皇室に属していた。王冠の継承者は彼女に興味を持ってはいたけれども、大臣は彼女をゲンジと結婚することが好ましいと決めていた。皇帝が同意していることを知らされ、したがって、通過儀礼の儀式のために適切な立会人がいなくて結婚での親族に頼らなければならないと君主が大臣に伝えた時、彼は受け入れた。	付添い人としての役割を果たした大臣と王女である彼の妻には最愛の一人娘がいて、皇太子が関心を示していた。しかしながら、長い間迷った末、父はゲンジに彼女を差し出す方により傾いていた。この点に関して皇帝の気持ちをうかがった時、陛下は答えた。「とてもすばらしい、彼にふさわしい伴侶でなりえるだろう。今やもう彼の世話をするものは誰もいないようだから。」このように、閣下は前進を続ける激励をもらったように感じた。	かぶり物を授けた左大臣は皇太子から彼の一人娘に対して覚えていた胸騒ぎのためある種の不快感を覚えていた。皇族のある王女から生まれた彼女を彼が手塩にかけて育てたのにより傾いていた。この点に関して皇帝の気持ちをうかがった時、陛下は答えた。「今まさに彼に寝床を共にするものを与えるという必要条件のために、彼は保護者がいないのだ。」彼の決断は下され、大臣を元気づけることとなった。	冠を与えた左大臣はゲンジに送ることを望んでいて大変気を付けて育てていた自分の皇女腹の一人娘に対して東宮からの意思がありそうなことがわかりだった。宮殿からもその望みは帝の考えと合っていたものだった。「が、共寝の相手を与える件に関して、彼には後援者は付いていないことだ。」決意が固め、大臣に奨励の意志を示した。	角帽をつけさせた大臣は細心の注意を払って育てた王女から生まれた一人娘がいて、皇太子が彼女を切望していたが、大臣はまだ決心していなかった。なぜなら彼女を王子ゲンジにとっておきたかったからだ。このように考えていたのは宮廷の意図を知っていたからだ。陛下は「そうであっても、ゲンジが援助を欠いているこの状況において、寝床の付添人は彼にぴったりだろう。」と言って彼を説き勧めた。

<p>64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかされ光源氏は恥じらう「さぶらひに～」(2658／二五⑨／四六)</p>	<p>さぶらひにまかでたまひて、人々大御酒などまゐるほど、親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、もの慎ましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大柱に御衣一領、例のことなり。</p>	<p>一旦愛の杯を飲むために宮廷人が集まると、ゲンジは他の王子たちの間の場所を取った。左大臣が彼に向かって進み、ゲンジを赤面させる何かを耳元でささやき、ゲンジはそれに対する返事が見つからなかった。すぐに侍従が大臣に近づき、すぐに陛下の元に移動する命令を伝えた。王座の前で女官が白い衣装を置き、儀式に従って王子の立会人として与えられる長いスカートを彼に巻き付けた。</p>	<p>宮廷人は外にある部屋に引き上げて、ゲンジは皇室の王子の間に座った。その時大臣は耳に彼の計画をささやいたが、ゲンジはまだとても若く、彼に答えることができなかった。彼の混乱に気づいて、大臣がより良く説明しようとしていたところに侍従が現れて王室に彼が来るように要求した。急いで出発した。彼をお決まりの贈り物、白い大きなウチキと他の衣類が待っていて、しかるべく感謝をした。</p>	<p>ゲンジは待合室に引き上げ、王子の間の最後の席に座った。一方で集まった人たちは酒を飲んでいて。閣下は彼に結婚についてほめかしていたが、ゲンジは年齢からくる臆病さもあり、具体的な返事は何もしなかった。その時、個人的な書齋のある貴婦人が閣下に顔を出すように求めた。急いで出発した。彼をお決まりの贈り物、白い大きなウチキと陛下の名誉ある貴婦人の一人が王の手から閣下に贈り物を取り、閣下に渡した。慣習に従って白い女性的でとても大きなサイズのドレスと女性的な衣服の一揃いで構成されていた。</p>	<p>奉仕の間に移動し、神聖なるお酒を飲みに皆が向かった時、ゲンジは皇族の王子の下に場所を取った。大臣はいくつかべールに覆われたそれとない物言いをあえてするのだが、その男の子はまだひどく恥ずかしがる年齢だったので、彼に何と答えているか分からなかった。その時、大臣が皇帝の部屋で必要とされていると書いた伝言を侍従が携えてやってきて、大臣はそこに姿を現した。ある名誉ある貴婦人が成人の褒美として慣例の贈り物、すなわち、儀式の衣装のようなゆったりとした女性物の白いチュニックを彼に引き渡した。</p>	<p>奉仕室に移動して、皆神酒を飲むに向かった時に、ゲンジは親王の下に席を取った。大臣は意味ありげそうなことを言ったが、まだ恥ずかしそうな年の少年はどう答えるのは分からなかった。侍従の官が着て帝の御座所に召されるといふ伝言を大臣に渡して、向こうに赴いた。女房の一人は成人式に適した習わしの御札の贈り物を渡して、即ち白い女性用上着と儀式服ひと揃い。</p>	<p>ゲンジは入り口に引き上げ、そして陛下の酒の杯を受け取るために近づいているときに、ゲンジは皇室の王子たちの列の最後に座った。大臣が彼の耳元で自分の意図を遠回しに言ったが、彼の年齢の内気さもありどんな類の返事ももらえなかった。宮殿の職員の前長官補佐が彼を皇帝が読んでいと伝えて、大臣は近づいた。陛下のある名誉ある貴婦人が贈り物を取って彼に渡した。慣習が定めていたようにゆったりとした白い衣装と豪華な衣装の一揃いであった。</p>
<p>65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する「御盃のついで～」(2703／二五⑩／四七)</p>	<p>御盃のついでに、いときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや御心ばへありて驚かせたまふ。結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずはと奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。</p>	<p>王の杯で飲むとすぐに、皇帝は詩を唱えた。2つの家一つになるための祈願で、ヘアネットを縛ることで象徴される団結であった。大臣は返事をして、このヘアネットの王冠の色があせた時でさえもこの団結を解くものは何もないと断言した。王座の長い階段を下り、中庭で大きなお辞儀をした。</p>	<p>大臣にワインを一杯つぎながら、皇帝はとても真剣な提案を覆い隠していた詩を朗読した。「子供時代の縮れ毛が切れ、もう全く男性である。未来のために長く続く絆を結ぶのに都合がいいだろうか？」大臣は彼に答えた。「正直な心の成果である結び目を締めてください。そしてラベンダーが同じ忍耐強さを持ってその赤紫色を保ちますように。」閣下は橋を横切り、お礼をするために庭に出た。</p>	<p>酒のカップを差し出す時に、陛下は意味ありげな表現を自分の気持ちに与えた。彼の若々しい髪を縛るためのこの最初の結び目で将来に持続する幸せを享受したいという願いを君は結んだのか？この魂で髪を縛り、そしてこの長く続くことが運命づけられているすばらしい祈りと共に、一方で薄紫色の薄暗い色調は弱まらない。閣下は自分のお辞儀を行うために長い橋を下る前にそう答えた。</p>	<p>大臣のために乾杯をする最中に、グラスを伸ばす際に皇帝は声高にこう言った。あなたがその若者の髪の手束を刈っていたとき、私たちは長く続く絆の誓いをしたのだ。その中には大臣を喜ばせるような意図があった。結び目をしっかり閉めることが私のねらいでした。紫色がその髪の中で長く続くものである必要があるのでしよう。彼はうやうやしくそう言って、それから敬意の歩みを行うために長い階段を下りた。</p>	<p>大臣に祝杯をして器を挙げる際に述べた：若い子の髪の手束を刈る時に大人の生きるために契りを交わして絶えず緑のため大臣を喜ばせる意志を示した言葉。我がまともな意図は揺るぎなく縫う紫色はその髪の手束に長くあれ敬畏ぶかく言って、長い階を下ってお礼の舞をした。</p>	<p>酒の杯を差し出すときに陛下は詩を朗唱した。初めて子供の髪の手束を縛るひもで長い人生を分かち合うことを誓う心を君はつないだのか？はっきりとした意図がありそれに向けて大臣の注意は向かった。私は髪を縛った深いひもで心をつなぎました。その忍耐の深い紫色があせさせなければいいのですが…大臣は答えた。長い橋から降りて感謝の舞をした。</p>
<p>66 左大臣や親王たちは祿を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の～」(2730／二六④／四七)</p>	<p>左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据えてたまはりたまふ。御階のもとに、親王たち上達階連ねて、祿ども品々にたまはりたまふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なん承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなど所狭きまで、春宮の御元服のをりにも数まさされり。なかなか限りもなくいかめしうなん。</p>	<p>この際に王家の馬小屋の馬と王家の鷹狩りの獲物の鷹が姿を現し、ゲンジに向けた贈り物であると布告された。階段の下では王子と宮廷人たちが贈り物を嘆願して集まり、すべて自然の贈り物が与えられた。賢明な右大臣は皇帝の同意のもとで果物のかごを贈った。たくさん贈り物が床を覆った。皇太子の通過儀礼のときに行われた儀式の際にはこのように多くは見られなかった。</p>	<p>そこでは皇室の厩から来た馬と鷹が贈られた。また位に応じて儀式に参加していた王子や主要な宮廷人にも中国製の盆や籠や箱に入った食糧が贈られた。それらは大臣が皇帝の指示に従って準備させたものだった。全体的に見て、コキデンの息子に順番が回ってきたときに行われたものよりもずっと見事な儀式であった。</p>	<p>そこでは左の皇室の厩舎からは一頭の馬を、侍従の書齋からは止まり木にとまった鷹を受け取った。それから王子と主要な階級の貴族たちはそれぞれが贈り物を受け取るために段の下で列を作った。その同じ日、右の大執事が皇帝のために彼の命令に従って、イトスギの木でできた箱に入ったおいしい料理と果物のかごを準備していた。米の玉と毛織物の入った大箱があまりにも多かった（もちろん皇太子の成人の祝いの時よりも多く）、全部のための場所がほとんどなかった。ゲンジの儀式は本当に素晴らしい気前の良いものであった。</p>	<p>左の厩舎からは馬を、私的な執務室からは投げ縄に入った鷹が大臣に授けられた。階段の下では、並んでいる皇室の王子と高官たちが位に応じて臨時収入を受け取った。陛下の前準備された箱やかごの近くに贈り物を準備する命令を受けていた右の大参事がいた。中国の箱には米と贈り物が入っていて、皇太子が成人した日よりも多くさえあり、あまりにも多くて場所一杯にしていた。実は、豪華さは皇太子の場合よりも盛大であった。</p>	<p>左の厩舎からの馬一匹、内の実務室から止まり木付けの鷹を賜った。階の下に親王たちと高官が並べ、それぞれの階級によって祿を賜った。右の代弁が祿を準備する命令を受け、上の前に敷かれていた箱と籠の間にいた。ご飯と進物が含んだ唐の小箱は、皇太子の成人式の日よりも多くて、所狭く溢れていた。事実、儀式の壮観は皇太子の時の儀式を超えていた。</p>	<p>陛下は左の皇室の厩舎の馬と皇室の秘書庁の止まり木の鷹を彼に与えた。皇室の王子たちと上級貴族の一員たちは階段のふもとで列を作った。違う階級に応じた贈り物を受け取った。その日にゲンジが皇帝に贈った曲がった木の箱と果物が入った箱は陛下の指示に従って左の政府の秘書官によって準備されていた。一口サイズの米と贈り物が入った中国の大箱があまりにも多かったので部屋が狭い場所のように思わせた。皇太子の成年の祝典のそれよりも量で上回っていた。全てが壮観であった。</p>

67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768／二六⑧／四七)	その夜、大臣の御里に、源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづきこえたまへり。いとぎびはにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひきこえたまへり。女君は、少し過ぎしたまへるほどに、いと若うおはずれば、似げなく恥づかしとおぼいたり。	その夜ゲンジは大臣の邸宅に案内され、そこで盛大に婚約式が行われた。王子は幼児の繊細な外見をしていると判断されたが、彼の美しさは皆を驚かせた。彼の婚約者は4歳年上であったが彼を子供として扱った唯一の人であった。より一層恥をかかされたように感じていた。	日が暮れるとゲンジは左大臣に付き添って名譽ある招待客として彼の家に付き添って、翌日結婚式の準備が動き始めた。家族の全員がゲンジに魅了された。彼の妻になる女性を唯一の例外として。彼より4歳年上で、明白な年齢の差は彼女を大いに居心地悪くした。	その夜、陛下はゲンジを大臣の家に送った。閣下は彼を歓迎し、そこで行われた儀式に目がくらむほどの華麗さを与えた。まだ男の子にすぎないにも関わらず、家族はゲンジの美しさを驚くべきものであると思ったが、閣下の娘はいくら年上で、彼女にとってはあまりに若すぎ、恋人として想像することは恥づかしかった。	その夜、ゲンジは大臣の邸宅に姿を現し、盛大に迎えられ、とても特別な配慮をされているように待遇された。彼は婚前の礼儀に従い、若者らしい気品を持って振る舞い、彼の優雅さが不安ほど大臣を仰天させた。娘の方は一方彼が自分よりずっと幼いことが分かり、明らかに彼より年齢で上回っていて、混乱した様子であった。このような結婚は不適切で不名誉だと思いつつながら。	その夜、ゲンジは大臣お屋敷に紹介され、丁寧な作法のなかで歓迎されてとても細かな配慮を受けた。婚礼前の式の際、若年なりの優美に行い、その凛々しさは大臣を心掛かりな困惑させた。少女の方は逆に、自分より大変年下だと思って、実は年齢を明らかに上回ったため、この縁組みは不釣り合い無礼なことだと思って狼狽した。	その同じ夜ゲンジを大臣の邸宅に贈った。結婚式が例を見ない大きさをもって行われた。まだ子供であったが美しくそして魅力的だと思われた。王女は何歳か年上で彼を年齢のせいでは不適切だと感じ、恥づかしく思っていた。
68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の〜」(2800／二六⑨／四八)	この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏の一つ后腹になんおはしければ、いづ方につけてもいと華やかなるに、この君さへかくおはしそひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。	該当箇所はナシ	しかし、彼の父と皇帝の姉妹の彼の母は『光り輝く王子』が娘婿に変わるという考えに興奮している様子だった。右大臣で明白な後継者の祖父は少し屈辱を感じることを避けることができなかった。	閣下は陛下からの一番から高い配慮を享受し、そして加えて彼に娘を与えた王女は陛下の姉妹であった。したがって、両方が最高の配慮を享受していて、そして右大臣はゲンジが彼らと一緒に今やうまくいっていなかった。いつか皇太子の祖父として王国を治めるよう運命づけられているとはいえ。	当の大臣は皇帝の際立ったひいきを得て、加えて、第一夫人つまり王女はそのお嬢さんの母であるが、陛下と同じ皇后から生まれていたため、地位は最も名高いものであった。それに加えゲンジをすら娘婿として加え、右大臣の名声は皇太子の祖父としていつか帝国の仕事を知る運命にあったが、比較すると無に帰したようであった。	この大臣は帝の際立った寵愛に値し、その北の方も、少女の母であるの宮は帝と同じ大妃に生まれていたため、両方の故にその地位は誰よりも高貴なことに、婿としてのゲンジは加わってきて、皇太子の祖父として国の政を知ることになる右大臣の権威は、比較的無しになった。	この大臣は例外的な名声を享受していた。そして正妻で王女であり一人娘の母は皇帝を産んだ同じ皇后の娘であった。それで両側が大きな影響力を持っていた。この王子、つまりゲンジが彼らに加わる時、右大臣の力は一皇太子の祖父としていつか世を支配するであろう人だったが一無に帰したように見えた。
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制しよう「御子ども〜」(2833／二七①／四八)	御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は蔵人少将にて、いと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぎしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。	該当箇所はナシ	アオイは左大臣の同僚の一人娘であったけれども、左大臣は妻や内縁の妻に山ほどの息子がいて、彼らの一人のト・ノ・チュジョは男らしく魅力的な顔をした若い男前ですでに皇室警護隊の中尉であった。左大臣には決して共感をしたことがなかったが、右大臣は若い将校の価値を無視せず、彼の四女と結婚させた。ト・ノ・チュジョに対して抱いていた愛情は左大臣のゲンジに対するそれに劣ることはなく、だから両方の家族は礼儀を持って公に扱われるため、そして必然的に宮廷人たちの目には彼らを笑ひものにするお互いの軽蔑を避けるための十分な理由を持っていた。	閣下は様々な貴婦人との間に多くの息子がいた。王女との間には、娘の他に、右大臣が娘婿として望んでいた侍従の中尉がいた。若者の父とはあいにいい関係ではなかったけれど、結果的に彼の愛する4番目の娘をカップルにした。若者をゲンジの義父がゲンジを扱っていたように扱い、2人の娘婿はお互いにとても良い関係を維持していた。	左大臣は多くの女性との間に多くの息子がいて、とりわけ王女から生まれた息子は既に私的な執務室の警護の指揮官であり、とても若く好感が持てた。今は、両大臣の関係は良い関係とはかけ離れているが、右大臣はそのような才能のある若者を無視することができず、大切に育てた四番目の娘の結婚を申し出た。彼の新しい娘婿への評価は他方のゲンジへの高い評価に張り合う者だった。両家はこのように確かにできる限りの最上の結びつきを得た。	左大臣は沢山の女性たちに子供が多い中に宮に生まれた一人の息子は既に内の事務室の長官になって、とても若くて快い青年であった。二人の大臣の間関係は決してよいと言いがたいが、右大臣はこんな才能のある青年を無視すること出来なくて、とても気を使って育て上げた四つ目の娘を嫁にやった。新しい婿への気配りと他の大臣のゲンジへの尊重と競い合っていた。両家は最も理想的な縁組みを獲得した。	左大臣は様々な女性の多くの息子がいた。彼の正妻については王女には中尉で皇室の秘書庁の長として職務についていた息子がいて、とても若く美しかった。右大臣は彼を無視することができず、大臣同士があまりうまく行っていないにもかかわらず、細心の注意を払って育てた4番目の娘と結婚させた。大臣は中尉を左大臣の家でゲンジが享受したのにも劣らない大変な大きさをもって受け入れて、両者は義父母と理想的な関係を持っていた。

70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は～」(2863／二七④／四九)	源氏の君は、上の常に召しまつせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類ひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見ぬ、似る人なくもおはしけるかな、大殿君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。	皇帝はまだ宮殿でのゲンジの奉公を要求していて、そのまゝ別の邸宅に身を落ち着けなかった。彼の心の一番心の奥底ではいつもあの繊細な人々を考えていて、他の人よりもはるか優しく、彼の唯一の望みは彼女に似ている人たちと一緒に頻りにいることであったが、ああ、彼女に似ている人は誰も見つかっていなかった。彼を取り囲む人たちは王女アオイに大きな注意を払っていたが、彼は彼女には何の魅力も見出すことができなかった。その若い宮殿の女性は子供の頃の夢を実現していて、この強迫観念が本当の苦しみを彼女に生み出した。	いつもよく父親に付き添っていたので、ゲンジは彼の未来の妻の家でごくわずかな時間を過ごした。彼にはフジツボが至上の美の化身であり、彼女に似た誰かを見つけることを夢見ていた。簡単では決してない企てであった。彼の婚約者もまた美しく、いつも豪華さに囲まれ生きてきていたが、ゲンジは一人が相手のために作られたのかを疑っていた。彼の中にフジツボが目覚めさせた願望はすぐさま真正正銘の苦悩に変わった。	ゲンジは自分の家に自由に住むことができなかった。陛下がかなり頻りに彼を呼びつけていたからである。彼の心ではフジツボの比類ない美しさだけを見ていた。「ああ、彼女は私が結婚したい女性だ！」と自分に言っていた。「他に彼女のような女性はいない。」閣下の娘は疑いなくとも美しくてよく教育をされていたが、彼女に対しては少しの愛情しか感じていなかった。他の女性が彼から心を奪っていたのだ。	ゲンジは君主が常にそばにいてを要求したため、宮殿の外の婚約者の邸宅に住むことができなかった。彼の心の中には比類なく思ふフジツボの貴婦人の心像だけが刻まれていた。彼は目下と同じような女性にいてほしかったが、ここは似た女性はいなくて、大臣の娘に関しては確かに魅力的で完璧な教養を備えていたが、決して心を動かされたとは思えず、そしてわずかな年月の自身の情念のため苦しむまで思いをめぐらせ悩んだ。	上の御前にお供するのを常に命じられていたゲンジは、宮殿の外に、婚約者の邸宅で住むこと出来なかった。その心の中にただ唯一無二のフジツボの方の面影を焼き付けていた。目の下に同じような女性があつて望んでいたが、他の匹敵できる人はなかった。大臣の娘は、育ちの良い魅力的な方だと思っていたが、全然その心を震わせていなくて、年の若い情熱に悩まされて、苦しいまで思い煩っていた。	陛下はいつも王子ゲンジを呼ぶように命じていて、それゆゑ自分の邸宅、つまり左大臣の家で静かに暮らすことができなかった。心の奥底では藤の中庭の内縁の妻ほど美しい人は誰もいないと感じていた。彼女の中に自分の夢の女性、比べることができない人を見ていた…そして彼の妻の大人の館の貴婦人はとても美しく洗練されている人だと思っていたが、心からは離れたところに彼女を感じていた。なぜなら彼の心は子供の時から痛みを引き起こすほど痛になっていたからだ。
71 宮中で光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり～」(2912／二七⑨／四九)	大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めにて、内裏住みのみ好ましくおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかてたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしづきこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、選(え)り整えすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおぼしいたつく。	この後は貴婦人たちの広間を訪れることも止めて、何度か特定の祭りを挙げる機会にコトと笛の音と一緒にした声を聞きながら自らを慰めていた。5あるいは6日の不在の後、2ないし3回婚約者の家に行った。彼の義父はこのだらしさを彼の極端な若さのせいにして、重要視せず、いつも最も頭がよく心地良い若者たちを呼び、続けて遊びを企画して彼を楽しませた。	すでにもう大人だったので、貴婦人の部屋へ自由に立ち入ることを止めていた。結局それでも、日が暮れると音楽を奏であった。若者はフジツボの声とコトの伴奏をするために優しく笛を吹いた。今やカーテンの向こう側からしなければならなかったけれども、このように彼女に自分の切望を知らせようとして自分の夢の貴婦人の声聞いて慰めた。未来の義父の家で泊まるよりも宮廷での生活を好んでいた、だからサンジョの宮殿で過ごす2あるいは3日ごとに6あるいは7日は父親と一緒にいた。大臣はこの行動を重要視せず、新郎の若さのせいだとして、娘婿に夢中で居続けた。若いカップルに従事するために見つけることができる最もかわいい侍女を選び、自宅にいるときはゲンジが楽しむことができるように継続的に遊びや見世物を企画した。	ゲンジは今や大人だったので、陛下はもう以前のように一緒にいるためにフジツボのすだれを横切ることを許さなかった。音楽があつたときには、彼女はコトを弾き、彼は横笛で伴奏していた。これとすだれ越しの彼女の声のささいな音が慰めで、宮殿ではない他の場所に決まっていたはなかった。5日か6日の間陛下に仕えた後にだけ、時々閣下の邸宅で2、3日過ごすことができたが、彼はほとんど若かったので大臣はあまり気にせず、娘婿を寛大に扱った。閣下はあいている名譽ある貴婦人の間から一番平凡でない者たちを選んだ。彼女たちは男の子のお気に入りのお晴らしの時間を共有し、彼の事をとてもよく世話をしていた。	成人の年齢に達したので、皇帝はもうカーテンの後ろに入ることを許可しなかった。夜は音楽を奏で、遠くで彼女が奏でるコトに合わせて笛を吹き、このように彼のいくらかの熱を伝えていた。王女の声の消え行った反響が彼にとって慰めであった。宮殿に住むことは第三通りの邸宅の生活よりも好ましかった。宮廷での奉仕に五、六日を捧げるために大臣の家では二～三日を過ごすだけだったが、しかしながら大臣は、彼はまだまだかなり若いのでそのような無礼を許し、注文をつけるどころかいつもへつらって彼を迎えた。夫婦へのお仕えのために大臣は侍女の中でも見つけることができるであろう最も愛らしく勤勉な者たちを探して選んだ。ゲンジを満足させるための気晴らしを計画した。	成人になっていたため、帝は御簾のうちに入ることを許されなくなっていた。夜の管弦の時に、彼は笛を吹き、遥かに彼女の引いたコトの響き合っていて、その気持ちを少しでも伝えていた。宮の消えてゆく声の響きは慰められた。三条の邸宅での生活より宮殿にいる方が好ましかった。宮殿での宿直の五日六日に比べて二日三日しか大臣の邸宅で過ごしていなかったが、まだとても若い上に無関心を許されていて、注意するどころか却っていつも通りに丁寧な扱いで迎えた。彼は一組の奉公するような女房を最も気延へのよい小綺麗な身なりの方々を探した。ゲンジを喜ばせるような様々遊びを準備した。	大人になった後、藤の中庭の内縁の妻はすだれの内側に以前そうしていたようにもう彼を入れていなかった。そして音楽を奏でる機会には彼女のハーブと彼の笛の音を通じて通じ合った。彼女の細い声がゲンジに慰めをもたらした。それゆゑ宮廷に住みたかった。そこで5あるいは6日過ごし、2あるいは3日の間大臣の館に行っていた。何度も再び行ってしまっても、彼はまだ若かったので、大臣は彼を非難せず彼を助けようと努力した。大臣は娘と婿のそれぞれにこの世で比類ない付き添いの貴婦人を選び割り当てた。彼女たちはゲンジの世話をしようと努め、疑いなく彼には興味深かった気晴らしの時間に働いていた。

<p>72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には～」(2976／二七④／五〇)</p>	<p>内裏には、元の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に旨旨下りて、二なう改め造らせたまふ。元の木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばやとのみ、嘆かしようおぼしわたる。光る君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたてまつりけるとぞ、言ひ伝へたとなむ。</p>	<p>正式な住まいとして彼の母のものであったシゲイサの宮殿は彼に取っておかれて、母の召使たちもまた彼のものとなった。祖母の家は倒壊の恐れがあり、帝国の労働省が修復に取り掛かる命令を受けた。周囲の森と丘の配置がいつもその場所にいることを心地良いものにした。泉が拡張し、所有地は多くの細部とともに美しくなった。</p> <p>「もし私が好きな人と一緒にここで住むことが許されるなら…」と悲しみとともに考えていた。ヒカル（輝くもの）の通称は韓国人の占い師の言葉のおかげで彼に与えられたものだと言われている。</p>	<p>皇帝は宮殿に彼の母が占めていた部屋と彼女に仕えていた全ての職員を彼に割り当て、彼のためにニジヨにある祖母の家をすばらしい結果と共に再建させた。邸宅はすでにいくつかの小さな森や洗練された趣味の人工池を備えていて、昔の輝きを返すのは難しくなかった。それは『彼の』家になるはずであった。親族の重荷なしで一人でいたい気持ちを起こさせるかもしれないので。工事が終わって、ゲンジは邸宅を歩いて回り、立ち止まって全ての細部を見て楽しみ、彼の夢の貴婦人を連れてくることができればどのくらいこの魅力的な家をもっと良くなるだろうと考えてばかりいた…。</p>	<p>宮殿内の彼の住居はキリツボであり続けていて、陛下は彼女の母の名誉ある貴婦人たちと一緒に彼に仕えさせるために養った。また保持の部門と手工業の部門に彼の母の家を立て直すように命じて、入念にそれは行われた。木々と庭の配置はすでにとても心地よいものであったが、とても騒がしくかつ慌ただしく働き、とても美しく湖を大きくした。ゲンジは止むことなくため息をつき、彼の本当の愛する人が彼と一緒に住むために引っ越すことを望んでいた。彼の通り名である光り輝く殿下はコマの男性が賛辞としてつけたと言われている。</p>	<p>宮殿では皇帝はゲンジにシゲイサの部屋を与えた。その部屋はかつて王子の母のコキデンの貴婦人のものであり、前の召使いがそこで続けるような面倒をみた。キリツボの実家に関しては、建築の事務室と大工に知らされた命令により、並はずれた方法で復元された。昔の木立や坂、その住まいへの魅力を備えていた全て、そして池も拡大され、感じよく飾られ、小さな宝石になった。しかし、一つの思いが若い紳士の心を占めていた。嘆かわしくこのような場所に住みたかったと自分に言った。彼の熱望に答えてくれる女性と一緒に。「輝けるもの」の通称のヒカルが彼への賞賛の中でコマの預言者が与えたものだ。もし少なくとも伝承が示すことを信じるならば。</p>	<p>帝は、曾て御子の母コキデンの方の部屋だった、宮殿のシゲイサ淑景舎をゲンジに与えていて、昔の奉公する人々をその場で残していた。なくなった方の里屋敷を、建設事務室と木工局に命令して、特に修理した。昔の並木、坂、その邸宅の魅力を高めていたすべてのものを、池も含めて、玉のように飾りして大きくした。が、若い紳士の心に一つの思いは独占して、深い望みに適う女性とともにこのような所で住みたいと残念がって思っていた。ヒカル光の異名は、感嘆するコマ高麗の占い師に与えられた。少なくとも、いわれの言い伝えを信じるに値するならば。</p>	<p>宮廷では陛下は彼に住居にかつての桐の中庭を割り当て、安らぎの貴婦人の名誉ある貴婦人を解雇する代わりに、ゲンジへの奉仕に留まらせた。祖母の館に関しては修理の工房と装飾の役所に命令を下し、すばらしい豪華さをもって再建させた。庭の気と山の配置は優雅でとても華やかに湖は堂々と拡張されていた。ゲンジはただ暗澹として自分の思考を占めている人、つまり藤の中庭の内縁の妻に付き添われてこのような場所に住むことができたならと考えていた。「光り輝く王子」の通称を称賛として彼に与えたのは朝鮮の人相学者だったと語られている。</p>
--	--	--	--	---	---	--	---